平成27年度広域科学教科教育学研究経費報告書

国際化時代を視野に入れた文化と教育に関する総合的研究

研究代表者　石井正己

平成28年（2016）2月発行

目　　次

特集　中国・日本における歴史・文化・教育

清朝康熙年間の北京における回漢関係―『岡志』を中心として―　宮島泉　4

在満日本人子弟用『満洲補充読本』と近代文学作家
―「大正新教育」の〈自由性〉をめぐって―　船越亮佑　13

『談論新篇』と満鉄中国語検定について　楊鉄錚　22

木下杢太郎と『支那伝説集』
―中国南方の旅とフランス人宣教師Léon Wiegerの影響―　范文　32

特集　日本人が見たアジアの植民地

日本人が書いた植民地紀行　石井正己　42

『世界の果てのこどもたち』が生まれるまで　中脇初枝　46

薄田斬雲が見た朝鮮　金容儀　52

シンポジウム　日本人が見たアジアの植民地

漱石の満洲、虚子の朝鮮　石井正己　58

上海を訪れた日本人の紀行―大正期を中心に―　楊静芳　62

伝説の描く歌枕的「風景」の限界
―瀬戸内海の桃太郎と大陸の馬車と―　野村典彦　69

乱読の癖：明治大正のエリートと子供時代の読書経験
メレック・オータバシ　78

喪家のノリパン（遊びの舞台）と送別祭りをする人々　李京燁　85

高畑勲「かぐや姫の物語」―循環する「生」の物語―　安松拓真　91

編集後記　96

凡例

一、現代では不適切な表現と考えられる言葉があるが、歴史的な意味を考慮して残した。

一、論者が旧漢字で引用した表記があるが、便宜上、新漢字を使ったところがある。

一、敬称は省略した場合が多い。

一、行間が狭いため、振り仮名を漢字の後に（ ）で入れた場合がある。

『岡志』から読み取る清朝康熙年間における北京の回族動態
―「災異」の章を中心として―

宮島泉

1　はじめに

清朝康熙 3 年、北京で小さな事件をきっかけに回族と漢族の械闘(1)が勃発した。事件の舞台となったのは宣武門外西南に位置し、回族コミュニティーとしてその名を知られる牛街(2)である。およそ 400 人から 500 人程度のこの械闘は、回族反乱の歴史から見れば、極めて小規模なものであるが、当時の北京の回族に大きな影響を及ぼした。

清朝康熙年間は清朝の基盤形成の時代として知られているが、地震等の自然災害に加え、三藩の乱をはじめとして各地で反乱が起き、世の中が混乱した時代でもあった。特に、康熙年間はガルダン・ハーン（噶尔丹汗）(3)との抗争が激化しており、康熙帝はガルダン・ハーンを打倒しようと兵を引き連れ、度々西方へと遠征に出向いていた。

清朝における回族と漢族の対立(以降回漢対立とする)は主として中国の南方地域に集中しているが、地方に留まらず都市部においても両民族は同様に対立関係にあり、些細な諍いは頻繁に発生しており、北京もまた例外ではない。

清朝康熙年間の北京の回族に関しては、牛街を中心に記されている『岡志（こうし）』という地方誌から伺い知る事ができる。『岡志』の中の「災異」という章には回漢の対立や清朝政府による裁判等に関する記述も確認でき、当時そのような資料を記し後世に残すことが如何に困難かを考えれば、該資料の資料的価値は極めて高いといえるだろう。『岡志』は、原本はすでに散失してしまったが、幸いにも写本が 2 冊現存している。本稿では『岡志』の写本を分析し、清朝康熙年間における回漢対立をはじめとして、当時の北京の回族の人々の動態について明らかにする事を試みたものである。

2　回族とは

回族は、中国でイスラム教を信仰する民族集団の一つである。回族研究でその名を知られる中田吉信氏は『回回民族の諸問題』（1971）において当時の北京政府の民族政策を支持する回族研究者の主張を整理し、以下のように述べている。

> 回回民族（回族の意）は中国各地に散居して、イスラム教を信仰している民族で、中国語すなわち漢語を日常語としている。トルコ、イラン、アラブ等の外来民族の子孫を中核としているが、これに漢民族その他の諸民族の血が混入され、歴史的に形成された民族である(4)。

2010 年時の統計調査によれば人口はおよそ 1 千万人であり、人口総数としては漢族、チワン族、満州族に続き第 4 位に名を連ねる(5)。

回族の起源は諸説あるが、唐朝第 3 代皇帝高宗の永徽 2 年（西暦 651 年）ウマイヤ朝第 3 代カリフ・ウスマーンが派遣した使節の渡来が、記録に残る中国とイスラム教徒の出会いだというのが定説である(6)。また先に述べたように回族は外来民族を中核としているためかあまり土着せずに、商業的なことを要因として移動する傾向にあった。回族は中国各地に「大分散、小集住」（特定の地域に集中せずに広範囲に散居するが、個々の居住地域においては集住する）と称されるような分布状態で居住し、清真寺と呼ばれるイスラム教寺院が居住地の中心に建設され、生活の中心的な役

割を担っている。北京の回族も同様に清真寺の周囲に集住しており、1939 年の南満洲鉄道調査部北支経済所の調査によれば、清真寺は北京市内に 50 座確認されている(7)。

3 清朝の回族

清朝の回族に対する見解は様々であるが、清朝を迎えると回族の反乱が頻繁に発生するようになり、回漢の対立は一層激しいものとなった。

> 清代は、明代に形成された中国的なイスラム教徒社会がさらに発展する時代であった。この時代のイスラム教徒社会をめぐる特徴のひとつは回漢対立(8)の激化といわれる。イスラム教徒が多く分布する地方で、イスラム教徒と漢人が、武器を持って衝突する所謂「械鬪」が頻発した。それは、地方社会におけるイスラム教徒社会の存在が大きくなり、漢人社会との接触の機会が増えた事も一因だとされる(9)。

土屋氏は「中国のイスラム教徒—歴史と現況—」(2004)において清朝の回族について上記の如く述べ、地方社会におけるイスラム教徒社会の台頭を対立激化の原因の一つとして挙げているが、これは地方に限らず都市に関しても同様のことが言えると筆者は考えている。

政府の回族政策に関する見解も同様に研究者により様々であるが、林幹氏は著書である『清代回民起義』(1957) において、清朝政府の回族に対する圧迫が特に深刻であったこと、また清朝政府が故意に回族と漢族の民族関係を悪化させたこと等を述べている。

> 清朝統治階級が回族に実施した政策とは、即ち宗派の違いを利用して回族の内訌を挑発することで回族内部の力を弱め、回族の地主教主を利用し回族労働者を圧搾したことである。更に悪辣であることには漢族及び回族の関係を挑発し、漢族への優遇を口実に漢族の悪質分子に回族を圧迫させ、回族が恨みを募らせ漢人を仇殺するよう促した。清朝統治者は漢族保護の名目のもと出兵させ回民を殺戮し、回民と漢人が相互に憎しみ合うように仕向け、このような負の連鎖は留まることがなかった。…後略…(10)

更に具体的な圧迫状況に関しては以下の 6 カ条に要約している。

(1)回民の人格を蔑視した。これは清朝の公私文書で回民を「回子」「回逆」「回匪」「回賊」と称し、「回」の字に「犬」を意味する「犭」を加えた「狗」という字を用いて、回民が人間でないとした。
(2)回民の生命を少しも保障せず、回漢相互の仇殺を挑発した。(例：道光 23 年（1843 年）の雲南省永昌府（現在の保山県）における漢族「香把会」による回民の虐殺事件等)
(3)回民は清朝統治者及び回漢地主の剥削を受け、その生活は極めて窮乏を瀕した。
(4)回民の武装を民族仇恨を製造する道具として利用した。
(5)回民の法律上の地位を漢民に比べ低いものとし、回民には重刑を課した。満族統治者たちは各民族間で矛盾を生じさせ、特に回族、漢族の民族関係を悪化させることで漢族の地主階級が回民を虐殺するよう促し、更に法律上の地位も故意に漢族より低いものとした。
(6)イスラム教を蔑視し、圧迫・弾圧を加えた。イスラム教が清朝に影響を及ぼすことを恐れた清朝統治階級者はイスラム教を圧迫した(11)。

しかしこれは回族の立場に立ったやや偏りのある主張とも捉えられる。林氏自身も該書第 3 章の冒頭部分で「…使得各族的政治,经济和文化长期陷于停顿衰退的境地（各民族の政治、経済及び文化は長期的な停滞及び衰退の境地に立たされた)」(12)と認めている部分もあるように、清朝に於いて少数民族はおおむね「犭」あるいは「虫」という字を用いて表現される等、程度に差はあったとしても同様の境地に立たされており、これは回族に限って言えることではなく、そのことを念頭に置いておく必要があるだろう。

中田氏は回漢対立問題の発生はモンゴル王朝下のイスラム教徒の横暴、搾取にあると述べ、更に中国研究者の回族の反乱に対する見解について以下のように述べている。

海外の識者は、中国におけるイスラム教徒の反乱は、清代にはじめて起こったもので、それ以前はなかったとしている。このためか、反乱の原因をもっぱら清朝の政策、特にイスラム教徒への弾圧政策、あるいは回民と漢民を故意に対立せしめた愚弄政策に帰する者が多い。顧頡剛もこの意見であり、白寿彝、林幹等の北京政府治下の歴史学者の意見も同様である。しかし、イスラム教徒の叛乱は清代にはじまるものではない(13)。

確かに中田氏が述べているように、回漢対立はイスラム教が中国全土に広まり、回族の人々が色目人として優遇された元代に生じたと考えるのが妥当であるが、しかし清朝は満州族が政権を握る少数民族統治であり、満州族は多民族である漢族を中心に統治を図ろうとしていたこともまた事実である。

清朝康熙年間は先ほど述べた如く世の中が混乱した時代である。清代以前より回漢の対立は生じていたが、少なくとも康熙年間の北京においては情勢不安や八旗(14)の北京城内設置による北京の大幅な経済停滞から生じた貧困化に加えて、土屋氏の述べたイスラム教徒社会の発展、更にその時期に北京の回族が勢力拡大を図ったこと等から両者の対立はより深刻化したと考えられる。回漢対立の激化を裏付ける資料として挙げられるのが冒頭部で述べた『岡志』である。

4　牛街の形成に関して

牛街は現北京市宣武区西南に位置し、宣武区の 8 区ある行政区画のうちの一つである。東西は 2 キロほどにわたり、現在は回族だけでなく、漢族、満族、モンゴル族、チベット族等の多民族居住地区としても知られる。街の看板には漢字と共にアラビア語が併記され、街にはムスリムのためのレストランやスーパーが立ち並ぶ。牛街の中心部には牛街を象徴する牛街礼拝寺が建立されており、回族の人々に限らず、多くのイスラム教徒が訪れる場所として知られている。

図 1：牛街(15)

牛街の歴史は長く、その起源は諸説あるが、宋の時代には形成されていたといわれる。牛街が形成された時期を判断する基準の一つとして牛街礼拝寺の建立年代が挙げられる。回族の人々は宗教的な要因から頻繁に清真寺に訪れるため、彼らにとって日常生活と清真寺は密接に関連している。因って牛街のコミュニティの形成時期を明らかにするには、まず牛街礼拝寺の建立年代を明らかにする必要があるが、これに関しては資料が乏しく、正確なことは未だに明らかになっていない。諸説ある中で、通説として知られるのが宋の至道 2 年乃ち遼の統和 14 年（996 年）に建てられたという「宋遼説」である。この説の根拠としては建立千年の祝賀会を挙行したことによると言われている。

> 1996 年，人们就以这一说法为依据，为牛街礼拜寺举行了建寺千年的庄祝会。这一说法主要是根据该寺曾存在过的一块木质横匾上所刻写的古教西来历代建寺源流碑文总序略。（1996 年に牛街礼拝寺が建立千年の祝賀会を挙行したことによる。この説の根拠としては当該の清真寺にかつて存在した木製の横額に書かれていた「古教西来歴代建寺源流総序略」が挙げられる。）(16)

牛街の正確な建立年代は明らかではないが、古くから北京に住む回族の人々にとって中心的且つ

象徴的な存在であったといえよう。

5 『岡志』について

先程述べたように『岡志』とは清朝康熙年間の北京の牛街を中心とする回族の人々について記されている資料であり、回族唯一の地方誌といわれる。地理、風俗、人物、教儀等から構成され、その当時の牛街について詳細に記されている。原本はすでに散失し、現存するものは写本に過ぎない。写本も現在は北京の首都博物館で厳重に保管されている。著者が目にすることができたのは劉東声・劉盛林氏により写本を活字化し、1991 年に出版された『北京牛街志書―《岡志》―』(以降『志書』と記す)である。筆者は『志書』を手掛かりに『岡志』を分析し、当時の回漢関係や回族の人々の動態を明らかにすることを試みた。まず、劉東声・劉盛林による「関於《岡志》」(1992) をもとに『岡志』の書誌的な情報について整理し、以下に表を作成した (表 1 参照)。

表 1 :『岡志』書誌情報(17)

原本保管場所	牛街礼拝寺(いつから保管されていたのかは不明)
原本所在	散失
現存する写本	2 冊
写本経緯	1 冊目 所有者　　：北京の著名な歴史学者張次溪 (ちょうじけい) が秘密裏に保管 写本作成者：沈風儀 (しんふうぎ) (詳細不明) が清道光 11 年 (1831 年) (18)に作成 掲載内容　：順不同部分あり、「災異」の章あり
	2 冊目 所有者　　：牛街礼拝寺 (※元々の写本は 1950 年代の動乱の際に散失) 写本作成者：劉仲泉 (りゅうちゅうせん) …解放以降成立した民主管理委員会の委員が 1955 年作成 掲載内容　：欠落部分多々あり、「災異」の章なし ※写本名：『北京牛街岡上礼拝寺志草稿』 牛街礼拝寺にかつて保管されていた写本をもとに作成された抜粋版
著者	著者が特定可能な記述なし ※作者は回族出身、牛街について熟知している康熙から雍正年間に「仕清」し、医師として活躍した「趙公英 (ちょうこうえい)」という人物である可能性が高い。
作成年代	年代が特定可能な記述なし 作者が康熙年間の後半から雍正年間初期の人物であること、資料の大部分が康熙年間に関して詳細に記されていることから、最も早くて雍正年間の初期に記されたと推定される

以上に挙げたのが 2 冊の写本の経緯である。つまり、劉東声らが『志書』を作成した 1988 年時点で『岡志』の写本は 2 冊存在した。1 冊目が沈風儀氏の作成版であり、2 冊目が抜粋本である劉仲泉氏の『北京牛街岡上礼拝寺志草稿』である。著者や年代等の情報は一切記載されていないことからも、当時このような資料を作成することが極めて困難であったことが伺え、2 冊の写本は清朝康熙年間の回族を知る大きな手がかりになり得る。

6 『岡志』「災異」について

『岡志』には「災異」という章が存在する。この章には清朝康熙年間において北京の回族に影響を与えた 3 件の事件について記されている。第一の事件が康熙 3 年 (1664) に起きた天壇の械闘、第二の事件が康熙 18 年 (1679) におきた北京大地震、第三の事件が康熙 33 年 (1694) に起きた賽一徳 (サイード) の謀反容疑である。

3 件の事件には、清朝の官吏を批判する記述や裁判の経緯、更には回漢の対立について記されているが、この章は劉仲泉氏が作成した写本にはみられず、沈風儀氏の作成した写本でのみ確認できる。これは劉仲泉氏の写本が牛街礼拝寺で公開されていたこと、劉氏が民主管理委員会の委員であったこと等政治的な要因が関係していると想定される。筆者は沈風儀氏の写本にのみ掲載されてい

る「災異」の章に注目し、政府や民族関係について記され、劉仲泉が写本を取り止めた該章にこそ、当時の回族を知る手がかりがあると考え分析するに至った。本稿では特に、回族と漢族の械闘に関する康熙3年の天壇の械闘及び康熙33年の賽一徳の謀反容疑に焦点を当てる。下の表2は「災異」の章に記されている3つの事件について整理し、概要を記したものである。第二の事件である北京大地震に関しては『岡志』における本文の記載も「康熙十八年、京師大地震」と一文にとどまり、政府の関係や漢族の対立等とは関連性が低いため、本稿では表に掲載するにとどめる。

図2：沈風儀氏作成の『岡志』写本(19)

表2：「災異」の章に掲載されている3件の事件概要(20)

時期・事件名	事件概要
康熙3年 （1664） 天壇の械闘	1 人の回族が洪福寺で観劇している際、誤って漢族の少年の靴を踏んでしまい、殴り合いになった。翌日、激昂した漢族の少年が仲間を引き連れ牛街を襲撃したことから、回族と漢族の械闘に発展（規模 400 ～ 500 人）した。械闘は牛街に居住している回族以外の者まで巻きこみ、日没まで続いたが、漢族が命乞いし終息を迎えた。清朝の衛兵は遠くから事態が沈静化するまで眺めていたが、終息すると即座にその場に居合わせたものを残らず捕らえた。刑部の刑官は漢族から賄賂を受け取り、回民の造反を偽造し、彼等を酷刑で責め打ち共犯者を拷問で供述させた。捕らえられた回民には労役を行わせ、首謀者は打ち首となった(21)。
康熙18年 （1679） 北京大地震	康熙18年9月2日に北京で大地震が発生した。 ※城外の宣武門、崇文門、徳勝門、広安門は深刻な被害を受け、宮殿や北京の住民たちの住居は多くが倒壊した。（『清実録』康熙18年9月2日より）
康熙33年 （1694） サイード(賽一徳) の謀反容疑	ジュンガルのオイラトは内地（清朝統治領域）に10人ほどの内通者を残していた。内通者のうち 2 人は北京で回族と偽って生活しており、牛街礼拝寺のサイード（礼拝寺の有力者）は知らずに 2 人に寝食を世話した。内通者は清朝の理藩院に捕らえられた際、自らは哈密(22)の回民であり、牛街礼拝寺のサイードに寝食を世話になっていたと述べたため、サイードは謀反の容疑で捕らえられた。北京の清真寺の掌教たちもみな捕らえられ、監視下に置かれた。更に牛街は封鎖され、人々の出入りが禁止された。内通者達は打ち首になった。サイードは謀反容疑で裁判にかけられることとなったが、康熙帝の計らいにより無罪となった。理藩院の尚書である満丕は北京の回族は反逆の疑いがあると再審を要求したが、訴えは棄却された。潔白が証明された証として康熙帝から聖旨の扁額が贈られた。 謀反容疑で捕えられた者は10人あまりにのぼった。陳西、山東等それぞれ出身は様々である。回民たちは謀反に関しては全く知らなかったにもかかわらず、謀反の疑いをかけられ、百の鞭打ちの刑の後、北京から3千里も流された(23)。

上記が「災異」の章に掲載されている3件の事件の概要であり、これらの事件に関する記述を分

析した結果、当時の回族に関していくつかのことが明らかになった。

まず、第一の事件である天壇の械闘からは些細な出来事を発端に 400 人から 500 人規模の械闘に発展していることから、当時の両民族の関係はやはり相当な緊張状態にあったことが推定される。また、械闘を勃発させる発端の諍いを起こした漢族が少年であるということに加え、回族の青年が械闘に参加する記述がみられ、このようなことからは回漢の対立が若い世代にまで浸透していると考えられる。林幹氏の述べたように、清朝政府が回漢の対立を故意に画策したかどうか現段階では定かではないが、管見の限りこの時代の回漢対立は深刻なものであったといえよう。

械闘には回族の人々だけでなく、牛街に暮らす人々が回族と共に参加している記述もみられ、当時の牛街がすでに回族だけでなく多民族が居住する雑居状態にあったこと、少なくともこの事件に関しては回族の民族的団結という基盤の上に、牛街のコミュニティーとしての結束意識が存在したと考えられる。更に漢族が賄賂を渡し回族の造反を偽造、首謀者を打ち首にする等、清朝政府の回族と漢族に対する態度にはかなりの差がみられる。但し現段階でこの械闘の発生を裏付けるような記録は確認できておらず、史実かどうか真偽の程は定かではない。また賄賂の受け渡しを著者がどのようにして知りえたのか等疑問点が残る。

続いて第三のサイードの謀反容疑に関しては、冒頭部で述べているように当時ジュンガルと清朝の関係が緊張状態にあったこと、また研究者によってはイスラム教の宗教儀礼であるラマダンの時期が重なったことからこのような事件へとつながったとする見方もある。

サイードの謀反容疑は天壇の械闘に比べ、裁判の経緯等が非常に詳細に記されているだけでなく、実在する当時の理藩院尚書である満丕（Mampi）(24)の名も記されており、その信憑性は第一の天壇の械闘に比べやや高い。反逆容疑やジュンガルとの関連から、政治性も高かったためか、『清史編年』の康熙 33 年初 6 日壬申（6 月 27 日）では以下のような記録が確認できた。

> 将噶尔丹所派奸细赛特等六人于京城处斩。（ガルダンの派遣した賽特等 6 人のスパイを北京城にて斬罪に処する。）(25)

人名、人数等微妙に異なってはいるが、これはサイードの謀反容疑の事件の冒頭部の記述と内容が概ね一致しており、第三の事件の信憑性を裏付けている。

この事件で注目すべきは康熙帝から聖旨の扁額が贈与されていることである。この扁額は現在も牛街礼拝寺で保管されており、扁額にはサイードの事件に関する内容が記されている（図 3 参照）。扁額には康熙 33 年とあるが、事件の発生したその年に贈与されたとは考え難く、贈与の年代等は再検討する必要がある。

図 3：聖旨の扁額(26)

聖旨
康熙三十三年六月
朕評す。漢回古今の大典は自始の宏道なり。七十二門、修仙成佛、真を誘ひ邪に帰す。不法の

異端焉より種々生ず。以往は咎めず、再び違犯する者は斬る。漢の諸臣、官は職を分け、時に君禄を享け、日に案じて朝参す。而るに回は日を逐ひて五時朝して聖を拝す。並びに朕の俸を食ふ無し。亦た本に報いるを知る。而るに漢は回に及ばざるなり。各省に通暁し、官民小に因りて忿らず、端を借りて回教の謀反を虚報する者は、職司の官、先に斬りて後に奏せよ。天下の回民、各々清真を守り、命に違ふべからず。朕恩の愛道の意有るに負く勿れ。此を欽み、欽んで遵へ(27)。

第一の事件及び第三の事件を総括して捉えると、康熙 3 年の事件は回漢の対立、康熙 33 年の事件は清朝政府による回族弾圧にそれぞれ焦点を当てており、この二つの事件は異なる構図で記されている。『岡志』の著者はこの章を記すことを通して、回漢の対立や清朝政府の回族に対する不平等な扱いについて後世に伝えようとしたのではないだろうか。

中田氏が述べた如く回漢の対立は元の時代に発生したとしても、対立の構図は時代の流れとともに変化を遂げている。色目人として回族が優遇されていた元の時代の対立と満州族と漢族の関係円滑化のために漢族が優遇された清朝では対立の勢力関係は大きく異なる。『岡志』が記されたのは最も早くて雍正年間であることから、該資料は当然北京政府の影響を受けずして記されたものと考えられ、資料を整理し分析したかぎり、やはりこの時代の回族は非常に厳しい立場にあったといわざるを得ない。

「中国のイスラム教徒を全て同じ基準ではかるべきではない」(28)。土屋氏は中国のイスラム教を信仰する人々の多様性からこのような言葉を残しているが、回漢の対立や政府の政策も清朝だけ取り上げて見ても時代によりかなり異なっており、今後はより具さにその変遷を明らかにしていきたい。

7　おわりに

『岡志』は先に述べたように牛街に居住していた回族の医師が作成したといわれる資料であり、回族の立場に立った記述が多いのは勿論、経済的なこと等何点か疑問点もみられる。「災異」の事件がどこまで史実なのかは定かではないが、『岡志』の著者が仕清する立場であったことから他の回族の人々とはやや考え方が異なり、回族である一方で清朝政府に仕えているという複雑な感情を抱いており、公平な立場で史実を忠実に後世に残そうとしたのではないかと劉東声等は述べている(29)。劉東声等の述べていることが事実だとすれば、牛街は当時から北京の中でも特殊な位置づけにあった。

康熙年間は初めて「牛街」の名が『清実録』に公式的に記録された時代でもあり、『清史編年』の記録や扁額の贈与は回漢対立だけでなく、回族勢力が次第に拡大しつつあるのを政府が認識し始めたことを示唆してはいないだろうか。事実雍正年間、乾隆年間を迎えると回族の反乱は更に増加し、その規模も拡大の一途をたどっている。

筆者の調べによれば、清朝において清真寺が建立されたのは康熙年間が最も多く、そのことは康熙年間の北京が他の地域同様に種々の要因から回漢の対立が非常に深刻な時期であったということだけでなく、同時に清朝における北京の回族社会（イスラム教徒社会）拡大の最盛期であったことを意味している。そのような時代において牛街は北京の回族にとって象徴的な存在であり、勢力拡大の主柱となる存在であったのだろう。

本稿では牛街礼拝寺以外の清真寺に関しては多くを述べないままに終わってしまったが、先ほど述べたように回族と清真寺は密接に関連しており、今後は北京の清真寺の建立に関して調査を進めることで、清朝康熙年間にとどまらない北京回族の動態を明らかにしていきたい。

注

1　中国の前近代社会における村落間の武器を持っての闘争。明清代の華中、華南の農村、とりわけ同族村落においては閉鎖的排他的な傾向が強く、個人的な報復行為ばかりでなく、村落全体の利害にかかわる水利、地境、墳墓などの争いについて法に訴えないで武器を取り、実力で解決しようとすることが多かった。

2　中国語でニウヂエと呼ばれる。

3　オイラト部族連合に属すジュンガル部の第 4 代部族長を指す。ジュンガルは最後の遊牧帝国といわれている（宮脇淳子 2002『モンゴルの歴史—遊牧民の誕生からモンゴル国まで—』刀水歴史全書 59　p.108 参照）。

4　中田吉信　1971『回回民族の諸問題』アジア経済研究所　pp.8-9
5　北京市統計地理信息系統　http://www.bjstats.gov.cn/　参照（最終アクセス日時 2015/10/22　15：20）
6　土屋紀義　2004「中国のイスラム教徒――歴史と現況――」『レファレンス』54(3)、p.43
7　南満州鉄道北支経済調査所　1939　「北京回教徒ニ関スル調査報告」『北支調査資料』第 13 輯、pp.258-260
8　回漢とは回族及び漢族を指す。即ち回漢対立とは回族と漢族の民族同士の対立を指す。
9　土屋紀義　2004　前掲書　p.44
10　林幹　1957『清代回民起義』新知識出版社　p.15
「清朝统治阶级对回回民族所实施的政策,就是利用教派不同,挑发回族内讧,削弱回族内部力量，利用回族地主教主压榨回族劳动人民;更恶毒的是,挑发汉族和回族的关系,假借优待汉人,诱使汉人中的坏分子斯压回人,回人积怨既久,起而仇杀汉人，清朝统治者便借口保护汉人,动兵杀戮回人,以致回汉人民之间怨怨相报，循环无止境。…中略…」
11　林幹　1957　前掲書　pp.14-22(日本語訳　片岡一忠　1975　「『清朝の回民政策』の再検討―清実録記事を中心に―」『歴史研究』第 13 巻　p.60 参照)
12　林幹　1957　前掲書　p.14
13　中田吉信　1971　前掲書　p.58
14　清代に支配階層である満州族が所属した社会組織・軍事組織。
15　2012 年 3 月　北京にて筆者撮影。
16　良警宇　2006『牛街：一個城市的回族社区変遷』中央民族大学出版社　p.46
17　劉東声・劉盛林　1992「関於《岡志》」『回族研究』第 1 期　pp.69-71 をもとに筆者作成。
18「伊斯蘭之窓」参照　http://www.yslzc.com/（最終アクセス日時　2015/11/04　22：15）
19　劉東声・劉盛林　1991　『北京牛街志書-《岡志》』修訂本　北京出版社　冒頭部。
20　劉東声・劉盛林　1991　前掲書 pp.26-28 をもとに筆者作成。
21　劉東声・劉盛林　1992　前掲書　p.26 原文に関しては字数の関係から以下のごとく掲載するにとどめる。
【原文】康熙三年，教人于官园洪福寺看戏稠人拥挤，误踏一少年鞋脱。少年怒,相欧[殴] 骂而散。明日，少年率健汉十余人，手持梃杖，自西街北口秽而南，适教人率皆贸易他出，惟甄某在家，急出对骂。有刘青煤者，外教人也，居西街三世矣，亦出而忿骂，众执二人去。俄教众大集，亦持木棍追及猪市口，且骂且击，混战于通衢，店肆闭户，往来人皆不得行。已而陆续至者渐多，两边约四五百人，转战于天坛街。西城御史兵马司指挥，率衙役远望，不敢擒捕。教人康大寿，大腔子赵四，身长多力，舞枣木棍往来阵中，混如硃，衣衫击皆赤，三营武弁勒兵猪市口，逡巡不敢动。战至日哺，汉人黄三，黄四，阮二，屠六，皆跪叩请命，教人少敛。御史谕以祸福，挥官兵悉捕，送刑部司狱司。检验打死者四人，教居其一;伤者不计其数。已而，歇后死者三人，刑官受汉人之赂，严刑拷掠，诬回民造反，令供其党，声欲诛首恶，将尽徙回民于烟瘴。人情汹汹，流言不息。杜大，年十八，善拳棒，自天坛逸回家内。其父杜春宇，富饶，恐祸及门，逼子自尽。其他逃窜者不可胜记[计]。法官逐日夹讯，血浸台砌，教人无异言。骆思敬，年十七，美姿容，便[辨]口，给夹四次，不承叛状。捕系人多，狱中至不能容。时汉人恃财货,教人恃忍刑，初不如[赂]刑部一钱也。东西两街口置箩筐,教人贸易回者,无不置钱其中,为狱中饮食之费;每日备鸡，鱼，鸭，肉，米面，菜蔬八九担赴中，络绎不绝。凡五阅月，狱具，其弃市者三人，教人居二，其实一教人，一刘青煤也，死狱中六人，徒者各二三十人。
22　現クムル市。中華人民共和国新疆ウイグル自治区クムル地区に位置する県級市。康熙 17 年(1678)にジュンガル部のガルダン・ハーンの支配下に入る。
23　劉東声・劉盛林 1992 前掲書 pp.27-30 原文に関しては字数の関係から以下のごとく掲載するにとどめる。
【原文】康熙三十三年,厄鲁特犯顺，遣奸细十余人，随进贡蒙古混入内地。其中有古尔把厄［巴尼］，沙革阑德二人，冒充红帽回子 潜匿京都，往来各礼拜寺。教人不知逆党也，皆敬信之。东城人马惠泉迎沙革阑德至家，奉如神明；西寺赛一德常激至家一饭。后古尔巴尼为理藩院巡卒所获，供称："本国差十余人来打细，吾二人系哈蜜［密］，故奇住礼拜寺赛一德家，无赛一德之处，即寓掌教家。"事闻，有旨严拿重究。理藩院向书满丕，差郎中回同营弁，率京兵司坊捕役，以布古尔巴尼之头，半夜出城，围礼拜寺。教人大骇，莫敢举烛。改封翁弼廷，吴玉寰，张东湖，穆祥甫，刘明廷，马次泉俱被衣来寺。郎中灯下识其面曰："事非汝曹所知，速回去。免致灭族。今所捕惟赛一德耳。"封翁曰："赛一德乃我教之师也，不向我索，公等安所得赛一德哉！"郎中喜曰："公解人。"封翁呼住持速开门引众官坐客堂上，遣人请老师来。我隶卒执掌教白世祥，赛一德・马腾云至，二人皆须发皓白，战栗不能语。郎中测［恻］然曰：是岂为恶不法者!? 叱隶卒毋无礼。指白世祥曰："所捕者赛一德，无预此翁事。"小顷，捕东寺尹良相至，噤齡无人色，呼隶卒狭于马上，营兵

护拥而去。封翁诸人随致正阳门外，天交五鼓矣。门吏闻马声，启扉执火点名而入，挥封翁等退。已而门闭。良相回头无封翁诸人，即失声大哭；马腾云如醉梦然。比至理藩院，则各寺掌教及马惠泉俱捕至，锁禁一室，置兵守之。封翁诸人素交权贵，家饶于财，即假寐于正阳门外，候门启，驰赴当道之家，求属托承审官，许以重赂。天明质审之时，封翁等门外袖白镪，遍授肯吏。尚书满丕不亲鞫之。掌教等供称：原系同教，实不知其奸细等情。古尔巴尼诬以有信投在赛一德家。丕问是否?腾云惊愦曰:“有。”即差郎中员外三四员，押赴赛一德家取书，令众人暂退候审。腾云出城,教人百余迎于街口,皆望之涕,腾云在马上亦涕泣。时兵卒已围守其家,官吏入门,尽搬经籍于院中,逐篇检阅,令译官辨认。驿[译]官曰:“此皆彼教之经咒耳,非书信也。”复押腾云去。彼时兵马[司]按户造册,八旗拨禁兵,提督拨营兵,围守各巷口,不放贸易者出入。强欲出者,兵丁即以梃杖蔽之曰:“但候皆下,将尽屠汝等,谁敢放汝行也。”杨伯林妻殁,不许出西便门,葬于枣林街之乱冢。教人街闭户不相往来,男妇涕泣淋浴以候。忽上遣中使召满丕进宫而问其事，丕奏:“京城回民私通外寇,谋危社稷,此大逆也。臣议无分首从,宜尽屠之,以除心腹之大患。”上曰:“不然,京城回民,亦朕之赤子也。彼各有身家性命,岂肯通连外寇,谋危社稷已自丧身,此必无之事也。或者回民尚义,同类相亲,致有此累，彼若知其叛为，早出首矣。尔只严缉奸细，毋株连好人。”丕回署再审，无证据。与侍郎议，召保候勘。是日午后，一卒飞马奔至西街，问改爸爸[巴巴]家何在，众惊问何事?卒曰:“我满尚书家人。与汝等报喜信来也。”众引至封翁第,适封翁回家未入,急问何事?卒告以上谕如此。翁以加额曰:“造物洪恩,生灵之福也。”取大银一锭与之。乃与吴玉寰，张东湖，穆祥甫数人，连名具状愿以百口保之。满丕曰:“尔等暂保宁家,不可远去，倘质对不到，关系甚重，非同儿戏也。”封翁等扶马腾云，尹良相出，二人皆痿软不能行，以车载之，至家，恸哭不已。众塞门来问,亦皆挥泪，众复往谢封翁诸公。数目[日]方撤防守之兵。于是，都中各寺，俱开经答谢;教中男妇各捐所有，以为祝诞之资。途遇者，皆有更生之贺。其所捕之奸细十余人，或自陕西，或自山东，远近不等，皆相续捕到，骈斩于市。其教人虽不知叛情，坐招揽面生可疑之人，各杖一百，流三千里。马惠泉发遣杭州，康熙四十年赎罪回京。

24　伊爾根覚羅氏満州正藍旗人、理藩院左侍郎。

25　林鉄鈞・史松主編　1988　『清史編年　第三巻(康熙朝)下』中国人民大学出版社　p.66

26　人民日報海外版　2003/04/08　参照（http://www.people.com.cn/GB/paper39/8898/830404.htm）（最終アクセス日時 2015/11/04　22：00）

27　聖旨　康熙三十三年六月

朕評漢回古今大典、自始之宏道也。七十二門、修仙成佛、誘真帰邪、不法之異端種々生焉。以往不咎、再違犯者斬。漢諸臣官分職、時享君禄、按日朝参。而回、逐日五時朝拝聖。並無食朕俸。亦知報本。而漢不及於回也。通曉各省、如官民因不小忿、借端虚報回教謀反者、職司官先斬後奏。天下回民各守清真、不可違命。勿負朕恩有愛道之意。欽此欽遵。

28　土屋紀義　2004　前掲書　p.63

29　劉東声・劉盛林　1992　前掲書　pp.75-76

参考文献(アルファベット順)

・片岡一忠　1975 「『清朝の回民政策』の再検討—清実録記事を中心に—」『歴史研究』pp.59-79

・良警宇　2006 『牛街：一個城市的回族社区変遷』中央民族大学出版社

・林幹　1957 『清代回民起義』新知識出版社

・林鉄鈞・史松主編　1988 『清史編年　第三巻(康熙朝)下』中国人民大学出版社

・劉東声・劉盛林　1991 『北京牛街志書-《岡志》』修訂本　北京出版社

・劉東声・劉盛林　1992 「関於《岡志》」『回族研究』第 1 期　pp.68-78

・南満州鉄道北支経済調査所　1939 「北京回教徒ニ関スル調査報告」『北支調査資料』第 13 輯

・宮脇淳子　2002 『モンゴルの歴史—遊牧民の誕生からモンゴル国まで—』刀水歴史全書 59

・中田吉信　1971 『回回民族の諸問題』アジア経済研究所

・土屋紀義　2004 「中国のイスラム教徒—歴史と現況—」『レファレンス』54(3) pp.38-63

・田畑久夫他 5 人　2001 『中国少数民族事典』東京堂出版

参考 web

・北京市統計地理信息系統　(http://www.bjstats.gov.cn/)（最終アクセス日時　2015/10/22　15：20）

・人民日報海外版　2003/04/08　参照（http://www.people.com.cn/GB/paper39/8898/830404.htm）（最終アクセス日時　2015/11/04　22：00）

・伊斯蘭之窓　参照　http://www.yslzc.com/（最終アクセス日時　2015/11/04　22：15）

在満日本人子弟用『満洲補充読本』と近代文学作家
―「大正新教育」の〈自由性〉をめぐって―

船越亮佑

1　はじめに

国語教科書が近代文学作家の知名度維持に寄与し続けてきたことは否定しえない事実であろう。いうならば、教科書は作家の（社会的）延命装置として機能してきたのである。

かつて西尾実は、「近代における国語教育の課題は、語学主義の国語教育から文学主義の国語教育に進み、さらに、言語生活主義の国語教育を発見するにいたった歴史である」と述べた(1)。また、同じ頃に井上（1958・1961）がまとめた国語学力観の変遷にしたがえば、1904（明治 37）年に使用のはじまった第一期国定国語教科書において語学的体系に重点のおかれていた学力が、1910（明治 43）年に使用のはじまった第二期において文学的な学力が考慮されはじめ、大正・昭和にいたって「単に語学的に分析された文字・語句等を読みとる力ではなく、全一としての文章を読みとり、文学作品を鑑賞する力が重んぜられるように」なり、戦後の学力観は「実際の言語生活の中で生きて働く、きわめて実際的な言語能力」となった(2)。ここから、教科書が作家の延命装置として機能しはじめたのは大正期と考えられようが、それに関連して田近（1991）が、「文学作品を教材とした読みの指導を文学教育とよぶなら、それは特に大正時代以降、国語教育の中心領域として続けられてきた」とし、自由主義教育運動や雑誌「赤い鳥」の発刊（1918（大正 7）年）にともなって、鑑賞主義的文学教育が 1921（大正 10）年頃にピークを迎えたと述べていることはその証左となろう(3)。

本研究で取り上げる『満洲補充読本』の刊行がはじまったのは 1924（大正 13）年である。これは戦前に「満洲」（中国東北部）に移植民として渡った日本人の子弟が国定国語教科書の副読本として使用したものである。

磯田（2000）は、聞き取り調査を行ったうえで、この教科書を次のように評価する(4)。

> 『満洲補充読本』はその使用がきわめて自由であったらしい。国定教科書はそのすべての内容を、一応万遍なく扱わなければならなかったのに対し、補充教科書は必ずしも全部を扱う必要はなく、試験に出題されることもなく、時間のあるときに気楽に読んで楽しめばよかったもののようである。そのためにかえって子どもたちは喜んで読んだから、今でも国定国語読本より内容をよく覚えているという人が多い。
>
> 大正新教育においては国語は多読主義を取った。補充教材（児童読み物）を豊富に用意することと、このように自由に楽しみながら漢字の書き取りなどは気にせず読めるだけ読ませる、というのが新教育運動における国語教育の重要な側面でもあった。子どもたちが楽しんで読めるということが、「能率」を高めるのに何よりも大切なことがよく示されている。『満洲補充読本』はこの意味で「満洲新教育」の一つの成果とも言えよう。

『満洲補充読本』は、児童が「自由に楽しみながら」読める教科書であったようである。これは「大正新教育」にしばしば与えられる児童中心主義の評価にも通底しようが、筆者はこの点を問題の所在としたい。なぜ児童生徒が〈自由性〉をもって読むことに問題を見出す必要があるのか。まずは、それをこの教科書に関する先学の検討から明らかにしたい。

2　石森延男と「大正新教育」

『満洲補充読本』に関する研究は、『複刻 満州官製教科書』（1989）の刊行(5)と、渋谷（1992）・磯田（1992）の論考により石森延男の仕事として積極的に位置付けられることではじまった。

石森延男（1897-1987）は、北海道生まれの児童文学作家及び国語教育学者で、1923（大正 12）年に東京高等師範学校を卒業後、数年の間内地で教員生活を送ったのち、1926（大正 15）年 5 月に大連の南満洲教育会教科書編集部に赴任した。このときに任された仕事が『満洲補充読本』の編纂及び改訂の作業であった（着任時すでに刊行がはじまっていた）。その後、1939（昭和 14）年に文部省図書局図書監修官に任命されると内地に戻り、敗戦を挟む第五期と第六期の国定国語教科書の編纂に携わった。

石森は、1979（昭和 54）年の『満洲補充読本』復刻版（国書刊行会）出版に際し、その内容見本に「満洲補充読本の誕生」という文章を寄せている(6)。

> 今でこそ満洲国は異国になってしまったが、幼年時代に心に芽ばえたあのひろびろとした広野、よくはれた夜空、紅いサンザシ、あたたかい甘栗など、けっして異郷のものではあるまい。人間のよさは国境を越えたところにあると思う。（中略）
>
> 「満洲補充読本」は、けっして国威発揚を掲げたものではない。敵愾心をそそるものでは断じてない。当時としては危険視されるほどの人間性を帯びた自由性の豊かな教科書であったのである。（注：傍点引用者）

この文章をめぐり、渋谷（1992）は、「一種のロマンチックとでも言うような懐かしさと郷愁の念」を読み取り、他の回想記もふまえながら、石森は「戦前と戦後の仕事について、つねに自分の仕事は間違っていなかったという、心情によって支えられている」と述べる(7)。これを受けて、磯田（1992）は、その「ロマン」や「郷愁」が「戦後日本の国語教育の基調をなすに至った」としてそれを問題視し、その本質が究明されなければならないと指摘する(8)。つまり、渋谷（1992）の問題意識を鮮明化した磯田（1992）によれば、『満洲補充読本』と石森延男をめぐり追究されるべきは、敗戦を乗り越えた／乗り越えてしまった国語教科書における「ロマン」や「郷愁」という点である(9)。

筆者の問題意識もこれと同じく敗戦前後の連続性の問題であるが、問題視したいのは先述した「自由に楽しみながら」という点である。「大正新教育」における児童中心主義の側面については、それが同時代の教育の一面でしかないことに留意し、他方で植民地主義の側面が色濃くあったことに注意しなければならない。いや、むしろその両面が「大正新教育」において連動していたということも疑ってみる必要がある(10)。たとえば、時代は下るが、自由学園は日本の占領下にあった北京において現地人子弟向けの女学校を設立していた。今日においても好意的に受け止められがちな〈自由性〉という教育の思想を批判的に検証されるべきものとして考えてみたい。

他に『満洲補充読本』に関する研究としては、田中「『満洲補充読本』にあらわれた帝国の言語思想と異文化認識」（2014）が挙げられる。これは、教科書の言説分析からその言語思想を探ったもので、「異民族との協和をめざしつつも、そこには統治者としての帝国思想、言語観が素材の配列配置、言語表現に鏤められる」形となっていることが、概観的な考察のもと論じられている(11)。本研究は、田中（2014）の行った言説分析を、概観的にではなく 3 人の近代文学作家――夏目漱石・芥川龍之介・北原白秋――の文章にしぼったものである。

本研究は、敗戦前後の連続性の一つとして認められる〈自由性〉を問題の所在としながら、『満洲補充読本』における近代文学作家の文章の言説分析を行う。そして、教科書が作家の延命装置として機能しはじめた頃の「大正新教育」の影響下につくられたことをめぐって、今後の国語教育（史）研究で検討されるべき課題について提起することを目論む。

なお、考察対象とした教科書は、『在満日本人用教科書集成』第 1・2 巻（柏書房、2000 年）所収の『満洲補充読本』(12)であり、本文引用もこれに拠る。また、旧字体の漢字は新字体に、2 字以上の繰り返しを表す踊り字は表記を改め、振り仮名は特に断りのないかぎり省略する。

3　夏目漱石「砂湯」

『満洲補充読本』初等科用巻 5（1930 年発行）第 12 課「砂湯」は、夏目漱石「満韓ところどころ」

の文章を教材化したものである。

紀行文の体裁をとる「満韓ところどころ」は、1909（明治 42）年 9 月 2 日の出立から 10 月 17 日の帰着にかけて「満洲」から朝鮮を外遊した漱石の旅行記とされる。漱石は、まず大連・旅順・奉天・撫順・長春など「満洲」を歴訪し、その後に朝鮮へ向かって平壌・京城・釜山などを訪れた。そして、帰着から 4 日後の 10 月 21 日に『東京朝日新聞』で連載がはじまったが、同年 12 月 30 日に撫順に至ったところで終了したため、朝鮮の歴訪については記されずにおわった。それゆえ、「満韓ところどころ」は「満洲」の紀行文となった。

先行研究は、1958 年に「漱石のような人のなかにもあった中国人観、朝鮮人観、それが、ごく自然に帝国主義、植民地主義にしみていた」(13)と中野重治が評して以来、特に文中の差別用語をめぐって批判的考察が行われてきた。しかし、そうしたなかでも、朴（2007）が「漱石神話」と看破したように、他作品の帝国主義・植民地主義批判と読める言説から漱石を擁護しようとする態度の透けてみえる論も少なくない(14)。泊（2013）は、漱石研究の第一人者である小森陽一もまた、その「漱石神話」から自由ではないと断じている(15)。ともあれ、2015 年発行の『漱石『満韓ところどころ』を読む』（鳥影社）のなかで高畠寛がヘイトスピーチの所感を枕に評論を書いたことにあらわれているように、「満韓ところどころ」は漱石に対する帝国主義・植民地主義批判あるいは人種主義批判の文脈で論じられることが多い。こうした漱石の評価をめぐる研究は他に譲ることにして、筆者は『満洲補充読本』に採録された文章に対する批判的考察を行いたい。もっといえば、それを教材として載せる教科書に対する批判的考察である。

作家に対する批判と教科書の文章に対する批判を明確に区別する必要があるのは、想定される読者と読書空間が両者でまったく異なるからである。作家が想定する読者は、新聞を含めそれを任意で手に取った人物であり、同じく読書空間もまた任意である。他方、教科書が想定する読者は児童生徒であり、読書空間は学校の教室である。いうならば、〈自由性〉のきわめて限定された形で読まれるのが教科書の文章なのである。次に分析する漱石だけでなく、それに続く芥川と白秋についても同様に、文章に対する批判的考察を行っていく。

・「砂湯」（全文）

下駄を踏むとざくりとはいる。かゝとを上げるとばらばらと散る。なぎさよりもおそろしい砂地である。冷くさへなければ、はだしになつて歩いた方が心持がよい。まないたを引きずつてゐては、一足毎に後じさるやうで、はがゆくなる。それを一町程行つて板がこひの小屋の中をのぞきこむと、温泉があつた。大きな桶を縁まで地の中に埋め込んだと同じやうな湯ぶねである。湯は一ぱいたまつてゐたが、澄みきつて底まで見える。何時の間についたものやら、底も縁も青い藻で色取られてゐる。友と私は容赦なく湯の穴へ飛びこんだ。さうして遠くから見ると、砂の中へ生埋にされた人間のやうに、頭だけ地平線の上に出してゐた。支那人の中には、実際生埋になつて湯治をやるものがある。此の河原の幅は、向ふに見える高粱の畠まで行つた事がないから、どの位か分らないが、とにかく目が平になる程広いものである。其の平な、何所をどう掘つても、湯が湧いて来るのだから、裸になつて手で砂をかき分けて、くぼんだ所へ横になれば、一文も使はないで事はすむ。其の上、寝ながら腹の上へ砂を掛ければ、温泉のかいまきが出来るわけである。たゞ砂の中をもぐつて出る湯が如何にも熱い。じくじく湧いたものを大きな湯ぶねにためて見ると、色だけは非常にきれいだが、それにだまされて、うつかり飛びこまうものならひどい目に合ふ。友と私は勢よくゆかたをぬぎすてて競走的に毛脛を付きこんで、急に顔を見合わせながらちゞんだ事がある。大の男がわざわざ裸になつて、其の裸の始末をつけかねるのは、きまりがよいものぢやないから、両人は顔を見合はせて、四半町程先の共同ぶろまで行つて、平気な風にどぼりとつかつた。

ふろから出て、砂の中に立ちながら河の上流を見渡すと、河がくるりとゆるく折曲つてゐる。其の向ふ側に五六本の大きな柳が見える。奥に村があるらしい。牛と馬が五六頭水を渡つて来た。距離が遠いので、小さく動いてゐるが、色だけははつきり分る。皆茶褐色をして柳の下に近づいて行く。牛追は牛よりもなほ小さかつた。凡てが、世間で南画といふものによく似てゐて面白かった。（夏目金之助著「満韓ところどころ」による）

本文は、ほとんど原文（「満韓ところどころ」『漱石文学全集』集英社、1973 年）のままである。

表記の異同を除き、文意を左右する異同としては、本文で「藻」とあるのが原文では「苔」であったり、「両人は顔を見合はせて、四半町程先の」の読点部分に「苦笑しながら小屋を飛び出して」が入ったり、「よく似てゐて」が「髣髴として」であったりする点、他には、本文で「友と私」とあるのが原文では「橋本と余」であるという点が挙げられる。

「橋本」とは、橋本左五郎（1866-1952）のことである。橋本は、札幌農学校に 1885（明治 18）年に入学し、卒業後に助手・助教授を経て同校の教授となった人物である。漱石とは農学校入学前の予備門時代からの知り合いであった。橋本は、南満洲鉄道株式会社からのモンゴル畜産事情の調査依頼に応じて、漱石が「満洲」を訪れる 2 ～ 3 ヶ月前に来ていた。その調査がおわり大連に戻ったところで漱石に遭遇し、橋本は旅に同行することとなった。

本文は、大連から奉天へ向かう途次のことを記したものである。以下、文章の生成されるコンテクストを把捉するため、「満韓ところどころ」により前後を補う。

道中、宿をとることになった一行は、崖の上にある平屋に泊まることとなった。窓から外を眺めると崖下にも家が 1 軒あり、そこは平屋と階段で繋がっていた。（おそらく宿の人に）聞いてみると、料理場と子どもをおくところになっているという返事があった。「余」は、「子供とは酌婦芸妓(しゃ)の類を指すものだらう」と推察した。まな板のように大きい下駄を履いた「余」は、「橋本」とともに温泉へ向かうため下へと降り、1 町（およそ 100 メートル）ほど離れたところにある小屋と、そこから 4 半町ほど先の共同風呂に入った。共同風呂から出て河の上流を見渡すと、遠くで柳に近づく牛馬と牛追いがみえ、どうやらその奥には村があるらしかった。その風景は、あたかも南宗画のようであった。温泉から戻る途中、崖の上からはだしで降りてきた若い女と狭い橋で行き違った。女は、「ひらひらと板の上を舞ふ様に進んで余に近づいた」。危ないよと注意すると、女は笑いながら軽い御辞儀をして、「余」の肩をこすって行き過ぎた。翌日、中国語で労働者（原文「クーリー」）を厳しく叱りつけるその女の姿を見たとき、「余」は昨日微笑しながら御辞儀をした女であるとはどうしても思えなかった。その女は一行が出発する前の晩に給仕に来たが、おしろいをつけていることがわかったくらいで、口を利くことはなかった。

この文章は、教科書の本文だけを読むと、「友と私」が温泉に入りそこからみえた風景が中国の山水画に似ていることを述べたものに過ぎないように思われる。しかし、想定される読者と読書空間を考慮すると、児童生徒は中国人でない「友と私」を即座に日本人と措定し、その視線に同化する形で読むこととなる。二宮（2008）によれば、「余」の視線は観念的な中国のイメージを準拠枠とするが(16)、在満日本人子弟もまたそれに則ることとなろう。さらに、典拠の元の文脈に落とし込むと、この文章は、中国及び中国人を一方的に見る主体によって構成された言説で編まれていることがわかる。それを端的に示しているのが、酌婦か芸者と考えられる中国人女性の存在である。橋の上を歩く姿が「余」に「ひらひらと板の上を舞ふ様に」見えたのは酌婦か芸者がいると予断していたからである。酌婦や芸者を淑女と見たい「余」は、労働者を厳しく叱る女の姿を認めたがらなかった。給仕に来たときも姿を見るための視線は浴びせるが、ことばを交わすことなく双方的な見る／見られるの関係には至らなかった。見る「余」と見られる女という構図となっている。同じことが「余」に「南画」と見られる土地にもいえるだろう。見る「余」及び日本人と、見られる中国（人）という構図が成り立っているのである。教室の児童生徒は、その優越性を無批判に取り込み、一方的に見る立場となって、「自由に楽しみながら」この文章を読んだのではなかろうか。

4　芥川龍之介「日本人」

『満洲補充読本』初等科用巻 6（1932 年発行）第 14 課「日本人」は、芥川龍之介『支那游記』（改造社、1925 年）の文章を教材化したものである。

紀行文の体裁をとる『支那游記』は、1921（大正 10）年 3 月から同年 7 月にかけて中国を外遊した芥川の旅行記とされる。芥川は、上海・南京・漢口・洛陽・北京などを歴訪し、帰国後 8 月 17 日から 9 月 12 日まで 21 回にわたり、『大阪毎日新聞』及び『東京日日新聞』に「上海游記」を連載した。『支那游記』は、「自序」「上海游記」「江南游記」「北京日記抄」「雑信一束」からなるが、「日本人」の文章はその帰国後初の連載である「上海游記」からとられている。1910 年代から 1920 年代は、「満韓支」ツーリズムブームであった(17)。

先行研究は、1990 年代から 2000 年代にかけて量産され、およそ漱石「満韓ところどころ」と似た議論がなされてきた。黄（2013）はその状況を約言して、「中国側の研究には帝国主義批判ある

いは芥川批判が多く、日本側（英語圏も同じことが言える）の研究には、（中略）『芥川龍之介』という名前に傷をつけたくないとする保守的な読み方が多い」と述べている。黄は、「作家である芥川」の観念上の「支那趣味」ではなく、「旅行者である芥川」の身体と向き合うものがきわめて少ないとして、「近代中国に対する差別意識」が芥川にあったか否かを議論するまえに、芥川の身体と『支那游記』というテクストが、当時の日本人読者や作家にとってどのような「記号的意味」をもったのかを議論する必要があるとの問題意識からテクスト分析を行った(18)。筆者もまた、芥川に「近代中国に対する差別意識」があったどうかについては問題とせず、先述したとおり文章に対する批判的考察を行う。

・「日本人」（全文）

一　桜の花

上海紡績の小島氏の所へ、晩飯に呼ばれて行つた時、氏の社宅の前の庭に、小さな桜が植わつてゐた。すると同行の四十起氏が、

「御覧なさい。桜が咲いてゐます。」

と言つた。その言ひ方には不思議な程嬉しさうな調子がこもつてゐた。玄関に出てゐた小島氏も、大げさに形容すればアメリカ帰りのコロンブスが土産でも見せるやうな顔色だつた。そのくせ桜の痩せた枝は、乏しい花しかつけてゐなかつた。私はこの時両先生が何故こんなに大喜びをするのか、内心妙に思つてゐた。しかし上海に一月程ゐると、これは両氏ばかりぢやない。誰でもさうだといふことを知つた。日本人はどういふ人種か、それは私の知る所ぢやないが、とにかく海外に出ると、その八重たると一重たるとを問はず、桜の花さへ見ることが出来れば、忽ち幸福になる人種である。

二　鯉幟

同文書院を見に行つた時、寄宿舎の二階を歩いてゐると、廊下のつき当りの窓の外に青い麦穂の海が見えた。その麦畑の所々に平凡な菜の花の群がつたのが見えた。最後にそれらのずつと向ふに、低い屋根が続いた上に大きな鯉幟のあるのが見えた。鯉は風に吹かれながら、鮮かに空にひるがへつてゐる。この一本の鯉幟は忽ち風景を変化させた。私は支那にゐるのぢやない。日本にゐるのだといふ気になつた。しかし、その窓の側へ行つたら、すぐ目の下の麦畑に支那の百姓が働いてゐた。それが何だか私にはけしからんやうな気を起させた。私は遠い上海の空に日本の鯉幟を眺めたのは、やはり多少愉快だつたのである。桜のことなぞは笑へないかも知れない。（芥川龍之助著「支那遊記」による）

本文は、ほとんど原文（「上海游記」『芥川龍之介全集』岩波書店、1977 年）のままで、表記の異同を除き、文意を左右する異同は認められない。ただし、本文の「桜の花」「鯉幟」という小見出しが原文にはない。児童が読みやすくするために付されたものと考えられる。

「四十起」とは、俳人及び歌人・島津長次郎（1871-1948）の号である。1900（明治 33）年に上海に渡り、金風社という出版社を起こして『上海案内』『支那在留邦人人名録』などを刊行した。島津は、上海において芥川と知り合い、その案内役を務めることとなった。

本文は、「日本人」の前半部分を引用する形で教材化されており、原文にある後半部分は省略されている。後半は大きく内容が三つにわかれているが、以下に各々の梗概を示す。

①上海の日本婦人倶楽部に招待された。テーブルを囲んだ奥さんたちは、「私が予想してゐたよりも、皆温良貞淑さうだつた」。②南洋丸船長竹内氏の話で、漢口のバンド（外国人居留地である租界の一区域）を歩いていたらベンチに西洋人の船乗りと日本人の女が座っていた。「その女は一と目見ても、職業がすぐにわかるものだつた」。竹内氏はそれを不快に思ったそうである。その話を聞いた後、数人の芸者がひとりの西洋人を擁しているのを見た。「私」は不快に思わなかったが、そう思う心理に興味をもった。「この場合は不快な気持だけだが、もしこれを大にすれば、愛国的義憤に違ひない」。③Xという日本人がいた。20 年上海に住み、結婚も子ができたのも、金を貯めたのも上海である。上海に熱烈な愛着をもっていたXは、日本から客が来ると、「上海は西洋も同然である。日本なぞに齷齪してゐるより、一日も早く上海に来給へ」と促しさえした。Xが死んだとき、遺言状を出してみると、骨を必ず日本に埋めるように書いてあった。このような想像を「私」はした。「Xの矛盾は笑ふべきものぢやない。我々はかう云ふ点になると、大抵Xの仲間なのであ

る」。
教科書の本文だけを読んだ児童は、この文章を桜と鯉幟を見て日本を想起する「私」たち日本人について書かれたものと理解したに過ぎないと思われる。本文中にある「けしからんやうな気」の意味するところを解釈できた児童は少なかったのではなかろうか。元の文脈に落とし込めばわかるように、これは無自覚にもっていた愛国心に気付いた「私」がそれを不本意に感じたところの描写であろう。「自由に楽しみながら」読む教室の解釈共同体は、自分の内に秘めたるナショナリズムに不意に直面した「私」の姿を読みとることができなかったと考えられる。

5 北原白秋「りんご」及び「満洲興国の歌」

『満洲補充読本』初等科用巻2（1935年発行）第13課「りんご」は、雑誌『コドモノクニ』9巻7号（1930年7月）初出、北原白秋の少国民詩集『満洲地図』（フタバ書院成光館、1942年）再録「林檎」の文章を教材化したものである。
白秋は、1930（昭和5）年に満鉄の招待により「満洲」を訪れた。3月1日に神戸を出港し4月6日に帰港、およそ1ヶ月の旅であった。『満洲地図』には1930年から1938（昭和13）年にかけて雑誌に発表された作品が十数篇収められており、「林檎」はその一つである。
先行研究では、安元（2006）が「戦時色濃くなる内地の暮らしと相関関係にある」形で、白秋が「関東軍のまなざしそのままに軍国主義、帝国主義を鼓舞する詩歌を量産した」と、『満洲地図』など「満洲」関連の作品群に評価を与えている(19)。

・「りんご」（全文）※振り仮名は漢字の後に入れた。
りんご　もちこむ　三十里堡サンシーリーフー。
きしゃ　は　よい　きしゃ　ひろい　きしゃ。
かあさん　りんごが　たくさん　ね。
りんご　あげましょ、　普蘭店フーランテイエン。
みなさん、　お一つ　いかが　です。
ありがと　ありがと、　おぼっちゃん。
ひとり　おります、　瓦房店ワーフワンテイエン。
ぼっちゃん、　ザイジェン　ごきげん　よう。
りんご　も　ザイジェン　ごきげん　よう。
ひとり　おります、　得利寺トーリース。
ぼっちゃん　ザイジェン　ごきげん　よう。
りんご　も　ザイジェン　ごきげん　よう。
ひとり　おります、　万家嶺ワンジャリン。
ぼっちゃん、　ザイジェン　ごきげん　よう。
りんご　も　ザイジェン　ごきげん　よう。
（北原白秋「コドモノクニ」による）

本文は、表記の異同を除き、原文（「満洲地図」『白秋全集』岩波書店、1987年）のままであるが、初出は文末に「満洲本線の汽車の中のことです」「三十里堡は林檎のできるところです」「ツアイチエンはさよならです」と注が付いていた。なお、「普蘭店」「瓦房店」「得利寺」「万家嶺」は地名である。この「満洲」特産の林檎をうたった詩に軍国主義や帝国主義を鼓舞する性格は認められないが、次の教材にはそれを確認することができる。
『満洲補充読本』高等科用巻2（1936年発行）第6課「満洲興国の歌」は、雑誌『協和』6巻8号（1932年4月）初出、白秋の『全貌』第1輯（アルス出版、1933年）再録、白秋の国民歌謡集『躍進日本の歌』（アルス出版、1936年）再々録「満洲興国の歌」の文章を教材化したものである。

・「満洲興国の歌」（全文）
開けよ、すでに満蒙の
雲は晴れたり、ことごとく。
あゝ更生のあけぼのに

旗風高し新五色。
　　旗風高し新五色。

王道たゞに明かうして
暴虐の闇かげもなし。
天与の機会いままさに
大同の春、野にいたる。
　　大同の春、野にいたる。

興れよ、起てよ、建国の
声はあがれり、気は満ちぬ。
協和の楽土なごやかに
栄えよ、来れ、諸民族。
　　栄えよ、来れ、諸民族。

とゞろと歌へ、日は若く、
国は新し、大満洲。
自由の天地、今日こゝに
蕩々として光あり。
　　蕩々として光あり。
（北原白秋「全貌」による）

本文は、表記の異同を除き、原文（「満洲地図」『白秋全集』岩波書店、1987 年）のままであるが、初出は前書が付され「毎々御誌『協和』御寄贈下さいまして深謝します。同封にて新歌謡『満洲興国の歌』一篇さしあげます。これは山田耕作氏作曲でコロムビアレコードとして近々発売されます」と記されていた。

この歌は、1932（昭和 7・大同元）年 3 月の「満洲国」建国を寿いだもので、スローガンであった王道楽土と五族協和（満洲民族・蒙古民族・漢民族・日本民族・朝鮮民族）に関連することばがちりばめられている。事実上、帝国日本の傀儡国家であった「満洲国」建国を高らかに歌いあげることに帝国主義や植民地主義を見出すことは今日となっては容易いが、作詞した白秋にその自覚があったかどうかは疑わしい。同様に、この文章を読んだ児童生徒もまたそれらを自覚することなく、リズムなどを「自由に楽しみながら」読んだことであろう。

6　おわりに

「自由に楽しみながら」読めたという『満洲補充読本』は、〈自由性〉の限定された教室の児童生徒という解釈共同体に読まれた。彼ら／彼女らは、夏目漱石の文章にみえる中国（人）に対する日本（人）の優越性や、芥川龍之介の文章にひそむ愛国心とナショナリズム、また北原白秋の文章に認められる帝国主義や植民地主義を無批判に受け取っていたものと思われる。千田（2009）がいうように、「教室、授業という場は、テクストを一義化しようとする志向がつよく働く場」である (20)。その一義化に抗し、「十人十色」(21) の読解を促しても、それは学校教育において許される読みに限定される。教室という空間において真に自由な読みが確保されることはないだろう。もしそうであるならば、仮初の〈自由性〉を標榜するよりも、教員がその制限を自覚しながら、児童生徒に文章を多角的・批判的に読むことを促したほうが単一的・無批判的な読みに陥らないかもしれない。〈自由性〉をめぐっては、児童中心主義と植民地主義の側面とが連動していた可能性も考慮しつつ、従前の「大正新教育」の評価に再検討を行う必要がある。

本稿において、「大正新教育」は一枚岩のように扱ったが、もちろん事実はそうでない。たとえば、玉川学園の創立者・小原国芳（1887-1977）は、「自由教育論」のなかで、「ニセの自由教育論を極力排斥する」必要を訴え、自由の濫用者は真の自由教育者ではないとして、「正しき意味の児童中心主義と教師中心主義が一致」しなければならないと主張した。さらに国民教育と国家主義との関係については次のように述べた。「国民が政治上全体的な自由を有するものはない。またかゝ

ることがあるべきではない。何となれば国家が統一体として存立してゐることは、その中には必ず国家の各員が、その国家の権威に服従するといふことが含まれて居る。それなくんば国家の主権が成立すべき筈がない。従つて国家が存立する筈はない。統一的国家は成立しない。だから国家が成立し存立するといふことに即して個人の意志は、或る意味に於て制限されるといふことが含蓄されて居る」（小原国芳全集『教育改造論・自由教育論』玉川大学出版部、1953、pp.325-326）。小原国芳が教育に求めた〈自由性〉は、国家権力を侵犯しない限りのものであったことがわかる。「自由教育論」は論者によりその〈自由性〉の内実や国家権力との距離の取り方が異なったのである。「大正新教育」は、いたずらにその〈自由性〉を評価するよりも、明治期の形式主義教育に対するカウンターとして出発したに過ぎなかったことから改めて考えてみる必要があるのではなかろうか。

注

1　西尾実「国語教育の課題」『教師のための国語』河出書房新社、1961年

2　井上敏夫「戦後学力観の変遷—戦前の国語学力—」・「戦後国語学力観の変遷」（浜本純逸編『教科書を中心に見た国語教育史研究』溪水社、2009年、pp.265-307／初出「国語学力観の変遷—戦前の国語学力—」『現代学力体系 2 国語の学力』明治図書、1958年・「戦後国語学力観の変遷」『教育科学国語教育』26号、1961年3月

3　田近洵一『戦後国語教育問題史』大修館書店、1991年

4　磯田一雄「満洲補充読本」磯田一雄・槻木瑞生・竹中憲一・金美花編『在満日本人用教科書集成：第 10 巻　教育関係法規・解題』柏書房、2000年

5　磯田一雄・野村章・吉村徳蔵・白川今朝晴編『複刻 満州官製教科書』ほるぷ出版、1989年

6　石森延男「満洲補充読本の誕生」『満洲補充読本 復刻版：内容見本』国書刊行会、1979年

7　渋谷孝編集・解説『現代国語教育論集成：石森延男』現代国語教育論集成編集委員会、1992年2月

8　磯田一雄「石森国語の成立と満洲——その基盤としての『満洲補充読本』——」『成城文芸』141号、1992年12月

9　この点に関して、佐藤学の「戦争責任に背を向ける戦後の日本人の態度の出発点に「墨塗り教科書」がある」とし、「占領軍に対して「軍国主義」を克服するポーズを表明する意図で計画された措置が「墨塗り」であった」という指摘は示唆に富む（小森陽一・高橋哲哉編『ナショナル・ヒストリーを超えて』東京大学出版会、1998年）。何が敗戦を乗り越えたのか、再吟味する必要がある。

10「満洲」における植民地教育と「大正新教育」の連動については、磯田一雄『「皇国の姿」を追って——教科書に見る植民地教育文化史』（皓星社、1999年）や、日本植民地教育史研究会運営委員会編『植民地・子ども・「新教育」』植民地教育史研究年報 14 号（皓星社、2012 年）所収の山本一生「『南満教育』における新教育の思潮」が問題視し、考察を行っている。

11　田中寛「『満洲補充読本』にあらわれた帝国の言語思想と異文化認識」『戦時期における日本語・日本語教育論の諸相：日本言語文化政策論序説』ひつじ書房、2015年／初出「『満洲補充読本』にあらわれた帝国の言語思想と異文化認識」『東洋研究』192号、2014年7月

12　『満洲補充読本』は、改訂を基準にして3期に大別することができるが、本稿では『満洲補充読本』を一つの総体として捉えるために区別をしない。

13『中野重治全集』23巻（筑摩書房、1978年）／初出「漱石以来」『アカハタ』1958年3月

14　朴裕河『ナショナル・アイデンティティとジェンダー：漱石・文学・近代』（クレイン、2007年）

15　泊功「夏目漱石「満韓ところどころ」における差別表現と写生文」『函館工業高等専門学校紀要』47号、2013年

16　二宮智之「「満韓ところどころ」と漱石の中国観（下）」『岩国短期大学紀要』37号、2008年

17　「満韓支」ツーリズムブームの牽引役は、1912（明治45）年3月に日本郵船・東洋汽船・満鉄などの共同出資で設立されたジャパンツーリストビューロー（ＪＴＢ）であった。また 1923（大正 12）年に、それまでにあった横浜・上海間、神戸・上海間に加え、長崎・上海間の定期連絡船ができたことにより、日中間が 26 時間で結ばれるようになったことは、渡航の空間的距離のみならず心理的距離を縮めることに繋がった。このあたりの事情は、劉建輝『増補 魔都上海——日本知識人の「近代」体験』（筑摩書房、2010 年）が詳しい。

18　黄珺亮「言語／ジェンダーのポリティクスから見る芥川龍之介の生成——『支那游記』を中心に」『Quad-rante :Areas, cultures and positions』15号、2013年3月

19　安元隆子「詩人たちの満洲―北原白秋と室生犀星の満洲体験―」『国際関係研究』27巻1号、2006年7月

20　千田洋幸『テクストと教育―「読むこと」の変革のために―』(溪水社、2009年)。このなかで千田は、「「満韓ところどころ」における露骨なレイシズムとそれに対する無自覚は、「私の個人主義」における「個人主義」の論理によってむしろ強化されている」と指摘する。漱石の「私の個人主義」は戦後の国語教科書において定番教材となったが、このことを『満洲補充読本』と合わせて考えるとき、これもまた敗戦を乗り越えた／乗り越えてしまった問題の一つとして立ちあらわれてこよう。

21　「十人十色」の文学教育を提唱した第一人者といえば、『想像力と文学教育』(三省堂、1971年)をあらわした太田正夫である。田近前掲書によれば、太田の「十人十色」は、「一人一人の読みを尊重するという点で、一見個性主義的に見えながら、しかし、はっきりと大正の個性絶対主義と決別したもので」、その決別とは、読む主体を「他者を媒介として変容・深化するものと考えるところ」にあった。見方を変えれば、これが示しているのは、戦前の「大正新教育」における〈自由性〉が修正を施されながらも戦後の文学教育の一つの方法として引き継がれたことである。

『北京官話　談論新篇』と満鉄中国語検定試験について

楊鉄錚

『北京官話　談論新篇』（以下は『談論』と略称）は明治 31（1898）年 12 月に中国人教師金国璞が平岩道知と協力し、日本で出版した上級中国語学習者向けの教科書である。『談論』は「満州」で実施された満鉄中国語検定一等試験の基準とされ、明治時代から昭和前期にわたって、日本ないし中国の中国語教育界において、深い影響を及ぼしたと言っても過言ではない。本稿は金国璞研究の一部として、『談論』の内容分析を行い、『談論』が満鉄中国語検定試験に取り込まれた理由を探る。

1　『北京官話　談論新篇』について

1　『談論』の内容

『談論』の冒頭に服部宇之吉と中国人教師張廷彦の序が書かれている。本文は 100 篇の短文、長文からなっている。内容は 2 人の会話文が多くを占めており、その他に 1 人の独白や 3 人の会話文もある。会話が行われる場所は海外と推測される場合もあるが、中国での会話がほとんどである。また、会話の参加者には外国人もいる。

『談論』について張廷彦は序でこう述べている。

> 余觀覽迴環見其事皆目今要務閱其辭皆通時語言較諸自邇集全部亦有過之而無不及焉善學者苟能簡練揣摩觸類旁通施措於官商之際則博雅善談之名將不難播於海内也
>
> （和訳：私は本書を数度も拝読した。内容はすべて現在重要な時事などに着目し、現代の言葉を使っている。『語言自邇集』と比べると、勝るとも劣らぬ。有能な学習者は（本書を使い、）一を知り、他の言い方を類推し、それを役所やビジネスの場面で応用すれば、知識が豊富で、中国語が堪能だと国内で名が知られるようになるだろう。）

張廷彦は『談論』の内容、表現について評価し、また『談論』は「『語言自邇集』と比べると、勝るとも劣らぬ」と述べている。この『語言自邇集』は 1867 年にイギリス人外交官トーマス・ウェードによって作られた中国語教科書である。『語言自邇集』が日本に紹介されて以来、『語言自邇集』を模倣する教科書が次々と出版され、日本中国語教育界に強く影響した。

2　『談論』の話題

筆者は『談論』（初版）の内容を分類し、8 種類に分けた（表 1）。『談論』の原文に各篇の小見出しが表記されておらず、その内容を表すため、筆者は表 1 の「例」に小見出しを付けた。

表 1.『談論』の話題

話題	数	例
日常生活	22	家を建てる（第 11 篇） 裁判にかける（第 56 篇）
貿易、商売	21	店を開く（第 10 篇） 外国人商人が国際貿易を営む（第 36 篇）
中国社会、時事	21	食糧問題（第 35 篇） 株を発行する（第 88 篇）

仕事関係（官僚、翻訳など）	11	官僚になる（第8篇） 本を訳す（第54篇）
税関関係	8	貿易港（第5篇） 税関の規則（第13篇）
旅	7	天津から東京（第6篇） 船で上海から漢口へ（第9篇）
勉強	6	言葉を勉強する（第1篇） 語学教師を雇う（第44篇）
軍事	4	武器販売（第60篇）

表1のとおり、『談論』には「日常生活」、「貿易、商売」、「中国社会、時事」の話題が最も多く、教科書の大半を占めている。それ以外には、「仕事関係」、「税関関係」、「旅」、「勉強」、「軍事」などの話題もある。

3　テクストについて

『中国語関係書書目（増補版）1867 ～ 2000』(1)に『談論』が収録されている。その一部の情報を以下（表2）に抜粋する。

表2.『談論』の書誌事項

書名	編著者	発行年月日	発行所
北京官話談論新篇	金国璞 平岩道知	31.12.15	積嵐楼書屋

調べたところ、明治31年から昭和16（1941）年までのほぼ半世紀の間、『談論』は25版が出版されている。筆者は以下の五つのテクストを参考にした。

①明治31年12月11日版
②明治38年12月10日訂正第4版
③明治43年10月10日訂正第7版
④大正10年4月20日訂正第13版
⑤昭和16年6月1日第25版。

以上の五つのテクストの中に、三つのバージョンがある。

(1) 初版。初版は明治31年12月に出版された（図1）。教科書の出版社名は書かれていないが、「寄売所」は善隣書院となっている。表紙には『北京官話　談論新編』というタイトルがあり、左下に「積嵐楼書屋蔵版」と書かれている。本文の最初に「談論新編」と書かれている。本文内容134ページ。

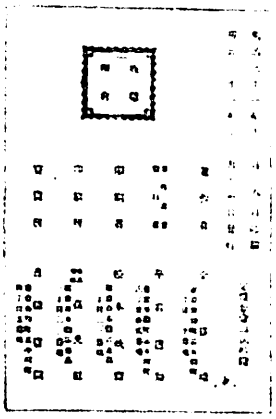


図1『談論』初版の奥付

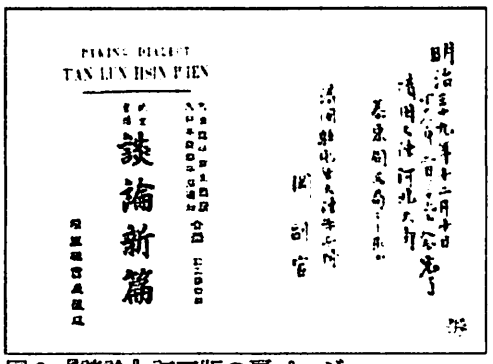


図2『談論』訂正版の扉ページ

(2) 訂正版（図 2)。訂正版は明治 33（1900）年 10 月に出版された。「寄売所」は文求堂書店となった。本のタイトルが一文字変わり、『北京官話　談論新篇』となり、英語タイトルの「PEKING DIALECT T'AN LUN HSIN PIEN」も併記されている。内容は初版と比べて、張廷彦と服部宇之吉の序の順番が逆になり、会話文のレイアウトも若干異なるが、本文の内容は同じである。本文内容 134 ページ。筆者が参考にした訂正第 4 版は『中国語教本類集成 第一集第四巻』(2)に収録されており、その扉ページに本の持ち主が購入する際に書いた文字が残っている。その文字によると、購入時期は明治 39（1906）年、購入場所は「清国天津河北大街泰東同文局」である。明治 39 年に、『談論』が中国で販売されていたことが分かった。おそらく、中国で販売するために英語のタイトルが付けられたのだろう。

(3) 第 25 版。第 25 版は前の 2 版と大きく異なっている。まず、タイトルが「官話　談論新篇」となった。本文内容も改訂され、100 篇の会話文の中、73 篇は修正されていないか、少し修正が加えられたもので、27 篇は新しいものである。本文のページ数は 202 ページである。

以上の情報を以下の表にまとめる（表 3)。

表 3 『談論』のテキスト

	発行日付	表紙・扉ページ	序の順番	本文のタイトル		寄売所・出版社	ページ数	所蔵
1	明治31年12月11日	北京官話談論新編	①服部宇之吉②張廷彦	談論新編	積嵐楼書屋蔵版	善隣書院	134	国会図書館
2	明治38年12月10日訂正第4版	北京官話談論新篇	①張廷彦②服部宇之吉	談論新編	積嵐楼書屋蔵版	文求堂書店	134	東京大学／『中国語教本類集成』第1集第4巻
3	明治43年10月10日訂正第7版	北京官話談論新篇	①張廷彦②服部宇之吉	談論新編	積嵐楼書屋蔵版	文求堂書店	134	東京大学総合図書館
4	大正10年4月20日訂正第13版	北京官話談論新篇	①張廷彦②服部宇之吉	談論新編	積嵐楼書屋蔵版	文求堂書店	134	『中国語文資料彙刊』第4篇第3巻
5	昭和16年6月1日第25版	官話　談論新篇	①張廷彦②服部宇之吉	談論新篇	×	文求堂書店	202	『中国文学語学資料集成』第2篇第1巻

2　満鉄中国語検定試験について

1　語学奨励試験実施の背景

満鉄中国語検定試験は南満州鉄道株式会社（略称満鉄）によって実施された中国語試験である。満鉄とは日露戦争後、「満州」で設立された日本の半官半民の会社である。本社は関東州大連市にあり、明治 39 年から昭和 20（1945）年まで存在していた。

満鉄の事業は鉄道業を中心に、鉱業、水運、電気、倉庫、土地、家屋なども兼営し、最盛期は 80 あまりの関連企業を持っていた。広範囲にわたって事業を展開したために、満鉄は多くの鉄道技術者、土木工員、労働者を雇っていた。後に彼らの家族や商売人が鉄道付属地に移住し、鉄道付属地の人口が急増した。例として、明治 41（1908）年に、開原、長春、四平街、奉天の 4 つの鉄道付属地の人口構成は、中国人 4800 人、日本人 4036 人、第三国籍 7 人であったが、大正 13（1924）年になると、中国人人口は 66331 人、日本人 32299 人、第三国籍 905 人と増加した（表 4）(3)。

表4 開原、長春、四平街における中国人、日本人人口

時期	中国人人口	日本人人口
明治41（1908）3月	4,800人	4,036人
大正元（1912）3月	18,591人	9,498人
大正5（1916）3月	36,642人	13,856人
大正9（1920）3月	51,362人	24,250人
大正13（1924）12月	66,331人	32,299人

以上のデータから分かるように、数多くの日本人が「満州」という土地に移住し、4つの付属地において、大正13年の日本人人口は明治41年の8倍以上となった。しかし、満鉄管理層や技術者を含めて数万人の中、中国語のできる人材は決して多くなかった。その理由は戦前の日本の教育システムにある。

明治以来、日本の教育システムにおいて、中国語、英語、ドイツ語、フランス語などの外国語が取り込まれていた。しかしその中で、英語、ドイツ語、フランス語は主に相手の文化を勉強するための言葉であったのに対して、中国語は文化的背景を無視した実用会話を中心とする「特殊語学」とされ、極少数の人にしか学ばれて来なかった(4)。

当時の学制は、中学校を卒業して、高等学校に進学する者は、すでに大学に入ったことになる。そのため、高等学校に入ることは、エリート・コースに乗ることと同様であった。しかし、エリート・コースの一環と見なされる高等学校では、中国語は教えられていなかった。これについて、安藤彦太郎は『中国語と近代日本』で以下のように述べている(5)。

> これは文科と理科に分かれ、さらに主たる外国語によって、英語のクラスを文科甲類、理科甲類、ドイツ語クラスを文科乙類、理科乙類とよんだ。また、一部の高等学校に、フランス語を第一外国語とする文科丙類というのがあった（一部に理科丙類もあったが、すぐ廃止された。）このエリート・コースには戦前は中国語もロシヤ語も、第一外国語としてはもとより、第二外国語としても設置されたことがない。（後略）

このように、エリートを養成する高等学校では、中国語を教えていなかった。極少ない中国語を希望する学生は、中学校を卒業後、東京外国語学校や専門学校に入って勉強するか、民間の語学学校で勉強するほかなかった。彼らは卒業後、帝国大学の卒業生と違う道を歩み、公使や政府役人と無縁で、中国語通訳、翻訳などの技能者となった。

倉石武四郎は『支那語教育の理論と実践』(6)でこう述べている。

> 北京なり南京なりに駐在している人たちで、支那語を上手に話すのは、おほむね、下僚であって、要職にある人は、ほとんど、支那語らしい支那語が話せない（中略）外交官として高い地位に進むために、欧州の教養は相当以上に重んぜられているが、支那語はまるつきり関係がないから、学生時代にも、支那語を勉強する様な篤志家もなく、欧州から支那へまはされて、はじめて少しく稽古をする程度である。

以上のとおり、当時の日本において、多くの学生は中国語に無関心で、エリート層は中国語を勉強しないこととなっていた。その結果が、中国をベースにした満鉄に深く影響した。満鉄付属地の日本人人口が急増するにつれて、言葉が通じないことで、会社運営上の問題がますます深刻となり、中国語人材を育成することが急務となった。

満鉄が発足して14年後の大正11（1922）年11月に満鉄は社報第7405号で「語学検定試験に関する諸規定」を公布し、満鉄語学検定試験に合格した者に対する経済的奨励を始めた。

2 語学奨励試験について

(1) 語学奨励に関する訓諭

以下は満鉄社報第7405号で公布した「語学奨励に関する訓諭」(7)である。

語学奨励ニ関スル訓諭　　大正 11 年 11 月　社法第 7405 号

華語、露西亜語及日本語ヲ修得スルハ満蒙ノ地ニ於テ各般ノ文化事業ニ従事セムトスル者ニトリテハ必要ナルノミナラス苟モ当会社ノ業務ニ従事スル者ニ在リテハ更ニ一層緊要ナルコトナリトス今般語学検定試験規程ヲ制定シタルハ畢竟此等語学ノ修得ヲ奨励シ一層社業ノ円滑ナル進展ト敏活ナル運行トヲ期セムトスルニ外ナラス社員各位能ク其ノ趣旨ノ存スル所ヲ体シ之カ研究修養ニ力メ以テ日華ノ共栄共存ノ実ヲ挙ケ其ノ期待ニ副ハンコトヲ望ム

訓諭によると、満鉄は社員の外国語学習により、社業がより円滑に進むことを期待し、語学奨励政策を打ち出したという。外国語は前文で述べたようなエリート・コースに取り入れられていない中国語とロシア語であった。

また、語学試験は「語学ノ修得ヲ奨励」する試験のため、奨励を受けない日本人職員は中国語やロシア語を勉強しなくても良いと考えられるが、実際は現役日本人社員に中国語の学習が義務づけられていた。満州生まれ、満州育ちの日本人女優李香蘭は小学校の頃に、父が満鉄研修所で行った中国語授業に出席したことがあり、彼女は自伝『李香蘭　私の半生』(8)でこう振り返った。

当時（筆者注： 20 世紀 20 年後半から 30 年代前半)、満鉄に勤務する日本人社員は、中国人との意思疎通の円滑をはかるため、北京官話の修得が義務づけられていた。

(2) 語学検定試験規定

語学に対する奨励の詳細は大正 11 年 11 月付の社則第 14 号「語学検定試験規定」で定められている。

規定 8 条は以下のとおりである。

第一条　本規定ニ依リ試験スヘキ語学ハ日本人ニ対シテハ華語又ハ露西亜語華人並其ノ他ノ外国人ニ対シテハ日本語トス

第二条　試験ヲ分チテ予備試験及本試験トス但シ予備試験ニ合格セサル者ニ対シテハ本試験ヲ行ハス

第三条　試験ノ等級ハ露西亜語及日本語ニ在リテハ一等、二等、三等及特等ノ四種トシテ華語ニ在リテハ一等、二等、三等、四等及特等ノ五種トス

第四条　本試験ニ合格シタル者ニハ別表書式ニ依ル合格証ヲ交付ス

第五条　試験ハ毎年一回秋季ニ於テ之ヲ行フ

第六条　試験ノ期日、場所及方法ハ其ノ都度之ヲ定メ予メ告示ス

第七条　試験ハ筆記及口述トス　筆記試験ハ訳解、作文及書取トシ口述試験ハ会話、読方及聞取トス

第八条　受験志願者ハ別表第二号書式ニ依ル受験願書ニ第三号書式ニ依ル履歴書ヲ添ヘ学務課長ニ提出スヘシ、但シ当会社員タル受験者ニ在リテハ所属長ノ推薦ヲ要ス

規定は中国語とロシア語の対象を日本人、日本語の対象を中国人と他の外国人と定め、中国語を 5 級、ロシア語と日本語を 4 級に分けた。また、第八条に「(受験志願者は二点の書類を学務課長に提出すべきだ、) 但シ当会社員タル受験者ニ在リテハ所属長ノ推薦ヲ要ス」と書かれている。つまり、社員でない民間の一般人も試験を受けることができた。

実際は、満鉄中国語検定試験が実施されて以来、満鉄は人材を募集する際に、中国語検定試験に合格することを入社の条件とした。李香蘭は自伝 (p.14) でこう述べている。

全国一律の国家試験による検定資格は、初級から上級まで四等、三等、二等、一等、特等の五段階に分れていたが、満鉄はこの検定有資格者でなければ正規の社員として採用しなかった。上級になれば俸給もよくなる。だから受講者はみな一所懸命に勉強した。

(3) 語学検定試験程度及標準

「語学検定試験程度及標準」は大正 11 年 12 月に社報第 4740 号で公表され、日本語、中国語とロシア語それぞれの標準が定められた。

四等は簡単な日常会話レベルで、特等は新聞雑誌程度と設定されたが、三等から一等は、三つの教科書が試験の基準とされた。三等は『急就篇』、二等は『官話指南』、一等は『談論』と設定された。本稿で検討する『談論』は上級者向け教科書のため、一等の基準となった。

以下は「中国語試験程度及標準」の内容である。

中国語試験程度及標準

・四等

1.極テ卑近ナル日常会話ヲ為シ得ル者ニシテ最平易ナル口語文ノ書取、聴取、読方、華文和訳、和文華訳を差支ナク為シ得ル程度

・三等

1.急就篇程度ノモノヲ標準トセル会話、書取、聴取、読方、華文和訳、和文華訳を差支ナク為シ得ル程度

・二等

1.官話指南程度ノモノヲ標準トセル会話、書取、聴取、読方、華文和訳、和文華訳を差支ナク為シ得ル程度

・一等

1.談論新篇程度ノモノヲ標準トセル会話、書取、聴取、読方、華文和訳、和文華訳を差支ナク為シ得ル程度

2.平易ナル時文及書簡文ヲ読解シ得ル程度

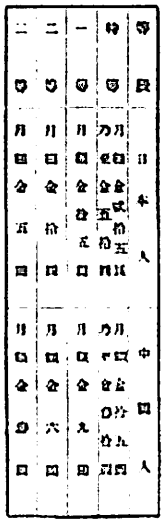
・特等

1.新聞雑誌ノ白話文程度ノモノヲ標準トセル会話、書取、聴取、読方、華文和訳、和文華訳を差支ナク為シ得ル程度

2.新聞雑誌ノ記事及書簡文ヲ読解シ得ル程度

3.時文及書簡文ヲ書キ得ル程度

(4) 奨励金



等級				
日本人	特等	一等	二等	三等
	月給五拾圓	月給五拾圓	月給拾圓	月給五拾圓
中国人	月給五拾圓	月給八拾圓	月給六拾圓	月給拾圓

図 3 奨励金

奨励金について、日本人が中国語とロシア語を勉強する場合の奨励金は中国人が日本語を勉強する場合の奨励金よりすこし高かった。また中国語検定試験は 5 つのレベルもあり、社員がロシア語

試験と日本語試験にない四等試験に合格しても、奨励金は支給されない。
『旅程と費用概算』(9)によると、昭和 5（1930）年に東京全市の貸切自動車は 1 円／台で、東京メトロは全線 10 銭均一であったが、中国語一等試験に合格すれば、給料は月に 15 円も増える。当時の「満州」において、日本人の小学生を含めて中国語学習ブームがどれほど絶大だったかは想像できるだろう。

3 『談論』が満鉄中国語検定試験に取り入れられた理由

(1) 日本本土では『談論』は上級中国語教科書として定番化された

前文で述べたように、当時中国語を勉強する道は東京外国語学校、専門学校や民間の中国語学校などしかなかった。換言すれば、大学には中国語専門が設置されていないため、以上の学校は日本における中国語教育を担い、東京外国語学校をはじめ、当時の中国語教育の水準を代表していた。前述の数種類の学校を通じて、当時の日本における中国語教育全般を窺いしることができるだろう。
また、満鉄中国語検定試験は日本から離れる「満州」で実施された試験だが、日本本土の中国語教育を無視し、何の土台もなしに作り上げられたとは考えにくい。そのため、満鉄中国語検定試験が『談論』を採用し、基準とした原因は日本本土の中国語教育と深く関わっていたからではないかと考えられる。それを明らかにするため、筆者は当時の中国語教育において、代表的な学校東京外国語学校、台湾協会学校、善隣書院及び北京同学会語学校のカリキュラムを調べた。

①東京外国語学校

明治 18（1885）年に（旧）東京外国語学校が廃止されて以来、外国語を専門に教育する官立学校の空白の時期は十数年もあった。明治 32（1899）年に高等商業学校附属外国語学校は（新）東京外国語学校として独立し、長期にわたり、唯一の中国語専門を設置した官立学校となった。
東京外国語学校のカリキュラムを調べたところ、学校から出た資料は見当たらないが、外国語学校の卒業生が当時の中国語教育を語る文章が見つかった。
田中慶太郎は明治 31 年に外国語学校に入学し、中国語を専攻した。彼は授業で『談論』を使ったことがあり、その後文章「出版と支那語」(10)でこう述べている。

> 二年生になつたとき（筆者注：明治 32 年）、平岩道知、金国璞共著の「談論新編」ができたので、それをならひました。

『談論』は明治 31 年 12 月に出版され、明治 32 年から外国語学校で使われていたことが分かった。しかし、なぜ『談論』は出版されて間もなく外国語学校の中国語授業で使われたのだろう。それは、金国璞が外国語学校の中国語講師であるからだ。当時の中国語クラスでは講師が作った教科書を使うのは普通だった。それゆえ、『談論』は出版されてすぐにクラスで使用された。
しかし、明治 36（1903）年に金国璞が故郷の北京に戻った後、『談論』はどうなったのだろうか。武田寧信は明治末期の東京外国語学校の中国語授業について、「その頃の中国語界（一）」(11)でこう述べている。

> 明治四十二年春王の四月、（中略）テキストとしても、まだまだ中国語研究の標準が南方音から北京語に移ってから、左程年数もたっていないのか、その名残りがプンプン匂っていた。劈頭第一にぶつかったのが、あの白地に背の赤い B6 半截の小本官話急就篇である、これは宮越健太郎先生が使った。松先生は自著の日清語入門、続日清語入門と日漢英語言合璧（呉、鄭合著）を口授。岡本先生が発音を一通り指導してから自著の清国商業用文、清国書簡文、作話を中日両国語でドシドシ饒舌る、神谷先生が書取（多くは宮島大八著官話篇から取材）を課し、木野村先生が時文を持たれた。そして談論新篇（金国璞、平岩道知合著）、官話指南（鄭、呉合著）、今古奇観（金国璞訳）、官話文法（張、田中共著）などがその後に続いたのだが、辞書は僅に支那声音字彙（岡本篇）と支那語辞彙（石山福治編）だけだった。課外の参考書としては動字分類大全（張廷彦著）、助字用法（青柳篤恒著）、華語跬歩（御幡雅文著）、支那語異同辨（原口新吉著）、京話萃選（秋山昱禧）などの如き、かなり啓発された点も多かったが、また亜細亜語言自邇集（広部精編著）、四声聯珠（福島安正大尉著）の時代から相距ること遠か

らずであった。

先生の交代によって、教科書の入れ替わりもあったが、武田の話によると、明治 42 年に『談論』はまだ使われていた。実は、前述したように、東京外国語学校は長い時期唯一の中国語を専門として教えた学校であった。そのため、新たに招聘されてきた講師も外国語学校の卒業生で、金国璞の学生であった。卒業生は中国語講師になり、自分が学生の頃に使っていた中国語教科書を使うことにした。そのため、『談論』の使用が続けられた。

②台湾協会学校

台湾協会学校は明治 33 年に台湾協会によって設立された学校で、拓殖大学の前身である。満鉄一代目の総裁である後藤新平（1856 ～ 1929）は大正 8（1919）年から、亡くなる前まで拓殖大学の学長として勤めていた。植民地開発などと深く関わっていた。金国璞は台湾協会学校が設立されたその年から中国語を教えていた。

『国際貢献の文脈　その 1 ―満州・中国編』(12)によると、台湾協会学校創立時の中国語教員は金国璞と足立忠八郎の 2 人で、金国璞は在職明治 33 年 9 月～明治 34 年 6 月という。また、同書から昭和 11（1936）年 3 月付のカリキュラムも確認できた。予科 1 年と専門部 1 年の教科書に『急就篇』などがあり、専門部 2 年から『官話指南』を勉強し、学部 1 年になったら『談論』を使いはじめる。教科書の種類や難易度の順は満鉄中国語検定試験の基準と一致している。

③善隣書院

善隣書院は中国語教育者宮島大八（1867 ～ 1943）によって作られた私立中国語学校であり、日本の中国語界の中枢的存在であった(13)。善隣書院は 400 数名の卒業生を有し、卒業生の中には、中国内地で実業、教育に従事する者が 100 数人もおり、日露戦争の際に 50 数名の通訳が中国に赴いた(14)。金国璞は善隣書院で数年間中国語を教え、『談論』初版の「寄売所」は善隣書院となった。明治 32 年の善隣書院のカリキュラムによれば、『談論』は善隣書院の語学参考用書であった(14)。

④北京同学会語学校

北京同学会語学校（「支那語学舎」から数回名が変わり、大正 14（1925）年に北京同学会語学校となった）は明治 36（1903）年に金国璞が帰国する際に、東京外国語学校の卒業生は金国璞養老のために作った学校である。筆者は昭和 7（1932）年、昭和 10（1935）年の『北京同学会語学校概覧』から、当時のカリキュラムを見つけた。『談論』は「課本訳読」という授業で使われていた。その他、『急就篇』、『官話指南』もカリキュラムに取り入れられている。

以下は昭和 7 年度（昭和 7 年 4 月～昭和 8 年 3 月）教科一覧から抜粋してきた内容である。

・正科第 1 学年
　課本訳読：『急就篇』、『官話指南』など
・正科第 2 学年
　課本訳読：『談論新篇』など
・夜学第 1 学年
　課本訳読：『急就篇』など
・夜学第 2 学年
　課本訳読：『官話指南』など

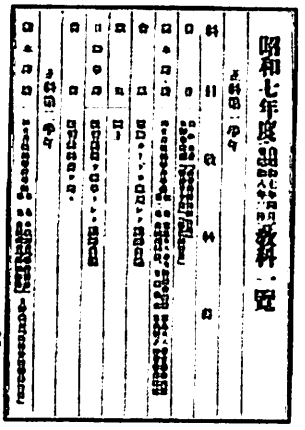


図 4 『北京同学会語学校概覧』のカリキュラム

調査の結果、『談論』は東京外国語学校、台湾協会学校、善隣書院、北京同学会語学校で使われ、上級の教科書として定番化された。そのため、日本においても、中国においても、上級の中国語を勉強する際に、『談論』を勉強することとなる。また、以上の多くの学校の中国語のカリキュラムは初級を『急就篇』、中級を『官話指南』、上級を『談論』という学習システムを採用している。満鉄中国語検定試験にはそのシステムが反映されていると考えられる。

(2)『談論』の内容は日本社会のニーズに合う

戦前の中国語教育について、竹内好は「行商支那語」と「兵隊支那語」と評価している(16)。安藤彦太郎も『中国語と近代日本』(17)では、当時の中国語教育について、以下のとおりに述べている。

> 中国語を実用的な「特殊語学」だというばあい、その「実用」には、戦前における中国大陸への日本の進出の二つの側面に対応して、「商務」、「軍事」の二面があった。

つまり、当時の日本社会は「商務」と「軍事」の面において、中国語の人材を求めていた。こういった社会的ニーズに『談論』はどう答えたのだろう。

前文で分析したように、『談論』の話題は「日常生活」、「貿易、商売」、「中国社会、時事」、「仕事関係」、「税関関係」、「旅」、「勉強」、「軍事」の8種類に分けられ、軍事については4篇だけ触れたが、残る文章はほとんど実用的な会話である。商売（21篇）及び税関（8篇）と直接関わる文章は合計29篇、全体の29％を占めている。また他の中国社会、時事（21篇）、旅（7篇）などの内容も日本人が中国で勤務するのに、実用的な会話文だと考えられる。

当時日本の中国語教育において、初級の教科書が圧倒的に多いのに対して、上級の教科書はわずかしかなかった。ここで、当時の他の上級中国語教科書も見てみよう。『中国語関係書書類（増補版）1867～2000』によると、『談論』が出版される前後の長い時期、上級向けの中国語教科書は『北京風土編』しかなかった。

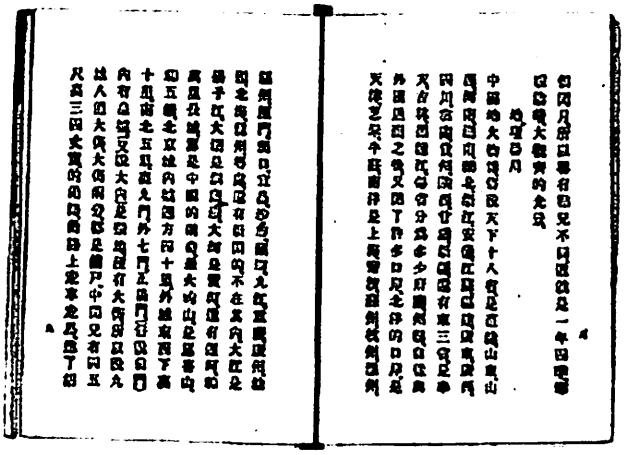


図5『北京風土編』

『北京風土編』は『談論』が出版される1ヶ月前の明治31年11月に中国人教師張廷彦によって出版された。本文は12篇の長文で、書名とおり、北京の天気、地理、社会制度、植物などの紹介であり、全書68ページ。内容については、『北京風土編』は『談論』と大きく異なり、11篇は1人の独白である。つまり『北京風土編』の内容は実用的な会話文ではなく、「読本」に近い。そのため、当時において、『北京風土編』の使用頻度は『談論』に及ばない。

以上、『談論』の内容は日本社会が求めている実用的中国語と合致し、さらに金国璞の教育活動によって、『談論』が広く使われるようになった。そのため、『談論』は日本における中国語教育において、上級学習者向けの中国語教科書として定番化された。そこから、満鉄中国語検定一等試験

の基準と定められた。

注

1　六角恒廣、不二出版、2001 年、p.12
2　六角恒廣、不二出版、1991 年
3　大野太幹「1920 年代満鉄附属地行政と中国人社会」『現代中国研究』第 21 号、2010 年 10 月、p.99。表 4 は論文のデータより整理。
4　安藤彦太郎、『中国語と近代日本』岩波新書、1996 年 3 月第 4 刷、p.2
5　同上、p.3
6　岩波書店、1941、p.84
7　福島正明『注釈関東庁満鉄支那語奨励試験問題集』大阪屋号書店、1927 年
8　新潮社、1990 年、p.14
9　ジャパン・ツーリスト・ビューロー、1930 年、p.4
10 『中国文学』第 83 号、1942 年 5 月、pp.39 ～ 44
11 『中国語雑誌』1950 年 5 月
12　長谷部茂編著、拓殖大学創立百年史編纂室編、2005 年 3 月、p.199
13 『中国語教育史の研究』p.210
14 『東京朝日新聞』明治 41 年 3 月 13 日
15　張廷彦『支那音速知』善隣書院、明治 32 年 6 月 20 日
16 「支那語について」『中国文学』第 78 号、1941 年
17　岩波新書、p.15

木下杢太郎と『支那伝説集』
―中国南方の旅とフランス人宣教師Léon Wiegerの影響―

范文

1　木下杢太郎について

木下杢太郎（1885-1945）は静岡県伊東市出身、7人兄弟の末子として生まれた。実家は「米惣」という商家である。本名は太田正雄、皮膚科の医学者、作家、翻訳家、批評家、美術史・切支丹史研究家である。森鴎外、与謝野晶子、北原白秋と親しかった。

1911年東京帝国大学医学部を卒業。1916年から1920年まで、奉天の満鉄付属地の南満医学堂教授兼奉天医院皮膚科部長を勤めた。1921年から1924年まで欧米に留学し、語学を学び、1922年フランスで医学博士号を得た。帰国後、愛知県立医学専門学校・東北帝国大学の教授を歴任し、1937年東京帝国大学医学部の教授となって皮膚科学講座を担当。

文学、美術、医学に関する著作を多く残し、訳著に、

（ドイツ語）　『十九世紀佛國繪畫史』リヒアルト・ムウテル（Richard Muther）
　日本美術学院　1919年、改訂版　甲鳥書林　1943年
『エグモント』ゲエテ
　『ゲーテ全集』第14巻　改造社　1938年
（中国語）　『支那伝説集』
　『世界少年文学名作集』第18巻　精華書院　1921年、再版　座右宝刊行会　1940年
（スペイン語）『ルイス・フロイス日本書翰』ルイス・フロイス
　第一書房　1931年、再版　慧文社　2015年
（イタリア語）『日本遣欧使者記』グワルチェリ（Raccolte da Guido Gualtieri）
　岩波書店　1933年

などがある。『木下杢太郎日記』5冊の大部分もドイツ語とフランス語で書かれ、外国語力が非常に高いとされる。

大正6年春　南満医学堂教授室にて（『木下杢太郎全集』第6巻）

静岡県伊東市　木下杢太郎生家（筆者撮影）

２『支那伝説集』について

木下杢太郎（以下、「木下」と略称）はその生涯で、翻訳作品を多く残しているが、唯一訳した中国の文学作品集がこの『支那伝説集』である。『木下杢太郎全集』の第20巻には、翻訳作品集の『支那伝説集』が収められている。『支那伝説集』は1921年に『世界少年文学名作集』として精華書院より出版された。全部で63篇あり、『新斉諧』(46篇)、『続新斉諧』(2篇)、『聊斎志異』(6篇)、『春渚紀聞』(1篇)、『江行雑録』(1篇)、『広異記』(3篇)、『翦灯新話』(1篇)、『幻異志』(1篇)、『宣室志』(1篇)、『稽神録』(1篇）が含まれている。

『支那伝説集』は『世界少年文学名作集』の１冊として位置づけられ、読者は主に青少年と考えられる。木下杢太郎の訳文を見ると、原文に忠実で、分かりやすく、やさしい日本語で訳している。特に、中国の年号や地名及び固有名詞などに関して、そのまま音訳するのではなく、文脈に合わせながら解釈していく方法を取っている。訳者の実体験も加えながら、読者に物語の背景になる現地の風景を想像させようとしている。

「符離の一夜」（原題「符离楚客」）の背景は江蘇省徐州である。木下杢太郎は始めの部分で、自身が実際に旅行で徐州まで行き、符離集というところで電車を降りて宿がないため、駅長の休憩室で仮寝をし、不安な夢を見たと書いている。その実体験が、「符離の一夜」のストーリーと緊密に繋がる。

1951年10月、NHK第二放送――世界の名作（中国篇　第5回）という放送番組で『支那伝説集』の中から2篇「こほろぎ」と「板橋店」が選ばれ、八木隆一郎により脚本化されて放送された。

木下杢太郎はどのような経由で『支那伝説集』を翻訳することになったのか、それを明らかにするため、初版と再版の序言を見ていきたい。

１）『支那伝説集』初版(1)

本書は主として支那近世の小説集「新齊諧（別名、子不語）」から抄譯し、「聊齋志異」「廣異記」等のものをも少し加へました。

私がかくの如く支那小説を飜譯するに至つたのは、全く偶然のことです。昨年春上京の節「少年世界文学」の為めに何か獨・佛の作者のものを飜譯するやうに約束しましたが、其後自分の藏書に於ても、東京の書肆に於ても適當の書籍を捜し求めることが出来ず、そして私は約半箇年間支那南北地方を旅行して、支那の傳説に對する興味が旺んになつて居ましたから、いきなり座右にある支那の小説集を取つて之を抄譯して、責を塞いだのです。

私を始めて支那の傳説に導いてくれたものはLéon Wiegerr S.J.師のFolk-lore Chinois Moderneです。

私はその為めに二、三、四月中の幾夜かを割いたのに過ぎませんから、材料の選擇は粗漏で、飜譯は杜撰です。また支那の小説を飜譯すると云ふ爲事その事が私の得意のものではありませ

んでした。（後略）（序言）

２）『支那伝説集』再版(2)
（前略）「聊齋志異」は無論のこと、「新齊諧」にしてもなかなか分りにくい節々が有ります。然しさう云ふ箇所を聞き質すべき人も無く、つひ好い加減に飜譯しました。（中略）私に「新齊諧」を抄譯する心を起こさせてくれた耶蘇會士レオン・キイゲル師の「近代支那伝説集」に據ると、近代支那の民間傳説は唐の不空三藏（阿目佉跋折羅）の新佛教、宋の新道教、朱熹の新儒教などと、回紇、阿剌比亜、トングス、蒙古阿蘭などの怪談との混淆に起るものだと云ひますが、聊齋にしろ、隨園にしろ、其物語は決してひとりで空想して作り出したものではなく、いろいろの説話を集め修飾したものでせう。傳説の系統の考覈の上にはもつと古い時代の物語が重要なのでせうが、私はさう云ふ本を集めて居りませんので、唯面白い物語を紹介するだけです。（後略）（重版序）

二つの序言から次の二点が読み取れる。
1）木下杢太郎は最初から中国の伝説を訳したいというわけではなく、中国の南方地方へ行き、現地で様々なことを体験し、中国の伝説に対する興味を大いに持っていた。
2）フランス人宣教師 Léon Wieger 氏とその著作『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』は木下杢太郎に大きく影響を与え、中国の伝説の世界へと導いた。

３『木下杢太郎日記』から見える木下杢太郎の中国南方の旅

序言から明白だが、木下杢太郎は南方地方へ行き、そこから中国の伝説に対する興味を抱いた。筆者は『木下杢太郎日記』を手がかりに、木下杢太郎が南方地方のどこまで行ったのかを調べてみた。

使用した資料は『木下杢太郎日記』第２巻(3)である。

本書の 177 頁から、1920 年 9 月、木下杢太郎の 3 ヶ月にもわたる長い旅が始まる。1920 年 7 月下旬、勤め先である満州奉天の南満医学堂を離れ、支那南北地方に旅に出たと記している。

1920 年 9 月 27 日　北京に入る
1920 年 10 月 12 日　夜 9 時列車で北京―太原大同雲崗石窟
1920 年 10 月 19 日　石家荘 1 泊
1920 年 10 月 20 日　鄭州
1920 年 10 月 21 日　洛陽
1920 年 10 月 24 日　鄭州
1920 年 10 月 25 日　漢口
1920 年 10 月 29 日　武昌から列車で岳州（岳陽楼）
1920 年 10 月 31 日　長沙
1920 年 11 月 4 日　漢口
1920 年 11 月 7 日　九江
1920 年 11 月 12 日　南京
1920 年 11 月 16 日　鎮江蘇州
1920 年 11 月 20 日　上海
1920 年 11 月 26 日　北京
1920 年 12 月 16 日　東京

日記の上からは、上記の旅先しか記述できないが、実際にはこれらのほかにも、あちこちに行っているはずだと考えられる。また、洛陽や鄭州、漢口、武昌、岳州、九江、南京、蘇州は、いずれも数回『新斉諧』、『聊斎志異』に題材の地としてとられている。特に『新斉諧』は、必ず始めに話が展開する場所、つまり地名がある。『支那伝説集』に選ばれた作品も実際に以上の地域が背景になっている話が多い。木下杢太郎はそれを訳す時、原文の地名だけではなく、日本の読者に話の背景が中国のどの辺にあるかを伝えるため、必ず省の名前を前に付け加えている。それも本人が実際

に訪ね、すぐどの辺にあるかを思い出せたことと関係があると考えられる。
木下杢太郎は南方に旅に出たと言ったが、実際には仕事も兼ねていて、各地の病院の視察も行った。大きな病院としては、武昌の同仁医院、長沙の湘雅病院、上海の同済病院などが挙げられる。そして、1920 年の 9 月から 12 月にかけ、3 ヶ月間の長い旅をしたが、1916 年から 1920 年の 4 年の間、木下杢太郎は何回も旅に出た。訪ねた場所の中にも『支那伝説集』中の話の舞台がある。

> 唯私が支那、殊に江南地方を旅行して後是等の小説を讀んで見ると、其土地其風俗に対する理解を細密にすることが出來て、私に取つては非常に面白く感じたのです。(『支那伝説集』の序言) (4)

以下は、『日記』中の『支那伝説集』に関する記述である。

1921 年 1 月 6 日　牡丹燈記をよむ
1921 年 1 月 8 日　夜新齋諧をよむ
1921 年 1 月 19 日　支那の新齋諧等ノ翻譯ヲアルスニヤル
1921 年 4 月 20 日　夜二時マデ聊齋を譯ス
1921 年 5 月 30 日　夜ハ聊齋を譯ス
1921 年 6 月 1 日　支那伝説集の序を書く
1921 年 6 月 5 日　夜牡丹燈記を譯ス

この旅行が終わり、東京に戻るとすぐ翻訳の作業に取りかかった。そこから、南方旅行と『支那伝説集』の誕生との繋がりがうかがえる。彼自身が伝説集の舞台となっている地方を訪ね、現地の風土を体験し、中国の伝説への理解もさらに深まったと言えるだろう。

4　Léon Wiegerと『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』

1) Léon Wieger について

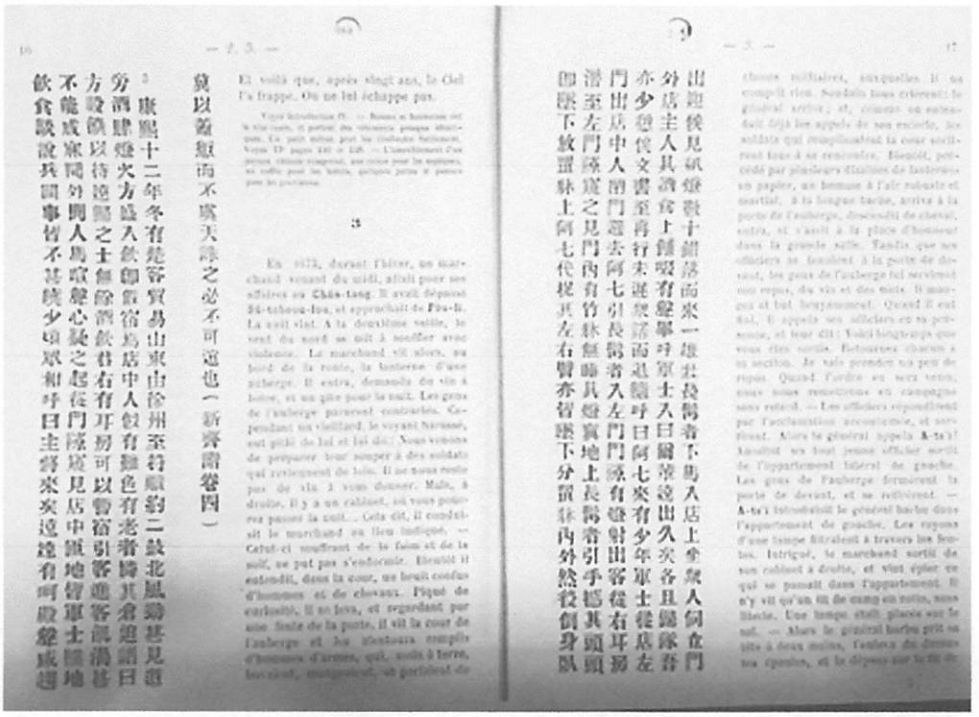
Léon　Wieger (1856-1933)、フランス人。中国名は戴遂良。1881 年中国に渡り、宣教師として、世を去るまで河北省献県で活躍した。最初は医師として仕事をし、中国の漢字・文化・思想に関する書物を、約 30 冊出版した。当時のフランス人宣教師向けの中国語入門のテキスト『漢語口語入門』(『Rudiments de parlerchinois』) 6 巻 (河間府キリスト教会出版社　1892 年) も編纂した。仏教と道教の典籍も数多く訳し、ヨーロッパの漢学研究において、非常に影響力のあった人物である。

2) 『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』

木下杢太郎を始めて支那の伝説に導いたものは、『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』で、中国名は『中国近代民間故事集』(5)、『中国現代民俗学』(6)、『現代中国民間故事』(7)と日本名は『近代支那伝説集』(8)などがある。
『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』は中国の文言小説、主に志怪小説を集め、全部で 222 篇ある。すべて中国語のタイトルがなく、番号を加え、後ろに出典の書籍名と巻数が書かれている。全てに原文を取り入れ、原文の隣にフランス語訳が付いている。

> 『新斉諧』(147 篇)、『聊斎志異』(13 篇)、『広異記』(11 篇)、『暗室燈』(7 篇)、『続新斉諧』(5 篇)、『搜神記』(4 篇)、『宣室志』(3 篇)、『酉陽雑俎』(1 篇)、『酉陽雑俎』『括異志』『昌平州志』(合わせて 1 篇)、『江行雑録』(1 篇)、『三国志』(1 篇)、『翦灯新話』(1 篇)、『墨荘漫録』(1 篇)、『龍興慈記』(1 篇)、『搜神後記』(1 篇)、『春渚紀聞』(1 篇)、『見聞後録』(1 篇)、『霊怪録』(1 篇)、『稽神録』(1 篇)、『集異記』(1 篇)、『異聞総録』(1 篇)、『松江府志』(1 篇)、『太平広記』(1 篇)、『幽明録』(1 篇)、『原化記』(1 篇)、『幻異志』(1 篇)、『洛陽伽藍記』(1 篇)、『紀聞』(1 篇)、『瀟湘録』(1 篇)、『両京記』(1 篇)、『冥祥記』(1 篇)、『桂苑叢談』(1 篇)、『紅楼夢』(1 篇)、『西遊記』(1 篇)

が含まれている。



『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE 』LÉON WIEGER S.J.著　1909年　河間府
（東京大学総合図書館所蔵　写真はそれをコピーしたもの）

以上の書目からみると、『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』には、中国古代のほとんどの志怪小説が含まれていることが分かる。しかし、222篇全てにタイトルがなく、番号で表示されていて、原文もかなり削られている。

> Léon Wiegerがこの本を訳した目的は、中国に来ている耶蘇會士に中国の風俗・宗教・文化を伝え、中国とキリスト教の神との関連を認めさせようとしたものと考えられる(9)。
>
> ただ、読者が物語の面白さに惹かれるのを心配し、わざと原文の文学性を抹殺したようである。中国の文化を勉強する宣教師たちに、中国人はキリスト教の神様の恩恵を受ける素質があることを証明するため、彼は中国文学を訳す時にいろいろと調整し、中国文化の中のキリスト教要素を強化するのを目的とし、中国文化の中のキリスト教と逆らう要素をすべて弱めたとされる(10)。

5　『支那伝説集』と『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』との関係

木下を最初に中国の伝説に導いたのは、『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』である。そこから、彼は中国の伝説を抄訳する気を起こした。実際に翻訳作業をしながら、『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』も参考にしたという。それでは、この2冊の本にはどういう関係があるのか、ここで検討したいと思う。

1）内容の一致

次の表に示すように、63篇のうち、60篇は『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』と重なる。ここから、木下は『支那伝説集』の作品を選択する時に、『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』を大いに参考したと言える。それの理由については、まず彼がフランス語に精通していたことが挙げられる。次に『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』の内容と構成による。この1冊には、35冊の志怪伝説集の内容が含まれている。木下が伝説集を訳す仕事を頼まれた時に、底本として

『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』は、絶好の選択肢であっただろう。
以下は、作品の対照表である。

『支那伝説集』	『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』	出典
馬士麟(マアシウリン)の話(はなし)	6	新斉諧巻5　傍观因果
二人(ふたり)の読書生(どくしょせい)	9	新斉諧巻1　南昌士人
呉三復(ウウサンフウ)	72	新斉諧巻5　吴三復
髑髏(されかうべ)の息(いき)	13	新斉諧巻1　骷髅吹气
獄卒罰(ごくそつばつ)せらるゝ事(こと)	10	新斉諧巻1　煞神受枷
酆都県(フォントウシェン)の県令(けんれい)	14	新斉諧巻1　丰都知县
奇夢(くしきゆめ)	95	新斉諧巻2　刘刺史奇梦
怪(あや)しい道士(どうし)が魚(うお)を求(もと)めた話(はなし)	97	新斉諧巻1　妖道乞鱼
山東(シャントン)の林氏(リンし)の話(はなし)	54	新斉諧巻2　山东林秀才
鬼(おに)の騙(かた)り	145	新斉諧巻2　鬼冒名索祭
胡蝶(こてふ)の怪(くわい)	180	新斉諧巻2　蝴蝶怪
死人(しにん)が冤罪(ゑんざい)を訴(うった)へに来(き)た話(はなし)	120	新斉諧巻2　屍行诉冤
平陽縣(ピンヤンシエン)の縣令(けんれい)の話(はなし)	34	新斉諧巻2　平阳令
烈傑太子(れつけつたいし)	144	新斉諧巻3　烈杰太子
寄附金(きふきん)の着服(ちゃくふく)	101	新斉諧巻3　火烧盐船
土地神(とちしん)の訴訟(そしょう)	88	新斉諧巻3　土地神告状
符離(フウリイ)の一夜(や)	3	新斉諧巻4　符离楚客
青龍黨(せいりうたう)	7	新斉諧巻4　青龙党
鬼(おに)を縛(しば)つた話(はなし)	71	新斉諧巻4　长鬼被缚
狐(きつね)の怪(くわい)	81	猎户除狐
七人(しちにん)の盗賊(たうぞく)の話(はなし)	162	七盗索命
僧智恒(そうチイハン)の霊(れい)	87	新斉諧巻4　智恒僧
文信王(ぶんしんわう)	8	新斉諧巻5　文信王
魂(たましひ)を蔵(しま)つて置(お)く瓶(かめ)のこと	×	新斉諧巻5　藏魂谭
雷公(らいこう)の代理(だいり)	201	新斉諧巻5　署雷公
體(からだ)の透明(とうめい)な鬼(おに)の話(はなし)	98	新斉諧巻5　空心鬼
老媼(ろうば)が妖術(えうじゅつ)を行(おこな)つたこと	102	新斉諧巻5　老妪为妖
水仙殿(すゐせんでん)	100	新斉諧巻3　水仙殿
虹(にじ)の精(せい)	191	新斉諧巻6　白虹精
孝女(かうちょ)	78	新斉諧巻6　孝女
鬼(おに)の送(おく)り損(そこな)ひ	76	新斉諧巻6　门夹鬼腿
妖怪爆竹(えうくわいばくちく)を恐(おそ)る	77	新斉諧巻6　怪弄爆竹自焚
母狼(ははおほかみ)に化(くわ)す	75	新斉諧巻6　老媪变狼
死(し)んだ夫(をっと)がその妻(つま)の命(いのち)を救(すく)つた話(はなし)	99	新斉諧巻6　周若虚
門神(もんしん)を祭(まつ)ること	122	新斉諧巻7　误学武松
父(ちち)の方(ほう)が子(こ)よりも壮年(とし)が若(わか)い話(はなし)	119	新斉諧巻7　陈姓父幼子壮
城隍神(しろのかみ)が酒(さけ)に酔(よ)つて裁判(さいばん)を誤(あやま)つた話(はなし)	108	新斉諧巻9　城隍神酗酒

江軼林(チャンシウリン)	210	新斉諧巻 9　江軼林
獅子大王(ししだいわう)	94	新斉諧巻 10　獅子大王
李百年(リイバイニエン)	203	新斉諧巻 5　李百年
騙術(かたり)	×	新斉諧巻 21　奇騙
騙(かたり)の仕返(しかへ)し	×	新斉諧巻 21　騙术巧报
通判(つうはん)の家(いへ)の婢(ひ)	204	新斉諧巻 11　通判妾
李通判(りつうはん)のこと	35	新斉諧巻 1　李通判
盛鬼(れいき)兄(あに)の命(いのち)を救(すく)ふ話(はなし)	209	新斉諧巻 20　灵鬼两救兄命
王弼(ワンビイ)の話(はなし)	158	续新斉諧巻 3　王弼
慾(よく)の深(ふか)い屍(しかばね)	146	续新斉諧巻 6　僵尸贪财
長清(チャンチン)の僧(そう)の話(はなし)	53	聊斎志異巻 1　长清僧
吝嗇(りんしょく)な梨商人(なししゃうにん)	96	聊斎志異巻 1　种梨
酒友(しゆいう)	56	聊斎志異巻 2　酒友
促織(こほろぎ)	171	聊斎志異巻 7　促织
屍變(しへん)	11	聊斎志異巻 13　尸变
河(かわ)の神(かみ)と城(しろ)の神(かみ)との争(あらそ)ひ	16	広異記　韦秀庄
人(ひと)に化(ば)けた虎(とら)の話(はなし)	62	広異記　松阳人
人(ひと)に化(ば)けた狼(おおかみ)の話(はなし)	65	広異記　正平县村人
酒(さけ)に酔(よ)つた體(からだ)から魂(たましひ)が離(はな)れて行(い)た話(はなし)	28	春渚紀聞
歸(かえ)る處(ところ)を失(うしな)つた魂(たましひ)の話(はなし)	1	江行雑録
板橋店(はんけうてん)	69	幻異志　板桥三娘子
王将軍(ワンしゃうぐん)の母(はは)	67	宣室志　王含
心臟(しんざう)のすりかへ	124	稽神録
不倒翁(ふたうをう)	130	新斉諧巻 2　不倒翁
宋公(そうこう)の話(はなし)	18	聊斎志異巻 1　考城隍
牡丹燈籠(ぼたんどうろう)	15	剪灯新話巻 2　牡丹灯記

2)『支那伝説集』から見た木下杢太郎の中国観

『支那伝説集』の作品と『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』がほぼ一致していることから、『支那伝説集』がただ『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』を日本語訳にしたと言うわけにはいかない。ここからは、木下が中国のどんなところに関心を持っていたかが窺える。訳者も自分の好みに合わせて作品を選んだと考えられる。

> 支那の小説を讀むと、我々の禽獸昆蟲に對する観念に或る特別の味ひを加へます。（中略）往々人間の魂が乗り移つて居ます(11)。

「酒友」「促織」の 2 篇はこの考えに基づいて訳されたと思われる。「酒友」は狐が若い男性に化ける話で、「促織」はコオロギに息子の魂が移った話である。

> 支那の小説を讀むと、人間の精神及び肉體が三つの成分に區別せられてゐるのを知ります。第一が「魂」であります。（中略）肉體と精神との間には、なほ一層低い精神があります。それが「魄」であります。（中略）再生すること出來ないのがあります。是等の亡霊をば「鬼」と謂ひます(12)。

ここから、木下は中国の死生観、宗教及び思想に関心が持っていることが分かる。同じ医者としての Léon Wieger にも同じような関心があり、肉体と精神の関係に興味を示している。そこで、「長

清僧」（他人の遺体に魂を移す話）と「尸変」（僵屍になった女の話）が選ばれた。
また道士について次のように述べている。

唯法力の強い道士などは、魔術で魂を呼ぶことが出來ますから、その人に頼んで呼んで貰ふのです。（中略）魔術の巧みな道士などは、地獄から魂を呼び、或は生きてゐる人から魂を奪つて、之を自分の使役に供することが出來ます。或は人に頼まれて、其悪い魂と、他人の良い魂とをすり換へてやつたりします。其他道士はいろいろの魔術をすることが出來ます。さう云ふのを「妖人」と謂ひます(13)。

「道士」という特別な存在にとても興味を持っている。ここから木下の中国の宗教への関心が分かる。その点では、Léon Wieger と同じである。Léon Wieger は、1910 年から中国の仏教と道教の典籍を編集し、翻訳した。『支那伝説集』の中に訳された「種梨」は、道士の魔術をうまく表現した作品である。

3）日本の青少年を対象とする木下訳の風格

①原文に忠実であること

『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』の読者は、ヨーロッパの宣教師、その本も中国文化の中のキリスト教的要素を強化するのが目的であり、キリスト教と矛盾する部分や関係ないところは削っていく。それに対して、『世界少年文学名作集』の 1 冊である『支那伝説集』の読者は、日本の青少年であり、青少年に異国の風土及び文学を紹介するのが目的だと思われる。そこで、木下訳は紙幅を削ったり、書き付けたりすることもなく、忠実に原文をそのまま訳していく。

「長清僧」の終わりの部分を例に見ると、原文は、

后公子家屡以舆马来，哀请之，略不顾瞻。又年余，夫人遣纪纲至， 多所馈遗。金帛皆却之，惟受布袍一袭而已。友人或至其乡，敬造之。见其人默然诚笃；年仅而立，而辄道其八十余年事(14)。

訳：その後、若旦那のうちから幾度も輿や馬をよこして、どうか帰ってくださいと泣くように頼んだが、まるで見向きもしなかった。それからまた一年ばかりしてから、夫人が召史をよこしてたくさんの贈物をしたのだが、金や帛などは全部かえして、ただ一かさねの布袍を受け取ったきりであった。友達が長清に行ったりしたついでに、訪ねて行ってみると、黙りこんだまじめな坊さんになっていて、年はまだ三十そこそこだというのに、八十年あまりのことを話すのであった(15)。

となっているが、『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』NO.53 に載せられている中国語原文では、「又年余，夫人遣纪纲至，多所馈遗。金帛皆却之，惟受布袍一袭而已。」を省略している。
しかし、『支那伝説集』の「長清の僧の話」では、次のようになっている。

河南の家から始終輿や馬を持つて迎への使者をよこしますが、いつも斷つて歸らうとしません。また一年ばかり經つて河南の家から夫人がお金や反物を澤山送つてよこしたが、唯木綿の着物を取つて置いただけで外のは受取りませんでした。昔の友達が時々そこに訪ねて来ます。見ると、方丈は、誠に好く出来た人で、年はまだ壯いのに八十年からの事を知つて居るので、皆びつくりしました(16)。

もう一例挙げると、『剪灯新話』の巻 2 にある「牡丹燈籠」について、原文の終わりは、

道人拂袖入山。明日，众往谢之，不复可见，止有草庵存焉。急往玄妙观访魏法师而审之，则病瘖不能言矣(17)。

訳：道人はすぐ山に帰った。翌日みながお礼に出かけてみると、もう道人の姿は見えず、ただ草庵が残っているだけであった。さっそく玄妙観へいって、魏法師にわけをたずねてきいてみようとすると、法師は唖にされて、ものがいえなくなっていた(18)。

と書いている。
『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』NO.15 では原文の終わり部分より 44 行目前のところまでしか載ってない。

（前略）一丫鬟挑双头牡丹灯前导，遇之者輒得重疾，寒热交作；荐以功德，祭以牢醴，庶获痊可，否则不起矣(19)。
訳：一人の女中が双頭の牡丹燈籠をさげて先に立っているのがよく見かけられた。そしてこれに行き遇う者は重病にとりつかれ、寒けがして熱が出るというありさま、手あつく法事をいとなみ、供え物を上げて祀れば治るようだが、さもないと死んでしまう(20)。

『支那伝説集』も全文ではなく、『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』と同じところで終わっている。

（前略）女中が牡丹燈籠をさげて前へ立つて行くのに出会う人が度々ありました。さう云ふ人は、家へ帰ると、必ず熱病に取り付かれました。で、坊さんを頼んで法事をして貰ひ、供物を備へたりなどすれば、病気もなほりましたが、さうしないと、到頭死んでしまふようなことがありました(21)。

と木下は訳したが、その最後に、

（是れにはなほ後日譚が有りますが、それは寧ろ無くもがなのものですから省略します）(22)

と書いている。ここで訳者は全文翻訳ではないことを明記し、理由は後ろの部分がなくてもよいとしている。木下が原文に忠実であることが分かる。

②訳者の中国実体験を付け加えること
『支那伝説集』の訳文を読むと、原文の地名の前に、必ず中国の省の名前を加えている。中国の年号を表示する場合、西暦も入れる。訳者が実際に訪ねたところの実体験も、始めの部分に書き入れることがある。読者に理解しやすいため、いろいろな工夫をしている。
「鄞都県の県令」（『新斉諧』巻 1「丰都知县」）の始めに次のように記している。訳者が 1920 年の秋、長沙に滞在した時、初めて紙銭を見た。後に南京へ行き、南京で初めて紙銭の用途が分かり、また蘇東坡の詩からその風俗を知った。次の「鄞都県の県令」から紙銭の意味を理解することができたという。このような語り口によって、子供たちと一緒に勉強していくような感じで、続きを読んでいく意欲を引き出している。
第 2 節でも挙げたが、タイトル「符離の一夜」（『新斉諧』巻 4「符离楚客」）の背景は江蘇省徐州であるが、訳者自身が実際に旅行で徐州まで行き、符離集という話の背景になっている場所で電車を降り、駅長の休憩室で仮寝をし、不安な夢を見たという実体験が、続きの「符離の一夜」のストーリーと緊密に繋がっている。
また、「不倒翁」（『新斉諧』巻 2「不倒翁」）の始めに、

河南省の鞏県と云ふ処は甚だ小さい村落ですが、そこに北魏時代の佛龕が残存してゐる爲に、日本に於てもかなり著名な地方となつて居ます。大正九年訳者も此地に一泊したことがありますが、宿屋とは名のみで、物置小屋のようなところに、地面に直接アンペラを敷いて寝なければならなつたほどです(23)。

と書いている。背景となっている鞏県はどれほど古めかしく、さびれた町なのかを説明し、こういうところで法師や不倒翁のようなお化けが出没することの可能性を裏打ちしている。

6　まとめ

以上『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』が『支那伝説集』に大きな影響を与えたことをいくつか例をあげて明らかにしたが、言うまでもなく、その読者が異なることにより、翻訳の手法の忠実度が違っていることも明らかである。

『支那伝説集』のここかしこに、訳者木下の実体験が反映されていて、分かりやすく親しみやすい作品に仕上がっていることも、その大きな魅力の一つとなっているといえよう。

注

1 『支那伝説集』初版、精華書院、1921 年 7 月
2 『支那伝説集』再版、座右寶刊行会、1940 年 12 月
3 『木下杢太郎日記』第 2 巻、岩波書店、1980 年 1 月
4　注 2 と同じ、p2
5　宋莉華「『『汉语入门』の中の小説翻案及びその白話体研究」『社会科学』2010 年第 11 期、p180
6　李金佳「翻訳・白話・文言―清末宣教師戴遂良が「聊斎志異」に対する二回のフランス語訳」『アジア文化交流研究』第 4 号、関西大学アジア文化交流研究センター、2009 年 3 月、p325
7　尹永達「戴遂良の『現代中国民間故事』の耶蘇會要素」『天津外国語大学学報』第 21 巻第 6 期、2014 年 11 月、p68
8　注 2 と同じ、p16
9　注 7 と同じ、p68
10　注 7 と同じ、p68
11　注 2 と同じ、p2
12　注 2 と同じ、p3
13　注 2 と同じ、p11
14　蒲松齢著、朱其铠主編『全本新注聊斎志異』人民文学出版社、2007 年
15　増田渉・松枝茂夫・藤田祐賢・大村梅雄訳『聊斎志異』上、中国古典文学全集 21、平凡社、1958 年、p13
16　注 2 と同じ、p264
17　瞿佑等著『剪燈新話』上海古籍出版社、1981 年
18　飯塚朗訳『剪燈新話』中国古典文学大系 39、平凡社、1969 年、p46
19　LÉON WIEGER S.J 著『FOLK-LORE CHINOIS MODERNE』河間府、1909 年、p48
20　注 18 と同じ、p44
21　注 2 と同じ、p336
22　注 2 と同じ、p337
23　注 2 と同じ、p319

日本人が書いた植民地紀行

石井正己

1　小説中心主義の日本文学批判

今日は小雨が降る中、お集まりくださいまして、大変ありがとうございます。午前中に博士課程の3人の学生たちの発表がありまして、忌憚のないご質問等を頂き、昼を隔てて午後のフォーラム第2部ということになりました。これまで植民地主義・帝国主義の問題を昔話や民俗学から考えてきましたが、今年は少し文学の方へずらしてみようと思い、今日のような企画を設けました。午後は、「日本人が見たアジアの植民地」というテーマのもと、6人でこのフォーラムを務めてまいります。

午後の入口を、私の方でお話ししたいと思います。例えば、「日本文学」という言い方があります。大学でも、かつては「国語国文学」と言いましたが、今は「日本語日本文学」と呼び、海外では「日語日文学科」のように組織されてあります。しかし、今、文学研究は役に立たない学問だと見なされて、あまり人気がありません。文学研究者も自分のしていることに自信が持てていないか、社会からの視線に自覚がない状態です。でも、私はそれに憤慨していて、いろいろなところで、「文学は役に立つ。こんな大事なものはない」と言っています。しかし、仲間内ではそれを認めてくれないというような感じがして、寂しい思いをしています。

改めて、日本という国、日本人という民族、日本語という言語を並べてみたとき、これまでは、日本人が日本にいて日本語で書くということは自明でした。それが、日本文学を支える強固なイメージだったと思います。けれども、グローバル時代の今は、そう単純にはいきません。例えば、村上春樹を思い浮かべてくださればわかるように、日本人がアメリカで日本語で書くというかたちになっています。他にも、アメリカ人が日本にやってきて日本語で書く、日本人が日本で英語で書くなど、いろいろな状況が生まれています。

実は、振り返ってみると、そんな時代はかつてもあったのではないか、と思います。そこには、帝国主義・植民地主義の時代をどう考えるかという大きな問題があります。アジアに植民地を持ち、アメリカやブラジルに移民を送り出してきて、そうした過程の中で書かれたたくさんの作品がありました。しかし、そういったものは長い間、日本文学の外側に排除されてきたのです。20世紀の終わりになって、「外地の日本語文学」などという言い方で、それらを組み込んでいこうという再評価が始まっています。でも、どうも文学研究は小説が中心であり、文学と言えば小説というイメージからなかなか逃れられていないような気がします。今、議論されている植民地文学も、小説が中心であると言えましょう。

一方、私は、この10年くらい、折あるごとにあまり体系的ではないにしても、植民地・占領地の文献を集中的に集めてきました。そして、台湾・樺太・朝鮮・南洋群島・満洲、さらに南方の地域を多くの日本人が訪ねたことを知りました。役人はもちろんのこと、商人や旅人もあり、なかには軍人もいたり、そして作家もいたわけです。しかし、小説中心主義の文学観の場合には、彼らが書いた紀行文はあまり評価されません。通りすがりの旅人が目で見ただけというような経験は、柳田国男の場合もそうでしたが、評価しませんでした。旅人では重要なところにまで目が届かない、という先入観があり、それが評価の低さと結びついているのだと思います。でも、旅人たちが見たことを決して無視してはいけないと思うのです。たくさんの日本人がアジアの植民地を訪れて、膨大な紀行文を残していますが、その全体像が私たちにはまったく見えていないように感じます。

2　木村毅編『支那紀行』

昨年度、大学院の秋学期の授業で、木村毅編の『支那紀行』を読み、『時の扉』第32号（2015年2月発行）に小特集を組みました。その中に

私が書いた「日本人が書いた植民地紀行」という文章を使って、この問題に入っていきたいと思います。

木村毅編の『支那紀行』は、昭和15年(1940)年の皇紀2600年、つまり神武天皇が即位してから2600年目という記念すべき年に、戦時体制版として、初刷20,000部が発行されています。この皇紀2600年という年は、東京オリンピックと万国博覧会の開催を予定しておりましたけれども、共に返上したことでも知られています。やがて、オリンピックは昭和39年(1964)の東京オリンピックで実現し、さらに2020年に再び東京で行われようとしています。万博は、結局、昭和45年(1970)の大阪万博で実現することになります。皇紀2600年は、それを両方とも東京で行おうとしていたわけです。

『支那紀行』はそんな国威高揚の時代の雰囲気に乗って出された中国の紀行文集ということになります。木村毅はさまざまな文学全集の企画に携わったりして、文壇やジャーナリズムに非常に詳しい人だったことがわかります。目次を見ると、芥川龍之介、菊池寛、佐藤春夫、火野葦平、横光利一といった名だたる作家たちが並び、彼らが中国に行って紀行文を書いていることがわかります。女性は林芙美子だけですけれども、32名、44編の紀行文を集めたアンソロジーになっています。

「序」を見ますと、「支那大陸に、日本人全体が温い親しみを持つ！／東亜新秩序の建設の基礎となるものはこれである。親しみのない所には、決して力ある恒久的なものは生れて来ない。／ところで、その親しみを感じさせ、湧かせるものは、何としても文芸が第一である」とあります。「親しみ」というキーワードで、柔らかく言っていますけれども、それが「東亜新秩序の建設の基礎」になると位置づけています。中国に「親しみ」を抱かせるために最も有効である、つまり、人々の感情を動かすことができるのは文芸である、という見方です。文学の効用はともかくとして、このような感情の作り方は、今ではそのまま素直に受け入れられないことは言うまでもありません。植民地主義の中に文学が組み込まれていく構造が、これを見るとよくわかります。

夏目漱石や芥川龍之介の話は午前中もありましたけれども、そういった作家は全集が出ていますので、全体像の中で評価がなされています。全集を持つ作家については、むしろ例外的にこういった文章に光が当てられていますが、ここに挙げられた32名の多くは全集を持っていないために、文章が埋もれてしまっています。また一方では、戦後、この中の多くの作家が時流を見て、変わらずに文筆活動を続けているという現実もあります。その中で、戦後、こういう文章を書き残したということについて、本人はあまり言えない。そして周りも、傷に触るようなことはしないという雰囲気の中で、時が経過してきたように思います。でも、やはり過去にすることはできなくて、改めてその時に日本人が何を見ていたのかということを考えないと、新たな時代の文学研究の議論も進まないのではないか、と思っているわけです。

目次を見ますと、例えば、北京、上海、蘇州、南京と出てきます。ですから、中国の北から南に向かって空間的に文章が配置されていることがわかります。残念ながら、それらの文章にはすべて出典がありませんので、時間的な変遷がこれだけでは確かめられません。原典に当たらないと、どういうコンテクストの中で書かれたのかということは見えてこない。それぞれが書かれた時代は、昭和15年の発刊前になるわけですけれども、ずいぶん違いがあるはずです。芥川龍之介は大正期に旅して書いていますから、直前に旅した林芙美子とでは、同じ場所を歩いていても、大きな違いが出てくることは言うまでもありません。

3　戦場の林芙美子

最近、森光子の後を継いで、『放浪記』を仲間由紀恵が演じるということで、大変な話題になりましたけれども、『支那紀行』には、林芙美子の文章として「杭州と蘇州」「漢口」の2編が載っています。彼女は何度か中国に行きますが、「漢口」は昭和13年(1943)、「ペン部隊」の一員として従軍した時の文章です。『放浪記』を書いたベストセラー作家として従軍するのです。35歳という若さです。

もちろん、『放浪記』の視線が、やがてヨーロッパの「下駄で歩いた巴里」になり、そしてアジアの戦地を歩くことになってゆく。彼女は『放浪記』の冒頭で、「私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない」と言っていますから、芭蕉ではありませんけれども、人生そのものを放浪に置くことで、女性として戦地に行くことになるわけです。揚子江北岸を進んで、漢口に向かうときのことが、『戦線』(昭和13年)や『北岸部隊』(昭和14年(1944))の中に書かれています。

従軍記者として漢口を目指すわけですが、実は、その期間はわずか1週間にすぎません。彼

女は、中国への行き帰りは飛行機を利用していますから、長い期間従軍をしているわけではなく、その点で、軍人とは決定的に異なります。1週間の記事を朝日新聞社に送るのですが、『戦線』には 23 の通信が載っています。それを見ると、砲弾が飛び交い、死体が横たわる中を進んでゆく様子が書かれている。彼女自身が撮った写真がいくつかあり、彼女自身が被写体になった写真もあります。その中に、「西河駅の小舎で休憩する朝日新聞の連絡員諸氏」が出ています。ちょっと見にくいのですけれども、彼らは歯を見せて笑っています。文章の現実と写真には大きな食い違いがあって、多くの写真では

西河駅の小舎で休憩する朝日新聞の連絡員諸氏

写った人が笑っています。もちろん、戦場の恐ろしい場面を撮ったような写真は1点もありません。一方で、揚子江を旅してゆく林芙美子の写真「九江から武穴への戦中にて」では、サングラスをかけて、ワンピースを着たおしゃれな姿をしていて、そのギャップというのは、やはり大きいと思います。

彼女は『北岸部隊』の中で、漢口に着いたとき、こんなことを述べています。「兵隊と共にここまで来た。一人の女としての私にのみ、私は子供のやうな愉しさと青春を感じる」と述べます。つまり、従軍というのが、子供のような楽しさと青春を感じる機会になったのです。辛いはずの従軍に楽しさと青春を感じると言っているのに対して、何が彼女の人生にあるのかというと、「ここまで来てみれば、私は段々内地の現実が近くなつたやうな気持になり、再び苦しい生活と、苦しい世間のつきあひが、私を妙な不安におとして来る」と述べます。

九江から武穴への戦中にて

つまり、内地の現実の方が苦しくて、逆に、戦地にいるこのときの方が楽しいという反転した構造があるのです。林芙美子はそういう現実を抱えながら戦地に赴いたのですが、彼女は流行作家として、モダンガールの姿で旅しています。でも、背負っているリュックサックの中身は大変なもので、女性ですから、その都度そっと隠れて下着を焼いたようなことが出てきます。そんなところから一部を切り取って、「漢口」は編集されているのです。

4　見えなくなった吉川英治と向井潤吉

この皇紀 2600 年までが中国だとすると、その後、急速に増えてくるのは南方地域の紀行文です。ここでは、作家の吉川英治の『南方紀行』（昭和 18 年（1943））、そして、画家の向井潤吉の『比島』（昭和 18 年）を挙げてみましょう。フィリピンが日本の占領地になったときに、大勢の作家や画家が旅をして、紀行を書いたり、絵画を描いたりしています。そうしたの中で、こういった本が膨大に生まれてくるわけです。

『南方紀行』は 20,000 部、『比島』は 2,000 部が発行されています。

吉川英治は、『南方紀行』によれば、わずか 20 日で南方をぐるっと回っています。専従の操縦士を連れた飛行機で回っていますから、20 日間でぐるっと回ることができたのです。その間に、さきほど名前が出てきた火野葦平や今日出海・向井潤吉など、いろいろな人と会っています。彼が行った先々には、すでに多くの作家や画家がいたのです。

そのひとりが向井潤吉です。彼の場合は 300 日といいますから、1 年近くフィリピンに滞在して、絵と文を残しました。この本は「大東亜戦争画文集」というシリーズの中の 1 冊として出ています。私たちは、向井潤吉といえば、「民家の向井潤吉」といわれるほど有名で、戦後はたくさんの民家を描いています。我々に民家のもつ懐かしいイメージやノスタルジックな雰囲気を与えてきたと言っていいでしょう。でも、その前に、向井潤吉が中国からフィリピンにわたる戦場を歩いて、たくさんの絵や文を残したということ知られていません。そのことは向井潤吉の仕事を全体像として把握しようとして来なかったことによります。やはり、ちゃんと評価するべきときに来ているのではないかと思います。吉川英治の場合も同様で、『宮本武蔵』や『新・平家物語』で流行作家になったことだけで評価しているのでは、都合の良い所だけしか見ていないことになります。彼らの業績を風化させないためにも、こうした作品に目を向ける必要がある、と思うのです。

日本人の関心が中国から南方へと移る中で、たくさんの本が出ています。今日はここに何冊か持ってきましたけれども、私の集めたぶんだけでも 50 冊を超える紀行文集があります。リスト化して、組織的に集めれば、もっとたくさんあると思います。これまで埋もれていたそれらを掘り起こしながら、改めて、日本人がアジアをどのように見つめていたのか、そして、どのようにそれを書いたのかということは、戦後 70 年という年であるということだけではなく、しっかり考えてみたい課題だと思います。

5 『世界の果てのこどもたち』の意味

今、日中韓の三者会談が進み、そして中国と台湾の会談が行われて、アジアが動きはじめているという印象を強くします。こうした対話に持続力があるかどうかということが大きな問題になりますけれども、その時に過去の歴史認識を抜きにしては、たぶん先へ進めないということがあると思います。もう歴史は終わったことにして、先に進みたいという発言がありますけれども、それはやっぱり独りよがりです。特に被害ではなく、加害ということをきちんと認識し、その上で対話を進めてゆくことがなければ、未来は見えないと考えています。それを政治家に任せてしまうのはとても危険であり、もっと揺らぎのない関係を、研究者をはじめとするひとりひとりがつくることが大切です。

この問題は、植民地主義に加担した文学と言えるのかもしれませんけれども、その一言で解決したように思うのも危険です。かつて植民地主義を背景にした国際化時代を生きた日本人が、何を見て、何を書いたのかを知る必要があります。もちろん作家ですから、それが商売になってしまうという危うさはありますが、それを考えながらも、残された文章をきちんと見つめなければいけないのではないか、そう感じているわけです。

私の入口はちょっと中途半端になりましたが、この程度にしましょう。最初の記念講演は、今年、『世界の果てのこどもたち』という小説を単行本になさった中脇初枝さんにお願いしました。たぶん戦後 70 年ということを意識されての出版だと思いますけれども、ちょうどここに本を持ってきました。こういうおしゃれなデザインの本ですけれども、この帯には「わたしたちが出会ったとき、わたしたちの国は戦争をしていた。珠子、茉莉、美子。戦時中の満洲で出会った、三人の物語」とあります。この 3 人は満洲で少女のときに出会い、やがて戦争の混乱の中で別れ、戦後年をとってから再会するというストーリーです。さらに帯の言葉の中には、「国境を越えた友情があった」という一節があります。この小説を読むことによって、これからの韓国・中国との友情や対話を育めるのではないかいう希望を抱かせてくれます。

中脇さんは今、中堅の小説家として、ふるさとである高知県を舞台にした小説など書かれています。17 歳でデビューということですから、非常に若くして作家生活に入り、もうベテランです。本屋大賞や山本周五郎賞など、さまざまな話題を集めてきて、今日は最新作についてお話しいただけるというので、大変嬉しく思っています。この秋、NHKの「ドラマ 10」で、「わたしをみつけて」という作品が火曜夜 10 時から放映されるそうです。火曜夜 10 時は、中脇さん原作のこのドラマを見てくだされば、大変ありがたいことだと思います。では、中脇さん、お願いいたします。

『世界の果てのこどもたち』が生まれるまで

中脇初枝

今年、『世界の果ての子どもたち』(講談社)という小説を書きました。この小説は舞台が旧満洲ということで、今日のフォーラムに呼んでいただきました。

1944 年、昭和 19 年の夏、3 人の女の子が旧満洲、中国東北地方で出会います。高知の寒村から満洲開拓の開拓団員の両親とともにやってきた珠子、日本統治下にあって朝鮮から満洲にやってきた美子(ミジャ)、そして横浜の裕福な家庭で育つ茉莉。この 3 人の女の子が旧満洲の日本人開拓団村で出会います。

つかの間の出会いの後、3 人は別れ、珠子は引き揚げの際に家族を失い、中国に取り残されて、いわゆる中国残留孤児となります。美子は日本に渡ってきて、いわゆる在日朝鮮人になります。茉莉は横浜に戻ったあと、横浜大空襲でつらい体験をしてしまいます。その 3 人の女の子たちが、その後、どういう人生を辿ったのかということを小説の中で描きました。

この小説についてインタビューを受けるときに、とてもよく訊かれるのが、戦後 70 年の今年、なぜ戦後生まれのあなたがわざわざこんな小説を、また、戦後生まれのあなたがどうやってこんな小説を書いたのか、ということでした。今日は、これらの質問に答える形でお話ししたいと思います。

まず、なぜかということですね。

わたしは、高知県の西部、現在四万十市となった、四万十川の川べりの小さな町で育ちました。四万十川はみなさんご存じだと思いますが、わたしはあの川で泳いで育ちました。川のほとりで暮らしていたので、家から、服だけ脱いでシュミーズになって下りていって、そのまま川にドボンと入ったりして。

小さな町なので、近所の人たちがみんな顔見知りで、わたしは近所の人たちから、会うたびに「べっぴんさん」と呼んでもらっていました。頷いてくださってありがとうございます(笑)。でも、わたしが本当にべっぴんさんだったからではなくて、その当時、そのへんに住んでいた女の子たちはみんな、「べっぴんさん」と呼ばれていました。別にべっぴんさんじゃなくても、「べっぴんさん」と呼ばれていたのです。

両親は共働きだったので、わたしが学校から帰っても、家にはいませんでした。でも、近所に、よくわたしを「べっぴんさん」と呼んでくれ、ごはんを届けてくれる、とても優しいおばあちゃんがいました。実のおばあちゃんじゃないんです。ただ、家が近いだけで。そのおばあちゃんが、朝鮮から渡ってきた人だったということを、大きくなってから知りました。

でも、言葉も当時の自分と同じ、その地方の方言を話していましたし、作ってくれるものもカレーとかだったりして、全然わかりませんでした。そして、それを知ったとき、もうお話を聞ける状態ではなかったので、なぜそこにいたのか、どうしてあの川べりの小さな町でわたしと出会ったのか、ということはわからないままになりました。

わたしは小説を書くようになってから、いつか彼女のことは書きたいと思っていました。なぜ、朝鮮から海を渡ってやってきて、そして、高知の西の端の四万十川の川べりのあの町でわたしに出会って、わたしに「べっぴんさん」と言ってくれることになったのか。そのことを、いつか知って書きたいと思っていました。

3 年前、この本を書くことになったときに、まずそのことを調べ始めました。すると、偶然にも、同じ四万十川の上流域の地区から、戦時中、たくさんの人が満洲に開拓に行っていたということを知ったのです。それも個人で行ったのではなくて、分村という形で村を挙げて行ったわけです。

なぜ村を挙げて行ったかというと、村が貧しくて、やっていけないから。村の人が半分いなくなれば、みんなの耕地面積が倍になる、というわけで、たくさんの人たちが旧満洲に渡るわけです。ただ、実際には、当時、本当に村とし

てやっていけなかったわけではなくて、貧しいなりにもみなさんなんとかやっていけていたのですが、満洲開拓という国策のもと、県、そして村がその方針を受け入れ、村の人たちを家族ぐるみで行かせたんですね。ほとんど強制です。

それを知ったとき、わたしはショックを受けました。わたしはその町で高校を卒業するまで18年も暮らしていながら、その同じ川沿いの上流の地域に、そうやって満洲に行っていた人たちがたくさんいたということを知らなかったんです。その、自分が知らなかったことがショックでした。当時のことって、知らないことが多すぎるんですね。それを知ったときから、日本と朝鮮と中国を巡るこの70年の物語を書きたいと思うようなりました。

わたしは、こんなに大きな物語なので、そんな簡単には書けないと思いまして、あと10年ぐらいかけてゆっくり書こうと思っていました。生きている間にいつか書ければいいと思っていたんですが、戦後70年のタイミングで、今年出すことが出来たのは、講談社の敏腕編集者さんのお陰です。3年前にその話をしたときに、彼女が「それでは戦後70年に合わせましょう、3年で書きましょう」と言って、ものすごく叱咤激励してくださって、何とか間に合わせることができました。

つぎの質問にまいりますね。戦後生まれの、しかも日本人のわたしがどうやって取材したか、ということについてお話しいたします。「取材が大変だったでしょう」とみなさんおっしゃいます。もちろん、大変ではあったんですけれども、元々わたしは、人の話を聞くのがとても好きな子どもでした。この話を書くために取材をするよりもずっと昔から、まわりの方のお話をよく聞いてました。

例えば、近所の人とか、家族が病院に入院したときの同じ病室の人とか、そういうちょっとしたときに会う人たちの話をよく聞いていました。わたしは、どんな人にでも、90歳のお年寄りでも、3歳の子どもでも、みんなその人がそれまで生きてきた日にち分の経験とか思いとか、その人だけが持っている物語とかがあると思っているんですね。だから、どんな人に話を聞くときにでも、いつも面白いなって思えますし、面白いことを教えていただいてます。

そして、うかがっていると、戦争の話になることがあります。太平洋戦争当時の話ですが、みなさん、経験といいますか、自分が見た範囲の話をされるんですね。食べる物がなくてどうしたこうしたとか、とても小さな話です。高知の山間で、あるおじいさんに「ここには空襲はなかったですよね？」と訊くと、「いや、飛行機は飛んできたよ」とおっしゃる。山がとても深いところなんですが、「1回だけ見た。山のこっちからこっちに、こう行った」と、山の稜線と稜線のすき間を飛んでいくのを見たとおっしゃるんですね。それが唯一の記憶だと。「それはB29だったんですか？」「いや、それもわかんない」みたいな（笑）。「じゃあ、爆弾とかは落とされなかったんですか？」って訊いたら、「こんな山ん中に、爆弾ら落とすもんか。高い弾がもったいない」って。そういう小さな話を聞くのがすごく好きでした。

でも、そう話してくれた彼は、昭和16年に召集を受け、その年の12月8日の南方作戦でグアムに上陸した陸軍兵で、太平洋戦争をその始まりから戦い、撃たれながらも生きのびて帰ってきた人でした。

小学6年生になると歴史を学びますが、そのときに、それまで自分が聞いてイメージしていたそれまでの歴史と、学校で習う歴史がものすごくちがうということを知りました。今まで聞いていた話はどれもその人個人だけの話で、とてもささやかな話なんですけど、学校で学ぶ歴史というのは、とてつもなく大きくて、高いところから見ているというか、神の目で見ているというか、そういう感じでした。わたしは、今まで聞いてきた話のような、地べたからの視点というか、いわゆる枝葉末節というんですか、端っこの話のほうに心を惹かれました。

そういうひとりひとりの、今まで聞いてきたささやかな物語というのを、自分だけじゃなくて他の人にも伝えたいという思いがあったので、わざわざ探して、依頼して、改まって取材というのは、実はそんなにないんです。そういう人たちから偶然聞いた、ささやかなお話を基にして書いていることが多いです。これまで書いてきた小説もそうです。

わたしが育った地域は、高知県南西部、幡多地方といいます。幡多地方は、いわゆる土佐とは言語も文化もかなりちがっています。だから実は土佐弁じゃないんですね。だから、わたしの喋る言葉は、いわゆるドラマで坂本竜馬が喋っている「いかんぜよ」ではなくて、もうちょっと優しい感じの「いかんねや」みたいな、そんな感じの言葉になります。

わたしは大学で民俗学を学んだので、この幡多地方の昔話を特に調べました。昔話集『女の子の昔話―日本につたわるとっておきのおはなし』（偕成社）にも、幡多地方の昔話をいくつ

か紹介しました。その幡多地方の昔話や習俗を調べるのに、もう何年も回っていて、これまでたくさんの方のお話を聞いてきました。実は、その幡多地域から満州開拓に出ていたということを教えてくれたのは、それまでずっと昔話でお世話になっていた方でした。その方が、偶然にも、「そういえばこういうこともあったよ」と教えてくれたのです。

そのあとすぐに実際に開拓分村をした地域の方に、「満州開拓って、この地区から行ってたそうですけど、知ってますか」と、これまでその地区のお祭りでいつもお世話になっていた元区長さんに訊きました。するとそのおじいさんが、「ああ、知っちょる。ぼくも行ったで」とおっしゃる。詳しくうかがうと、家族で行って、両親や兄弟を失って、9 歳のときに、お姉さんと 2 人だけで日本に戻ってきたとおっしゃるんですね。大変な経験をされて、生きてこられていたんです。取材というと、大変なことをしてると思われるかもしれませんが、いつも、そんなふうに、自分の知っている人からうかがうことが多いです。

ただ、今回は中国や韓国にも行きました。担当の編集者さんが中国人なので、本当にお世話になって、彼女がいたおかげで、いろんな方にお話を聞くことが出来ました。当時日本と戦っていた中国の元兵士の方にもお目にかかりました。もちろん日本では、従軍して中国に行っていた日本軍の兵士の方にもお話を聞きました。それから、高知から行っていたという開拓団村のあったところにも行きました。

行ってみてわかりましたが、高知から行くと、本当にものすごい距離があるんですね。当時の人は、高知から海を渡って、1 週間も 2 週間もかけて行ったんです。わたしは飛行機で行きましたが、舗装されていない道を何時間も車に揺られ、やっと辿り着く場所でした。その当時、村から出たこともないような人たちが海を渡って、そんなところまで行ってたんですね。

忘れられない言葉があります。戦時中、日本軍と戦っていた中国の元兵士の方にお目にかかったとき、その方がわたしを見ておっしゃいました。「あれ以来、初めて日本人に会った」と。山西省の方でした。戦争以来 70 年以上、日本人に会ったことがなかった。今の日本人が行かないようなところまで、中国の隅々まで、当時の日本人が行っていたということを思い知りました。しかもそれはまちがいなく、中国だけのことではなかったのです。

それから、このお話は子どもが主人公ですので、当時の子どもたちがどんなものを読んだり見たりしていたのかというのを知るために、子ども向けの雑誌や絵本、それから新聞、教科書なども参考にしました。その中で知ったのが、当時の人たちが、いかに一所懸命、戦争をがんばっていたのか、ということでした。

例えば、坪田譲治という児童文学作家がいます。坪田は昭和 18 年の 3 月に『満洲・絵ばなし』という本を出版しています。大変きれいな絵が付けられていまして、子どもたちに直接話しかける語り口で、彼が満洲に行って見てきたものを書いています。そこには、とても優しい語り口でありながら、ちょっと怖いことが書かれています。それは、彼が見た満洲の姿であり、彼が思った満洲の、こうあるべきと言いますか、こうあってほしいという姿でした。実際に坪田は、その前の年、昭和 17 年の 1 月から 3 月の間満洲に行っています。かなり広範囲に歩かれたようで、詳しく書いてあります。

実際に何が書かれていたかと言いますと、満洲では、ロシアの子も、中国の子も、満州の子も、国民学校でみんな日本語で学んでいる、とか、満洲のどんな田舎に行っても、日本語が通じるのは素晴らしいことだ、とか。そういう感じのことが書かれています。最後の章は、日露戦争のときにスパイとして銃殺された兵士たち

の碑を紹介し、これが「日本男子の精神」だとほめたたえています。彼は生前、全集を出しています。全12巻の『坪田譲治全集』(新潮社)ですが、その中には、この作品は入っていません。

それから、子どもたちがすきな絵本。戦時中の絵本は、やはり今のものとはちがっていました。例えば、アンパンマンで有名なフレーベル館の『キンダーブック』という月刊誌。『キンダーブック』という名前で、昭和2年から出版されていましたが、昭和17年3月から『ミクニノコドモ』に変わっています。内容も、昭和15年ごろから軍国的になっていき、神話が取り上げられ、「支那」や「満洲」が紹介され、軍用犬や戦艦の特集が組まれるようになります。

倉橋惣三という方をご存じでしょうか? 戦前から幼児教育の大切さを訴えられ、幼稚園を日本に根付かせた方といって良いでしょうか。素晴らしい本を書かれています。わたしも、子どもがうまれた頃、彼の著作を読んで勉強いたしました。坪田譲治も同じですね。お読みになられた方が多いと思うので、先ほど紹介しましたけれども、彼も、本当にヒューマニズム溢れる素晴らしい作品を書いていますし、この倉橋惣三も、幼児教育の大切さを大変感動的に書かれていて、今の幼稚園教諭や保育士、みなさん参考にされている方だと思います。

この『キンダーブック』の巻頭には、倉橋惣三が保護者向けに一文を書いています。やはりここでも、戦時中は怖いことが書かれているんですね。この戦いを勝ち抜くためにがんばろうというようなことが、子ども、そして保護者に向けて書いてありました。そういうものに触れる度に、当時の人たちがみんなで、いかに戦争をがんばっていたのかということを思いました。今も、「罪もない女子どもが巻き込まれて」という言い方がなされますが、単に巻き込まれていただけではないんです。その中で、みんながんばってたんですね。当時はその人たちなりに、女の人も子どももがんばっていた。小説にも出てきますけれども、主人公の女の子たちは、人形を献納したり、お年玉を出したりして、鉄砲の弾にしてもらうために、彼女たちなりにがんばっていたわけです。

主人公の3人目の女の子は、横浜に暮らしていて、横浜大空襲を受けます。横浜大空襲について、「なぜ横浜の空襲を取り上げたんですか」ということも訊かれました。横浜大空襲は東京大空襲ほどは知られていないと思います。でも、東京大空襲の1.5倍の爆弾、爆撃、焼夷弾が、わずか1時間のうちに、もっと狭い範囲にばらまかれました。公式には3,649人の死者というんですけれども、実際には8千人以上、ものによっては1万人亡くなったと言われています。

空襲のあとの焼け野原を写したもので、電信柱がぽつぽつと立っている写真がありますよね。けれども、横浜大空襲では、それすら残らなかったそうです。生きのびた方にうかがったのですが、彼女は、「焼けつくされて、電信柱さえ残らなかった。何も残らなかった」とおっしゃっていました。

都市空爆がたくさんあった中で、なぜ横浜か、ということは、そういう証言者に巡り会えたということもありますし、また、横浜では『横浜の空襲と戦災』という全6巻もの記録が、市民の手によって編まれていた、ということもありました。それが大変詳細な記録で、このことを後世に伝えようという市民の思いがこもっていました。

小説の中では一都市の受けた空襲を描きましたが、ほとんど全ての日本の都市に、同じような空襲があったと思っていただければと思います。死者が100人とか1000人とかいいますね。人数が多ければ大変というふうに思われがちですが、そうじゃないんですね。たとえ10人亡くなったときでも、同じことが地上では起きていたわけです。

その証言を知るうちに、逃げればよかったのに、と思ったんですね。例えば横浜だと、結構狭い範囲に爆弾が落とされているので、逃げられそうにも思ったのですが、当時は防空法という法律があって、逃げちゃいけなかったんですね、若い人は。だから実際の証言でも、ロープを張って市民同士で逃げないようにしていたとか、そのロープをくぐって逃げたとか、そういう話がよく出てきます。

それから、わたしが証言を聞いて不思議に思っていたのが、道の両脇に、塀に沿って死体があったという話でした。真ん中じゃなくて、道の端っこに、両脇にあった。それもうずくまってあったというのがとても不思議で、どうしてその人たちは逃げないでうずくまっていたんだろうと思っていたんです。

当時は防空訓練がたいへん頻繁に行われていたそうで、電車を途中で止めて、いきなり防空訓練をやったりしていたそうです。その際、爆風で目と鼓膜がやられないように、指で押さえて、道の端でうずくまる訓練をしていたそうです。その防空訓練の退避姿勢通りの形を取ってみなさん亡くなられていたということでした。

だから、その当時の人たちは、その当時の知識、その当時の法律のもとで、その人たちなりに一所懸命やっていたんですね。そして、自分たちの任務を果たしていくなかで、かえって死者を増やしていた。不幸を招いていたということを知りました。

それで、つくづく思ったのが、良いことも悪いことも、人の歴史というのは、大きな何かがあって、それが全てを決めているのではなくて、結局、ひとりひとりの人間が作っていくものなのだということでした。これは 70 年以上前のことを話していますけれども、今も同じだと思うんですよね。ひとりひとりの人間の思いとか行動が今を作っているから、70 年以上前のことではありますけれども、今書くべきだ、とわたしは思いました。

では、「なぜ戦後生まれのあなたが書いたんですか」というもう一つの質問に答えたいと思います。

わたしは 1974 年生まれです。当事者では全然ないし、当事者の子どもでもないほどの世代です。でも、その経験がないぶん、書けると思ったんですね。というのも、当事者には当事者の経験しかなくて、その経験しか書けないというところもあると思うんです。でも当事者じゃないから、わたしには無数の経験が書ける。また、同じときに別の場所にいる別の人からの視点でも書ける。そう思いました。

わたしはこの本を書くのに 3 年と申しましたけれども、執筆時間の大部分を年表づくりに当てました。というのも、日本と朝鮮と中国の、同じときに、同じ月の同じ日に、それぞれの場所で何があったのかということを知らないと書けないと思ったからです。主人公は 3 人ですが、3 人にしたのは、同じ重みをもってその 3 か国を見たかったからです。

また、「在日朝鮮人ですか」とか、「中国にルーツがありますか」などの質問も受けましたが、わたしは日本にしかルーツがありません。日本人ではあるので、日本というルーツはありますけれども、だからこそ客観的にといいますか、外から見た目で書けると思いました。主人公としては 3 人しか書いていませんけれども、そこには無数の経験があったと思っていただければと思います。

他にも、当事者ではないためによかったことがあります。当事者が書いたものって、当事者にはわかるんですけれども、今の人にはわからないことがあるんですよね。それは、当事者にとってはあまりに当たり前で、そこは書かなくてもわかっていることだから、書いてないんです。でも、現代のわたしたちにはそこが全然わからない。だから、昔書かれた戦争の話とかを読むと、ちょっと意味がわからなかったりする。けれども、わからないわたしが書くからこそ、現代の読者にもわかってもらえると思うのです。

既に、例えば満洲の引き揚げ一つとっても、体験記や手記は多く出ています。だから、「今さら、経験者でもないあなたが書く必要はないのでは」ということもあります。例えば、同じ高知の出身ですが、先年亡くなられました宮尾登美子さんが書かれた『朱夏』という自伝的小説があります。宮尾登美子さんも満洲に行かれていたんですね。旦那さんが学校の先生だったので、その妻として行っていました。それから、最近再出版されて話題を集めている、藤原ていさんの自伝『流れる星は生きている』もありますね。彼女は旦那さんが気象台にお勤めだったので、それで満洲に行っていました。そういう小説や体験記や手記は多いんです。けれども、それを書いた人たちというのは、学問がそもそもあって、しかも書ける境遇にいた人たちなんですね。

実際にわたしが話を伺った、開拓団で行った人たちや、最前線に立っていた兵士たちは、貧しくて学校にも行けなくて、それで行っているわけです。だから、戻ってきても、家族を失ったり家を失ったりしていて、食うや食わずで、書けない。それは、中国人や朝鮮人もそうです。在日朝鮮人もそうです。一番つらい思いをした人の声こそ書かれることがないんですね。そういう人たちが亡くなると、それがまるでなかったかのように失われていく。

しかも、そういう経験をした人たち、いわゆる戦災孤児にせよ、空襲の被害者にせよ、中国人にせよ、いわゆる中国残留孤児にせよ、そのつらい体験で終わりじゃないんです。そこで終わりじゃなくて、そのあと長い人生がその先にあって、今も生きていらっしゃるんですね。今も生きていて、みなさんそれを覚えていらっしゃる。その記憶と共に、みんな生きているんです。

わたし、今日のお話で、いわゆる戦災孤児とか、いわゆる中国残留孤児と申し上げました。「いわゆる」を付けましたが、それは、戦災孤児とか中国残留孤児とか在日朝鮮人というと、その言葉でイメージが湧いて、もうそれでわかった気になってしまうということがあるからなんです。でも、そういう人たちってひとりひと

りちがうんですね。体験もちがうし、やっていることもちがう、そのあとの人生もちがう。だからわたしは、ひとりひとりがちがうんだという思いを込めて「いわゆる」を付けました。

そうやって、そういう人たちがこの 70 年をずうっと生きている。だからわたしはこの物語で、戦争で終わりではなくて、その人たちの 70 年間を書きました。だから、現代まで物語る必要があったわけです。

最後に、タイトルについて。「なぜこのタイトルにしたのですか」というのもよく受ける質問でした。

わたしは以前、『きみはいい子』や『わたしをみつけて』(いずれもポプラ社) という小説を書きましたが、それは子どもへの虐待をひとつのテーマとしました。わたしは、戦争だけでなく、今も世界中につらい境遇が生み出されていて、そこに生きる人たちがいるということを、常に思います。シリアであれ、ナイジェリアであれ、別にどこでもいいんですけど、日本のマンションの一室であれ、そこでつらい思いをしている人がいて、それがだれにも知られていなくて、救われないままでいるなら、そこは、その人にとっての世界の果てだ、というふうに思います。今ある世界の果てをなくしたいし、世界の果てをこれ以上生み出したくないと思います。そういう思いをこめて、このタイトルをつけました。

今もわたしは、昔話やお祭りでお世話になるので、お年を召した方によくお話をうかがいます。そういう方って、みなさん、最近のことは忘れていても、子どもの頃のことはよく覚えていらっしゃるんですね。嬉しかったことや楽しかったことをよく話してくださいます。わたしも、子どもの頃「べっぴんさん」と呼ばれて、大人になるともう呼ばれなくなりましたけれども、それはすごくささやかですが、幸せな記憶として心にあります。

そうやって、子どものころの幸せな記憶って、一生を支えてくれるものだと思うんです。そして、世界中の、今、生きている大人が、一度はみんな子どもだったことを思うとき、世界中の子どもに幸せな子ども時代があってほしいと願います。

今日は、それを心から願いつつ、終わりにしたいと思います。ありがとうございました (拍手)。

薄田斬雲が見た朝鮮

金容儀

1　はじめに

数年前から韓国の人文学の分野では、日本の植民地時代（日帝強占期）に朝鮮に滞在した日本人による見聞記や旅行記、風俗画などから、「朝鮮」という他者を彼らがどのように観察し、認識したかを追求する研究が相次いで行われている。

それらの見聞記や旅行記には、いわゆる「朝鮮観」があらわに描かれており、「日本人の朝鮮観」を論じようとする時、様々な視点からのアプローチが可能である。

本稿では、1909年1月、当時の京城所在の出版社である日韓書房より刊行された『朝鮮漫画』（鳥越静岐・薄田斬雲共著）に描かれた「朝鮮文化」について考察したい。『朝鮮漫画』は、薄田斬雲が文章を書き、鳥越静岐が挿絵を描いて成立したものである。

薄田斬雲はあまり広く知られた人物ではないが、朝鮮に滞在して見聞したことに基づき、『朝鮮漫画』以外にも『ヨボ記』(1908.6)や『暗黒なる朝鮮』(1908.10)を著わした。これらの著作は、薄田斬雲の朝鮮見聞記三部作とも言われる。

本稿では、『朝鮮漫画』の「朝鮮文化」、なかでも朝鮮の衣食住について、どのように述べられているかを主に検討する。朝鮮の衣食住については、当時から多くの日本人によって関心が寄せられていることが、例えば、次の文章からも確認できる。

> 朝鮮を視察する者並に鮮地に居住して、自己の職務を執行するの時、又或事業を経営せんとするに當りて、鮮人の生活状態蔟卽ち其の衣、食、住の現状を研究知悉するにあらざれば、決して、目的を遂行する能はざるべし。(『朝鮮人の衣食住』芳賀栄次郎の序)

この引用文は、朝鮮総督府の嘱託であった村上唯吉の『朝鮮人の衣食住』(1916)に載せられた芳賀栄次郎の序文の一部である。他にも、朝鮮総督府工業伝習所長の豊永真里、医学博士の佐藤恒丸ら等が序文を寄せ、朝鮮の衣食住研究の重要性を強調している。

2　『朝鮮漫画』に描かれた朝鮮の生活文化

『朝鮮漫画』に述べられた朝鮮の生活文化に関する項目を検討してみると、まず『朝鮮漫画』中の「朝鮮風俗」には、植民地時代に朝鮮に滞在した日本人による数多くの「朝鮮見聞記」に紹介された「朝鮮風俗」に共通する事柄が多いという点が指摘できよう。例えば本間九介の『朝鮮雑記』(1894)、中村金城の『朝鮮風俗畸譜』(1910)、今村鞆の『朝鮮風俗集』(1914)などに取り上げられた「朝鮮風俗」と比べてみると、かなりの項目が重なっている。

植民地時代とは、帝国日本の目に写った「朝鮮風俗」が様々な形で量産され、消費されつつあった時代でもあった。そして、その中でも特に日本人が興味を持った、いくつかのきまった「朝鮮風俗」に焦点が当てられ、それらのイメージが風俗画、写真、絵葉書、観光ポスターなどによって再現された。それらの反復されたイメージの再現によって、「朝鮮風俗」というカテゴリは創られたと言えよう。

そのカテゴリに入るいくつかの具体的なイメージを取り上げてみると、〈妓生〉〈朝鮮のブランコ〉〈老人の煙管〉〈女性の乳房の露出〉〈婚礼〉〈飴売り〉〈神仙炉〉〈舞童〉などとなる。これらの「朝鮮風俗」は、日本人が記した多くの朝鮮見聞記に述べられており、朝鮮風俗に関する著作には欠かさずに登場する。

しかし、薄田斬雲の『朝鮮漫画』には、どちらかと言えば、彼なりの「韓日比較文化論」とでもいうべき視点が積極的に表されている。言い換えれば、薄田斬雲は彼の持つ日本の生活文化の知識をもとにして、朝鮮の生活文化を評したと言える。『朝鮮漫画』では、いたるところに、日本の生活文化の事例が取り上げられ、それに合わせて朝鮮の生活文化について述べられているのである。

> 朝鮮にも、碁や將棋は盛んに行はれる。碁は日本のやり方と略ぼ同じだが、取つた石を後でつぐ事を仕ない。取つた者は死んだ者、死んだ者は再び敵の用を爲すべき理由が無いと云ふので、戰ふ際邪魔になる石を取り殺す主義だとか、大分辻褄の合はない勘定だ。併し、打ち方は日本のと變りがない。(…中略…) 朝鮮將棋は、日本のとは大分異ふ、十六武藏の如でもあるが、何れかと言へば、駒が足らぬながら將棋に近い。王將は一方を漢、一方を楚と書いた駒で、詰り漢楚の戰なのだ。韓人は、芝居にでも、歌謠にでも、漢楚や三國誌中の事を取り入れる事を好む。(『朝鮮漫画』29―31頁)

これは朝鮮の碁と将棋について述べられた個所である。日本の碁と将棋の事例と比較して説明している。その他にも、『朝鮮漫画』の所々で日本と朝鮮の生活文化が比較されている。

薄田斬雲は韓日比較文化論的な視点から朝鮮の生活文化を見てはいたが、それを日本に比べて遥かに立ち後れた状態にあるものとして把握した。福沢諭吉の表現をかりて言うならば、「半開」あるいは「野蛮」な状態であった。つまり『朝鮮漫画』には、文明(日本):野蛮(朝鮮)という日本的なオリエンタリズムの図式が読み取れる。ここでいう「日本的オリエンタリズム」とは、言うまでもなくエドワード・サイードが分析した「オリエンタリズム」の延長線上にある。

韓国の人文学者朴洪圭によれば、オリエンタリズムは西洋の地理的拡張および植民地主義、人種差別主義(反ユダヤ主義)、自民族中心主義と結びつけられ、支配様式として台頭する。帝国日本の領土拡張、植民地主義、自民族中心主義などは西洋のオリエンタリズムの変種という意味で「日本的なオリエンタリズム」と言えるだろう。

『朝鮮漫画』の記述の中で、特に帝国日本の「日本的なオリエンタリズム」の代表的な例と考えれれるものに「ヨボ」ということばがある。「ヨボ」とは、当時日本人が朝鮮人を卑しめて呼んでいたことばである。薄田斬雲が著した著作の中に『ヨボ記』という朝鮮見聞記があり、『朝鮮漫画』にはいたるところに「ヨボ」ということばが使われている。かつて梶井陟が指摘したように、「ヨボ」ということばには、日本人の朝鮮人に対する優越感や差別意識が込められている。『朝鮮漫画』の目次を見ても、〈ヨボの喧嘩〉〈ヨボの木挽〉〈ヨボの巾着〉等の3項目に「ヨボ」ということばが使われている。

ところで、このような薄田斬雲の朝鮮認識は、当時の日本の多くの知識人による一般的な認識そのものであった。朝鮮の生活文化を野蛮なものとして捉えた薄田斬雲の視線は、とりわけ朝鮮の衣食住に集中していたようである。薄田斬雲は朝鮮の衣食住が「不衛生」な状態にあり、「不潔」であると酷評している。その一方で、〈朝鮮紳士〉のような朝鮮の文化的主体性を評価した部分も確認できる。

3 朝鮮の衣服文化

『朝鮮漫画』に描かれた衣食住の中で、衣服文化に入るのは〈ヨボの巾着〉〈韓人の雨具〉〈朝鮮の帽子〉〈乳房の露出〉〈婦風俗〉〈朝鮮紳士〉などである。薄田斬雲は朝鮮の衣服、その中でも、とりわけ女性の衣服にかなり興味をもっていたようである。その典型的な例が〈乳房の露出〉であろう。薄田斬雲(または鳥越静岐)が挿絵の中に「最モ蠻的」と書いた表現に、彼の朝鮮の衣服に対する認識が端的に表われている。薄田斬雲は朝鮮人女性の乳房の露出に対し、次のように述べている。

> 色情狂の一種には、婦の乳房を攫む事を無上の楽とするのがある云ふ。其にはお誂向きに出來て居るのは朝鮮婦だ。(…中略…) そして婦の衣裳は上衣と袴とに區別されて居る、上下通しの衣服を着るのは日本人ばかりだらう。處が朝鮮婦の上衣は極めて短かい、いくら袴を高く結んだ處で乳の下迄だ、上衣は乳を掩はぬ程短かい、だから上衣と袴との間は、五六寸も明いて、襦袢なしの肌が露出して居る。圖の如く大きな乳房が不遠慮に現はれる。(…中略…) 乳房も始終日光に將た風雨に晒されて居ると、胸中の玉などと形容する様な、白くふわふわした

ものでない。黒くて汚い、一見不快の感を起させる。色情狂先生も之には萎縮するだらう。(『朝鮮漫画』123 — 125 頁)

薄田斬雲は、朝鮮人女性のチョゴリが短いので乳房が露出するのを見て、「色情狂先生も之には萎縮するだらう」と述べている。当時このような認識を持ったのは薄田斬雲だけではなく、多くの日本人のあいだで共有された一般的な認識でもあった。例えば、この点について村上唯吉の『朝鮮人の衣食住』に次のように述べられている。

女子のものは概ね短く、漸く乳房を被ふか、甚しきは乳房の上部にて終端となり、乳房を上衣の下端から露出して頗る不體裁を極めて居る、是れ朝鮮特有の風習であつて、嚴寒の時と雖も之を被ふ事なきには、何人と雖も一見喫驚を禁じ得ない。(『朝鮮人の衣食住』5 頁)

4 朝鮮の食文化

『朝鮮漫画』で朝鮮の食文化について述べた箇所は、〈牛刀〉〈神仙爐〉〈飴賣〉〈店頭の牛頭骨〉〈韓人の餅搗〉〈饂飩屋〉〈燒栗〉〈餅賣り〉〈米搗〉〈甜瓜〉などであり、衣食住の中でも最も多く扱われている。時や場所を問わず、異文化を経験する人々にとって、最も大事で興味を持たれるのが食文化であろう。薄田斬雲の朝鮮の食文化に対する認識は、だいたい三つの点に集約される。まず、朝鮮の食文化の豊かさに対する評価である。次に、朝鮮の食文化を一種の風物詩として認識していたこと。それから、朝鮮の食文化を非常に不衛生的かつ不潔なものとして把握していたことである。例えば薄田斬雲は〈神仙爐〉に関して次のように述べている。

朝鮮料理中隨一の名物として、邦人の口に適するは神仙爐である。圖の如く中央に圓形の銅壺が付いた鍋である。(…中略…) 朝鮮料理は、臭い、不潔いと、食ず嫌ひの眉を顰める氣取り屋でも、此の神仙爐ばかりは箸を付ける。朝鮮料理を食ふ事は、先づ神仙爐より始むべし。(…中略…) 神仙爐とは、此の御馳走を食ふと、神仙と壽命を僻ふすると云ふ意味だとか、鍋の製作は拙だ、我邦へ輸入して、精巧に改造したら、面白い。(『朝鮮漫画』38 — 40 頁)

薄田斬雲は、「朝鮮料理中隨一の名物として、邦人の口に適するは神仙爐」と述べ、「朝鮮料理を食ふ事は、先づ神仙爐より始むべし」と勧めているほど神仙爐を高く評価している。

朝鮮の食文化を一種の風物詩として認識した事例としては、〈飴賣〉〈店頭の牛頭骨〉〈韓人の餅搗〉〈燒栗〉〈餅賣り〉などが挙げられる。これらの中で〈餅賣り〉についてふれている部分をあげてみたい。

大きな笠を被つて、箱を前に下げ、人間の首も剪めそうな鋏を、ヂャカチャカ、ヨダン、セイ、ヨッサリョウと、のそのそ大道を觸れ歩く。暢気な朝鮮に一入気の長さうな商賣だ。(…中略…) 蕎麥粉が風で飛ぶ、塵埃は容赦なく付く、日本でも昔は飲食物の箱に蓋するなど云ふ文明な考はなく、黒砂糖が一番甘い物に見られて居た。扨てヨダン、セイ、ヨッサリョウで、暢気な一日が暮れる頃には、飴箱は空になつて巾着が重く股の所へぶらぶらする。(『朝鮮漫画』40 — 43 頁)

この文章からは、一見浪漫的な雰囲気が伝わってくる。「餅賣り」は、当時「朝鮮風俗」のカテゴリに入る代表的なものの一つであった。日本人によって出版された多くの朝鮮見聞記には例外なく〈餅賣り〉が登場しているのである。

朝鮮の食文化を非常に不衛生的かつ不潔なものとして把握した事例としては、〈牛刀〉〈店頭の牛頭骨〉〈韓人の餅搗〉〈饂飩屋〉〈餅賣り〉などがあげられる。これらの中でも、〈店頭の牛頭骨〉〈韓人の餅搗〉〈餅賣り〉などは、町の風物が描かれると同時に、いかに朝鮮の食べ物が不衛生的で不潔かについて述べられた事例でもある。次の文章は、朝鮮の〈饂飩屋〉についての薄田斬雲の評である。

朝鮮の飲食店には、何店を見ても、饂飩の無い家は無い。餘程饂飩好きの国民と見える。(…中略…) 扨て此の杵で天突きをやるには、圖に見る如く、テコへ背を載せて足を煤だらけな天井に突張る、テコが下って足が天井に着かなくなると、柱へ段々に打ち付けてある横木へ順に

足を突張る。時としては、下から一人、テコの鼻へぶら下る、能く考へたものだが、天井から黑いものが、ボタボタ釜へ降って來る。それに、穢ない服裝のヨボの軀から、泥や垢迄落ちて來る。出來上った饂飩が眞白い丈け、製造法が気になる。(『朝鮮漫画』、50―52頁)

この引用文からわかるように、薄田斬雲は朝鮮の食文化を非常に不潔なものと考え、「出來上った饂飩が眞白い丈け、製造法が気になる」と、饂飩が不潔な環境で製造されていることを指摘している。〈饂飩屋〉の他にも、〈店頭の牛頭骨〉〈餅賣り〉などで朝鮮の食べ物がいかに不衛生的で不潔であるかを辛辣に批判している。

5 朝鮮の住居文化

『朝鮮漫画』の中で住居文化に属するものとしては、〈溫突の獨居〉〈韓人家の臺所〉〈便器洗い〉〈便器と洗面器〉などがあげられる。そして、朝鮮の衣食住に対する薄田斬雲のネガティブな認識は、食文化とともに、とりわけ住居文化に集中している。例えば〈韓人家の臺所〉には、次のように述べられている。

此畵は、日本風な堂々たる厨房に出來て居るが、えは解り良く畵いたので、實は朝鮮家の臺所に斯樣な立派なのは無い。(…中略…) 此畵に現はした意味は、朝鮮人は臺所で料理し煮燒するに、何んなに不潔な所作をするかを示したのだ。(…中略…) 彼等の臺所は多く土間で、傍には溫突の焚口がある、便器が轉んで居る、素燒物の鉢に何んだか異樣の臭がする汁が入って居る、隅の方には小供等のうんこが有る、薪や松葉が散亂して居る。天井は燻つて煤がぶらぶら下って居る、それに薄暗いと來るから其の小汚なさ加減と云ふもの、君子は厨房を遠ざけざけを得ない仕儀だ。田舍ならまだしも、京城市中で之れだから非度い。髪には不良の油をコテコテ塗って、折々それを手で弄る、或は手鼻をかむ。其手で釜から飯を取る。夏だと蠅はブンブンさらでも惡臭を發する筈の臺所が、韓人家に有つてはブツとむか付く程甚しいものだ。(『朝鮮漫画』59―60頁)

この引用文には、薄田斬雲の朝鮮の住居文化、とりわけ台所への嫌悪が露骨に表われている。朝鮮の台所に対する、このようなネガティブな認識は、村上唯吉の『朝鮮人の衣食住』でも確認できる。

庖廚所といつても特に設備の見るべきものは殆んど無いのである、一般に狹隘不潔の限りを極め、就中農家の如きは牛馬の繫留し在る處に隣接し、而かも之と隔壁なく、食器或は格納棚も、單に數段の板を渡せる曝露式棚あるに過ぎない、隨って塵埃等の滯溜實に驚くに堪へたりである、且つ蠅に對する不潔觀念絶無といふも不可なく、隋つて防蠅等の施設を爲すなきは勿論、食品若くは食器に蠅が群集して眞つ黑となつて居つても毫も顧みない。(『朝鮮人の衣食住』88頁)

ここに述べられている「庖廚所」とは、台所のことである。薄田斬雲は朝鮮の台所を見て、「夏だと蠅はブンブンさらでも惡臭を發する筈の臺所が、韓人家に有つてはブンとむか付く程」と描写する。また村上唯吉は、『朝鮮人の衣食住』で「隋つて防蠅等の施設を爲すなきは勿論、食品若くは食器に蠅が群集して眞つ黑となつて居つても毫も顧みない」と、批判している。村上唯吉の文章を読んでみると、朝鮮の台所の衛生状態に嫌悪感を抱いていたのは、単に薄田斬雲だけではなかったようである。当時の日本人の一般的な認識であったことがわかる。

薄田斬雲は、〈溫突の獨居〉でもまた次のように酷評している。

怪しげな畵張りの小屏風を廻して、薄暗い溫突内に孑然と独居した所が、やがて朝鮮趣味、朝鮮式の表象である。(…中略…) 要するに、溫突生活は蟄居生活にして進取の氣象を消磨せしむる、害毒だ。穴に蟄するが如きの安易を貪るは、堕落頽化の原因だ。豈に、明達者なからんや、活眼者なからんや。只夫れ國歩は艱難。總べて云ふと、韓人は底能者だ、其住居の溫突なるが如く、其の頭腦も溫突の如く風通しが悪く、薄暗い。加へて烟草と阿片で一層腦味噌を徵

生へしむる。先づ其の温突を叩き壊し、其の長烟管をへし折って、其の馬尾の鉢巻を裂き棄てよ。(『朝鮮漫画』5―7頁)

周知のように、温突は朝鮮の生活文化における最も代表的な表象の一つである。薄田斬雲もその温突を指して、「朝鮮趣味、朝鮮式の表象」であると述べている。薄田斬雲は、この温突のために朝鮮社会は文明開化に失敗し、沈滞してしまったと考えていた。薄田斬雲は、温突について「温突生活は蟄居生活にして進取の氣象を消磨せしむる、害毒」、「先づ其の温突を叩き壊し、其の長烟管をへし折つて、其の馬尾の鉢巻を裂き棄て」るべきものとして考えていたのだ。

薄田斬雲の温突に対する認識は皮相的かつ悪意的であったと言えよう。この点については、たとえば村上唯吉が『朝鮮人の衣食住』で温突について述べているところと比べてみてもわかる。

> 温突は朝鮮固有の煖室法で、今を距る事二百七十年前肅宗大王の世、領議政金子點の剏むる處であって、爾來幾多の改良を經て今日に及んだものである、(…中略…) 其の燃料は枯草、柴、本葉の類にて足り、且つ採煖と同時に炊爨の用に供する事を得るの便がある、又火災を惹起する事稀れたる等幾多の利益が尠くない、實に風土の要求に適應せる妙裝置と稱するも不可ないのである。(『朝鮮人の衣食住』96―98頁)

この引用文からわかるように、村上唯吉は朝鮮の温突を、「採煖と同時に炊爨の用に供する事を得るの便」があり、「實に風土の要求に適應せる妙裝置」として評価している。しかし薄田斬雲は、温突のために朝鮮社会は文明開化に失敗し、沈滞してしまったと見たのである。

6 おわりに

本稿では、薄田斬雲の『朝鮮漫画』を取り上げ、当時の日本人が朝鮮の生活文化、とりわけ衣食住をどのように認識していたかを考察した。その結果、薄田斬雲の朝鮮の衣食住に対する認識は、当時多くの日本人のあいだに広まっていた朝鮮認識とさほど異なってはいないことが確認できた。その朝鮮認識とは、要するに朝鮮文化を未開のものと考えるものである。つまり、薄田斬雲が帝国日本という「文明」の尺度をもって計ろうとした朝鮮文化とは、至急に改良しなければならない未開のままの状態にあった。言いかえれば、文明(日本):野蛮(朝鮮)という日本的オリエンタリズムの視線そのものであったのである。

〈朝鮮人の衣食住〉の表紙

〈乳房の露出〉の挿絵

〈朝鮮紳士〉の挿絵

〈飴売〉の挿絵

〈饂飩屋〉の挿絵

〈韓人家の台所〉の挿絵

参考文献

今村鞆(1914)『朝鮮風俗集』ウツボヤ書籍店

薄田斬雲(1908)『ヨボ記』日韓書房 同文館

薄田斬雲 (1908)『暗黒なる朝鮮』日韓書房 同文館

梶井陟(1980)「ヨボは朝鮮語か」『朝鮮語を考える』龍溪書店

鳥越静岐・薄田斬雲(1909)『朝鮮漫畫』日韓書房

中村金城(1910)『朝鮮風俗畫譜』富里昇進堂

日本近代文學館・小田切進編(1977)『日本近代文學大事典』講談社

本間九介(1894)『朝鮮雑記』春祥堂書店

村上唯吉(1916)『朝鮮人の衣食住』大和商會印刷所圖書出版部

漱石の満洲・虚子の朝鮮

石井正己

1　漱石の「満韓ところどころ」と虚子の『朝鮮』

昨年（2014）度の秋学期に大学院で行った授業で、『支那紀行』を取り上げたときに、その「序」に気になる一節があった。木村毅は『支那紀行』を編集するにあたって、2 冊の本を取り上げているところである。1 冊は高浜虚子（1874 ～ 1959）の『朝鮮』、もう 1 冊は夏目漱石（1867 ～ 1916）の「満韓ところどころ」である。『支那紀行』は、文芸に親しみを感じることで、それを植民地建設の礎にしようと考えていたが、その先例として挙げた 2 冊が、漱石と虚子だったことになる。2 人は非常に近い時代の人であり、漱石の友達が正岡子規（1867 ～ 1902）で、その弟子が虚子なので、同じ時代の雰囲気を生きている。

漱石は明治 42 年(1908)の 9 月から 10 月にかけて、大連から入って旅順に行き、熊岳城、営口、奉天、そして炭鉱のある撫順、そこから北のハルピンに行き、長春、新京、安東に戻ってきて、平壌、京城、仁川を回って帰ってくる。一方、虚子は明治 44 年(1911)の 4 月と、そして 6 月または 7 月にもう一度朝鮮を旅しているが、詳細はわからない。2 人の旅は 2 年の違いがある。

漱石は「満韓ところどころ」で「満韓」と名乗りながら、実際には満洲の途中で中断してしまって、朝鮮は紀行文を書かなかった。もう 12 月末で新聞も終わりだから、ここでひとまとめにしようというので、初出の新聞連載を中断したことを明言している。実際には満洲紀行であるが、明治 42 年は日記が残っているので、彼の行動は朝鮮まで知ることができる。一方、虚子は『朝鮮』で、下関から船に乗って釜山に渡り、大邱、京城、平壌まで歩いている。2 人の書いたところは微妙にすれ違っていることがわかる。

漱石の「満韓ところどころ」は、帰国後、明治 42 年に『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』に 51 回にわたって掲載され、翌年、『漱石近什四篇』と題して、「文鳥」「夢十夜」などと一緒に春陽堂から単行本として発刊された。この作品が全部で 51 節から成り立っているのは、新聞連載と対応することになる。日記と照らすといろいろなことがわかるが、今日はそこには触れない。これらは『漱石全集』に載っているので、手軽に読むことができる。

それに対して、高浜虚子の『朝鮮』は朝鮮を旅して、明治 44 年 6 月から『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』に連載した後、明治 45 年(1912)に単行本になったが、『定本高浜虚子全集』には載っていない。虚子の「紀行・日記」をまとめた 1 巻（毎日新聞社、1974 年）がありながら、そこには、日本国内を歩いた紀行文はたくさん載っているが、『朝鮮』については触れられていない。残念ながら、原典に当たらないと、『朝鮮』は読むことができない。従って、漱石は見えるけれども、虚子は見えなくなっている、そういう関係になる。

2 「満韓ところどころ」に見るエリートの視線

この 2 冊を比べてみておもしろいのは、漱石の方はエリートの旅、それに対して、虚子の方は庶民の旅だというになる。そのことを具体的に検証してみよう。「満韓ところどころ」は、「南満鉄道会社つて一体何をするんだいと真面目に聞いたら、満鉄の総裁も少し呆れた顔をして、御前も余つ程馬鹿だなあと云つた。是公から馬鹿と云はれたつて怖くも何ともないから黙つてゐた。すると是公が笑ひながら、何だ今度一所に連れてつて遣らうかと云ひ出した」と始まる。

この「是公」は、大学予備門で漱石と一緒になり、明治 41 年（1908）から満鉄総裁になった中村是公という人である。友人である満鉄総裁から「連れてつて遣らうか」と誘われて、総裁の案内で回るという旅だったことがはっきりしている。さらに中村是公が、「まあ海外に於る日本人がど

んな事をしてゐるか、ちつと見て来るが可い。御前見た様な何にも知らないで高慢な顔をしてゐられては傍が迷惑するから」と言うので、漱石は、「ぢや君の供をしてへいへい云つて歩いて見たいな」と注文を付け、胃が痛いにもかかわらず、結局、大連に向かうことになる。

8 節は大連の様子だが、「あれは何だいと車の上で聞くと、あれは電気公園と云つて、内地にも無いものだ。電気仕掛けで色々な娯楽を遣つて、大連の人に保養をさせる為に、会社で拵へてるんだと云ふ説明である」とある。日露戦争後租借地になった大連が、ロシアの統治を踏まえて新しい街として建設されてゆく際に、満鉄によって、内地にもない電気公園が造られている最中だった。さらに、「電車も電気公園と同じく、今月末に開業するんだ」という会話も見えるが、丘の上の道路はまだ完成していなかった。つまり、大連はフロンティアであり、今建設中だったのである。その建設真っ只中の大連を旅をして、漱石はその様子を書いていることになる。漱石は満鉄の経営する事業を広報し、植民地主義を公認していくための一役を買ってしまったと言っていい。

16 節には日露戦争の戦跡を訪ねる場面があり、旅順ではさらに顕著になってくる。日露戦争当時の病院があった場所が、今は化物屋敷と呼ばれるようになったという話が出てくる。「本当だか嘘だか実は僕も保証しない」と言いながら、かつての病院に化物が出るという都市伝説がまことしやかに語られていたというのは、実に興味深い。

17 節には、低賃金の肉体労働者である苦力が、大豆の油を採る工場で働いている様子が出てくる。今は細かく読まないが、最後のところで、漱石と思しき主人公が、「クーリーは実に美事に働きますね、且非常に静粛だ。と出掛に感心すると、案内は、とても日本人には真似も出来ません。あれで一日五六銭で食つてゐるんですからね。どうしてああ強いのだか全く分りませんと、左も呆れた様に云つて聞かせた」とある。「見事に働きますね」と「どうしてああ強いのだか全く分りません」の間には少し差があるが、日本人同士の会話に見られる高圧的な視線は、やはり無視できない。彼らがエリートとして工場を視察しているという事実は、やはり注意される。

23 節は旅順に行ったところである。日露戦争の戦跡を見物し、陳列所で遺品や戦利品を見ている。当時戦争に従事した中尉のA君がひとりで番をしていて、さまざま丁寧な説明をしてくれた。しかし、漱石はこのA君の名前を忘れてしまい、大変済まないと詫びている。その場面に、A君は奥さんが病気なので、病院の前で「それぢや、私は此処で失礼します」と挨拶して、馬車から下りて行ったという記述がある。先ほど中脇さんから、「ひとりひとりの小さな物語」を書きたいという話があったが、こんな話はもちろん満鉄の報告書には出てこない。しかし、漱石はそういう世界を細やかに書いていることもまた事実で、無視することはできない。

満鉄の会社に行くと、漱石が来たというので、いろいろな報告書を山のように積んで見せるが、漱石は遠慮したという場面も出てくる。この旅行はやはり視察の色合いが濃い。36 節は熊岳城だが、「おい満洲を汽車で通ると、甚だ不毛の地の様であるが、斯うして高い所に登つて見ると、沃野千里といふ感があるねと、橋本に話しかけた」とある。この「橋本」も、若い時からの知り合いである橋本左五郎という札幌農学校の教授で、畜産学の研究で満洲に来ていて、一緒に旅をしたのである。「沃野千里」と話しかけたが、橋本はスルーしてしまう。だが、最後に「満洲は大きな所であつた」とある。こういう一文は満洲のイメージを作ったはずである。

47 節は奉天のことで、これも都市伝説である。「茶を飲むと、酸い様な塩はゆい様な一種の味がする。少し妙だと思つて、茶碗を下へ置いて緩り橋本の講釈を聞いた。其講釈によると、奉天には昔から今日に至る迄下水と云ふものがない。両便の始末は無論不完全である。そこで古来から何百年となく奉天の民が垂れ流した糞小便が歳月の力で自然天然に地の底に浸み込んで、いまだに飲料水に祟りをなしてゐるんだと云ふ」とある。

科学者なのにこの程度かと感じるが、そんな都市伝説があったのだろう。「第一それ程の所なら穀類野菜ともに、もつと能く出来なければならない筈だ」と思うが、馬鹿げて議論しなかった。橋本も「是は伝説だよ」と断っている。しかし、それを真に受けて伝説を信じ、「如何にも汚い国民である」と述べてしまうところは、やはり問題である。

撫順の炭鉱の都市化している様子も、51 節に出てくるが、今はそれ以上触れないことにする。それにしても、この「満韓ところどころ」に出てくる漱石の視線というのは、日本人というだけでなく、エリートたちのネットワークで旅して、その中で見られた満洲である。やはり「満鉄の広告塔」という意味合いで書かれた作品であることは間違いないと思われる。

『支那紀行』の「序」で、木村毅は、「私が初めて満洲の地を踏んだのは今から十年前だが、その

時の課長級以上の人には、漱石の文をよんで満洲にあくがれて来たと云ふ人が、意外に沢山あるのに、私は驚いた始末である」と述べた。「満韓ところどころ」に惹かれて、これならば満洲で仕事をしてみたいと思うエリートがたくさん現れたというのは、これもまた文芸のなせる力だったということになる。しかし、多くの研究者は「満韓ところどころ」に触れたがらないと感じられる。それは、簡単に言うと、「満鉄の広告塔」のような文章を書いたためだろうと推測される。だが、この時代を生きた夏目漱石という人を知るためには、決して目を背けてはいけない作品であると考えられる。

3 『朝鮮』における庶民の視線

次に、高浜虚子の『朝鮮』を見てみたい。漱石に旅とは対照的で、これは庶民の旅だと言っていいい。彼は奥さんと一緒に釜山に入るが、大邱には奥さんの叔父がいた。その叔父は、3 節で、「一時他に率先して釜山で陶器商を営んだ頃は多少有福に暮したこともあるらしい。其頃釜山に於ける陶器商は三四軒ほか無つたと言つた。けれども内地での失敗者が殖民地に渡つて来て成功するのはまだ内地人の多く渡つて来ない間の事である。一旦内地の有力者が踵を接して来るやうになると彼等は往々にして又失敗者となるのである」とある。この陶器商から偽物の高麗青磁を売られ、身内に騙されたというエピソードが、後に見える。

叔父一家ばかりでなく、内地での失敗者が朝鮮半島に渡った。しかし、釜山でうまくいかないと大邱に行く。大邱でうまくいかないと京城に行く。京城でうまくいかないと満洲に行く。そういうふうにして北へ北へと移動してゆくのが、一つの動きである、ということを書いている。この認識はこの作品を貫くもので、虚子が出会った人々はそのように動いて、京城や平壌で再会してゆくことになる。

重要なのは、4 節のところで、「余は内地に在る間は我国民といふものを一民族として世界の多くの人間から切り放して考へるべく余り其機会を持たなかつた。従つて海外の発展といふ事に就ても深い考慮を費した事も無く、陸海軍人の赫々たる功名に就ても世の多くの人の如くに酔はされなかつた。其が足一度海峡を渡つて朝鮮の土地を踏んでからは、全く矛盾した二個の考が絶えず起つた」という点である。

内地にいる間は日本人という自覚はなかったが、朝鮮に来て二つの感情が生まれた。一つは、この朝鮮半島の人々に対して、「衰亡の国民を憐れむ心」であり、もう一つは、日本人としての「民族の一員としての抑え難き誇」であった。国民意識が生まれたということも言っていることからすれば、海外経験というものが国民国家を深く浸み込ませてゆく契機になったと考えることができる。

先ほど金容儀さんから妓生の話が出たが、この中に驚くべき一節がある。素淡という妓生は晋州の出身で、11 歳のときに妓生になって、15 歳のときに京城に出てきた。16 節に、彼女のアルバムを見る場面がある。そこには 6 種類の写真がある。最初は伊藤博文をハルピンで暗殺した安重根である。「朦朧たる写真」とあるのは、絵葉書もそうだが、何度も複写されて質の悪くなった写真である。二つめは麻布の御用邸にいる王世子の写真。これは大韓帝国の最後の皇太子李垠が日本服を着ている。三つめは長い髭を伸ばした伊藤博文の写真。四つめは日本の子供が玩具を持って遊ぶ写真。そして、五つめは妓生の写真が 5 ～ 6 枚。六つめは赤坂萬龍の写真が 4 ～ 5 枚。萬龍は赤坂の料亭にいて、日本一の美人と呼ばれた芸者ある。

安重根、王世子、伊藤博文、日本の子供、妓生、萬龍が並ぶ。私たちは、安重根と伊藤博文の写真があると、反日運動かと即断しがちである。だが、それらに加えて、日本の子供があり、わが身に重ねられる妓生があり、大韓帝国の最後の皇太子李垠、芸者萬龍の写真もあって、ひどく輻輳している。このアルバムは、単純に排日だけでは処理できず、複雑に重層する意味合いを考えてみなければならない。単純化して考えれば何事も納得しやすいが、このアルバム 1 冊をとっても、事実は非常に複雑であると考えざるを得ない。

23 節には、洪さんという排日運動家の話が出て来る。平安道の平壌付近の出身で、排日運動で拷問を受けて、歯が全部抜けている男性だが、その人が排日問題についてどう考えているかということを述べている。日本語の奨励に到着した彼について、「余も日本人の一人である以上、洪さんが或注意を払つて力めて無事な結論に達したことも無理からんことといはねばならなかつた」とする。洪さんの日本語奨励は、排日からの思想的な転向を表わし、子供は大阪府の中学校に入れて、エリートにしようとしている。ここには植民地主義に靡いていった人間像を見ることができる。33

節は平壌のことになるが、牧師が尋常小学読本の類を使って日本語を教えている場面も出て来る。
今は細かく触れられないが、虚子の旅には、エリートはまったく出て来ない。漱石が会った満鉄の総裁も出て来なければ、札幌農学校の教授も出て来ない。日本人も朝鮮人も区別なく、生きていくのに苦労している庶民が出て来て、そのネットワークの中で出会い、別れ、また出会うというような展開になる。なかには旅芸人も放浪者も出て来る。虚子の世界を見ると、漱石と違う視線があることがわかる。
木村毅は「序」で、朝鮮半島の全羅南道の僻村の兵舎で、この『朝鮮』を読み耽ったと書いている。「私はこの小説が冥々の裡に、朝鮮統治の上に、なした功績は、二人や三人の総督の力を合せたよりも、もつと大きくはなかつたかと思つてゐる」と付け加えた。つまり、文芸が植民地支配に果たす働きは、総督の力よりはるかに大きいと考えていることになる。
しかし、『定本高浜虚子全集』を編むときに、この『朝鮮』は入れなかった。戦後の虚子のイメージから、この紀行と小説を兼ねたような作品は、おそらく遺族の高浜年尾の手で抹殺されていったということになる。でも、私どもは、高浜虚子という人を知る上で、そして植民地時代の日本人を知る上で、やはり漱石と並んで、この『朝鮮』を改めてじっくり見てみたいと思うのである。
繰り返しになるが、私たちは『漱石全集』があるから、「満韓ところどころ」は手軽に読めて、それを議論するベースもある。ところが、高浜虚子の場合はそれを抹殺してしまっているので、そこから掘り起こしていかなければならない状況に置かれている。『朝鮮』のような状況はたぶん、午後の最初の趣旨で述べたように、虚子だけの問題ではない。私たちは、本当に知らなければならないことをまだ知ることができていないのではないか、そう感じているのである。

上海を訪れた日本人の紀行—大正期を中心に—

楊静芳

1　はじめに

「魔都」という言葉は近年、中国では、上海の代名詞としてよく使われている。それによって、今日のグローバル都市として、世界中の人々を惹きつける上海の「魔性」をよく物語っている。実は、上海をはじめて「魔都」と呼んだのは、村松梢風であったという。氏は 1923 年にはじめて上海を訪ね、その時の体験をもとに、1924 年に『魔都』を発表した。その後、「上海」＝「魔都」というイメージは日本人に伝わり、上海の代名詞として定着するようになってきた。

上海の「魔性」はどこからきたのか。それは近代に入ってから上海の 100 年の租界（1845 年 11 月～ 1943 年 8 月）の歴史と関わっている。アヘン戦争（1840 ～ 1842 年）後、南京条約によって上海は開港させられた。1845 年 11 月、英国領事バルフォアと上海道台との間に土地章程が結ばれ、イギリス租界が設置された。以降、1848 年にはアメリカ租界、1849 年にはフランス租界もそれぞれ設置された。1863 年、英米両租界が合併し、共同租界（公共租界）となる。租界は最初「華洋分居」で、中国側の管轄下にあったが、1853 年 9 月に起きた秘密結社・小刀会反乱をきっかけとして、租界では、「華洋分居」は「華洋雑居」という現実になり、従来の「土地章程」が修正され「第二次土地章程」として承認された。この新しい土地章程によって、租界の自治が確立された。その後、租界は急速な発展を遂げ、近代都市「上海」の原型をなした。

当時の上海には、租界の他に、もう一つの空間が存在していた。それは租界に隣接する、700 年もの歴史を持つ県城を中心とする地区である。ここでは在来の土着的な秩序が維持されており、租界とかなり異なった雰囲気が漂っていた。租界と県城という二つの異質な空間の相互侵犯ないし相互浸透によって、上海の「魔性」が醸し出されたと考えられる(1)。

2　日本人と上海

租界の西欧的な近代都市施設は、1870 年頃までにかなり整えられているそうである(2)。エフ・エル・ホークス・ポットの『上海史』によると、「イギリス人の行くところ到るところ教会と競馬場あり」とある。また、欧米との間に定期航路が開かれ、洋式建築が立ち並ぶ。道路が整備され、橋が架けられ、ガス灯も灯る。学校や病院、消防機関や刑務所がシステム化されていく。劇場や公園、倶楽部やクリケット場など、社交やスポーツの施設も作られた。1871 年には海底ケーブルで、ロンドンまでの電信も可能となる。上海は、単なるビジネスの場所から、欧米人が生活できる場所へと、変容していったそうである(3)。20 世紀前半の一時期、「冒険家の楽園」「悦楽の都」「東洋のパリ」というさまざまなあだ名が示すように、上海はあらゆる人々の夢と欲望を実現させてくれる場所として、「世界で最も注目」された街だったと言われている(4)。

上海は戦前、地理的に極めて近い国際都市であったため、日本人が最も注意を向ける外国の大都市であった。租界の 100 年間、日本の居留民の数は年々増えていた。1870 年には 7 人だったが、日清修好条規の調印（1871 年）および三菱商会の上海横浜航路の開通に伴って、1885 年に 595 人、1900 年 1,172 人に達した。20 世紀に入ると、日本企業が紡績業を中心に上海に進出し、1910 年に 7,628 人と急増した。第一次世界大戦中、日本は勢力を伸ばしたので、1915 年に上海の日本人の数は 11,457 人に達し、イギリスを抜いてトップに立った。1923 年 2 月、日本郵船の長崎上海定期航路が開設され、長崎から 1 日ちょっとで上海に着くようになった。1930 年代に入ると、日本の中国侵略が本格化し、日本人の数も増え続けた。第一次上海事変が勃発した 1932 年に、26,724 人に、第二次上海事変、そして中日全面戦争の皮切りである 1937 年 23,672 人に達した。1941 年に、日本

軍は共同租界に進駐し、上海全域を実質的に支配した。日本人の数は 1943 年に 103,968 人に達した(5)。要するに、時勢の変動および交通手段の進化とともに、日本人は絶えず上海に渡航していたのである。

西暦	歴史的事件	上海関係出版物（一部）
1911 年	10 月 10 日、辛亥革命始まる。清朝滅亡。	
1912 年	1 月、中華民国成立。1 月より、県城城壁の取り壊しが始まった。	
1913 年		島津長次郎『上海案内』（金風社、1 月）。杉江房造『上海案内』（日本堂、1 月）。
1914 年	第一次世界大戦始まる。	
1915 年	1 月、日本政府、中国に「二十一箇条要求」を提出。3 月、上海などで日貨排斥運動など排日運動が起こる。5 月、中国政府がこれを受諾した。	
1917 年	2 月、ロシア二月革命。7 月、総合娯楽施設「大世界遊楽場」開業。上海に内山書店開業。10 月、シンシア・デパート開業。11 月、ロシア十月革命。	
1918 年	11 月、第一次世界大戦終わる。	杉江房造『新上海』（日本堂、5 月）。徳富蘇峰『支那漫遊記』（民友社、6 月）。
1919 年	1 月、パリ講和会議。5 月、五・四運動起こる。これに応じて、上海でも抗議運動が始まった。6 月、ベルサイユ条約調印。上海の日系紡績工場で 2 万人のストライキ。	河東碧梧桐『支那に遊びて』（大阪屋号書店、10 月）
1921 年	7 月、フランス租界で中国共産党第 1 回全国代表大会開催。	石井柏亭『滬上日記』（日本評論社出版部、6 月）。井上紅梅『支那風俗』（日本堂書店、7 月）。芥川龍之介『上海游記』（『大阪毎日新聞』8 月 17 日～9 月 12 日）。上海日本商業会議所『上海概覧』（上海日本商業会議所、9 月）。池田信雄『上海百話』（日本堂、12 月）。
1922 年		池田桃川『続上海百話』（日本堂、11 月）。上海大和婦人会『上海婦人』（上海婦人社、不明）。
1923 年	2 月、日本郵船の長崎上海定期航路（日華連絡船）開設。排日運動。9 月、関東大震災。	三宅孤軒『上海印象記』（料理経済社、5 月）。村松梢風「不思議な都「上海」」（『中央公論』8 月）。河端勘左衛門『上海港』（南満州鉄道株式会社庶務部調査課、12 月）。
1924 年	1 月、第一次国共合作成立。	村松梢風『魔都』（小西書店、7 月）。山村耕花「上海の裏表」（『女性』9 月）。
1925 年	5 月 30 日、共同租界で学生らの抗議デモ隊に警官隊が発砲、死者 11 人（五・三〇事件）。6 月、五・三〇事件に抗議して学生・商人・労働者のゼネスト開始（五・三〇運動）。	片山潜「支那旅行雑感」（『改造』6 月）。森盛一郎『上海に於ける動乱直後の印象』（東京商業会議所、9 月）。上塚司『揚子江を中心として』（織田書店、10 月）。芥川龍之介『支那游記』（改造社、11 月）。服部源次郎『一商人の支那の旅』（東光会、11 月）。
1926 年	10 月、上海の労働者が北伐に呼応して武装蜂起、翌日には鎮圧される。	谷崎潤一郎「上海見聞録」（『文芸春秋』5 月）。谷崎潤一郎「上海交遊記」（『女性』5 月号、6 月号、8 月号）。高山英明『蘇浙遊記』（私家版、12 月）。田中貢太郎「上海瞥見記」「美酒花雕記」（『貢太郎見聞録』大阪毎日新聞社・東京日々新聞社、12 月）。

おびただしい渡航者の中に、官僚、商人、文学家、芸術家をはじめ、学生、一般民衆まで、さまざまな人がいた。上海を舞台とした小説、紀行文、ルポルタージュやガイドブックなどがたくさん書かれて出版された。これらの作品は、言葉によって日本にいる読者に上海の様子を発信し、ある程度当時の日本人の中における上海像の形成へ影響を与えた。一方、これらの作品の中に見られる作者の上海に対する見方は、当時の日本社会の一般認識の反映でもある。

大正時代、特に20世紀20年代に入ると、上海に渡航する日本人が多くなり、上海関係の出版物が盛んになった。その背景に、第一次世界大戦を通して、日本が上海で勢力を拡大したということがある。それに、1923年に日本郵船の長崎上海定期航路（日華連絡船）の開通で、渡航が便利になったからである。繁昌を極めた20年代の上海は多くの日本人を惹きつけた。一方、20世紀初頭の中国では、辛亥革命が起こされ、五・四運動が発生したように、大きな変動が生じた時代である。変動が起きる度に、その波は上海租界に及んだに違いない。

大正時代の日本は、近代国家の道を数十年歩み、日清・日露の二つの戦争に勝利し、世界の帝国主義国の一つに数えられるようになった。大正時代に上海を訪れた日本人は、日常的な生活空間を脱出し、それぞれの観察眼を働かせて、ある期間異国である中国の自然風土や人情などに触れる体験を、紀行文という体裁を取り、記録した。上記の表は、1911年から1926年までの歴史的事件と一部の上海関係の出版物を表で示した。これらの作家の筆の下で、上海はどのように描かれたのかを考察する。

3　上海に見られる「西洋」

前述したように、租界の西欧的な近代都市施設は、1870年頃までにすでにかなり整えられている。内外の資本投入や人口の増加などで、20世紀20年代頃、最高潮期を迎えた。

その繁栄ぶりについては、日本人の紀行文でよく日本と対照して描かれた。俳人の河東碧梧桐（1873～1937年）は『支那に遊びて』で、上海港について、以下のように賛嘆した。

> 上海に各国所属の桟橋がいくつとなくある。一万吨級の船の繋り得るものを数へても、やがて十に余るであろう。それが岸から二十間とは離れない、陸に迫るといふよりも、陸に直かづけに寄せ得る大きな自然に一度は驚嘆せねばならない。神戸や大阪や横浜の築港に、莫大な費用を投じなければならない、我々日本人の目には、この自然の大なる恩恵が羨望の標的となつて映るのだ。川の広さを言へば、淀、隅田の約三倍に過ぎないであろう、それが岸には一万吨級の船を寄せ、中流には二万吨級の船をも優に繋ぎ得る。僅かに千吨級の船さへ上下し難い淀、隅田川の流域と比較して、単に島国と大陸の差のみの算定に落著いてをれるであらうか (6)。

氏は上海港の巨大さに「驚嘆」し、「羨望」に絶えず、思わずそれを神戸や大阪や横浜の港と比較してしまったのである。

小説家、紀行文家の遅塚麗水（1866～1942年）も同じく上海港を日本の港と比較し、「流石は東洋の大埠頭、上海の殷賑は、日本の一文士を驚嘆せしめたり、有体に言へば大阪も神戸も東京も横浜も一籌、二籌、三籌は愚か数籌を輸せざるを得ざるを悲む」(7)と驚嘆した。

さらに、建築物、道路、交通機関などの施設を見た時も、思わずそれを日本のと較べた。以下のとおりである。

> 埠頭をはじめ市の商業区といはるゝその建築物の雄大なる、喩へば三越、松屋、松坂屋、第一相互や、丸ビルその他東京にある凡ゆる壮麗なる建築を、一箇所に寄せて集めて、始めてこれを彷彿せしむるに足るほどなり、東京にていふ山の手辺の住宅地にても、何れも高荘なる建物にて、世界列強の中間入りをなせる我が日本も、この点だけは恥かしき次第なり。
>
> 大馬路といふ大馬路は、電車を通じ、更に無軌道の電車あつて走れり、如何なる窄き道路といへども全部混凝土にて舗装されあれば、軌道なくとも電車を走らせ得るなり、電車は頭等車と公衆車とを連結し、頭等車には紳士これに乗り、公衆車は一般庶民これに乗る、買ひたる乗車券は降車の際、これを車掌に渡すを要せざるなり、別に汽車乃ち乗合自動車あり、車体も美しく且大きく、我東京の円太郎など、これに較べて、貧弱なること言語道断なり、人車は四辻に群屯し、馬車、自動車は織るが如し、十字路上に、仁王の如く立てる帙帽黒衣の偉大なる印

度人巡査が、黒白だんだらに塗りたる四尺ばかりの警杖を一揮すれば、路行く人も、馬車も、電車も、自動車も、黄包車（人力車の事なり）も、忽ちに停止して路を開く。
百貨店の大なるものには永安公司あり、先施公司あり、新々公司あり、其の他某々公司あり、何れも市の中央区に路を挾んで数層の高閣相対峙し、夜に入ればイルミネーションを点じ、さながらの不夜城を現出するなり、さりながら上海の繁華は、居留地の繁華なり、支那全国の富人は、兵革を怖れて、財宝を携へ、妻孥を提げ、安全地帯なる居留地に邸宅を構へて、その生命財産の安固を謀れるなり、亦悲むべきかな。（「盛なる哉大上海」）(8)

しかし、西洋的な上海租界を否定的に見る人もいる。それは、1923 年 3 月～ 7 月に特派員として中国を訪ねた芥川龍之介（1892 ～ 1927 年）である。氏は 1921 年 8 月 17 日～ 9 月 12 日に『大阪毎日新聞』で「上海游記」の連載を発表した。21 節からなったこの紀行記に、西洋化した上海への嫌悪は「十二　西洋」を通して表された。「十二　西洋」は問答の形を用いて、問の側を西洋贔屓の人、答の側を西洋嫌悪の人と設定した。以下のとおりである。

問。上海は単なる支那ぢやない。同時に又一面では西洋なのだから、その辺も十分見て行つてくれ給へ。公園だけでも日本よりは、余程進歩してゐると思ふが、――
答。公園も一通りは見物したよ。仏蘭西公園やジエスフイルド公園は、散歩するに、持つて来いだ。殊に仏蘭西公園では、若葉を出した篠懸の間に、西洋人のお袋だの乳母だのが子供を遊ばせてゐる、それが大変綺麗だつたつけ。だが格別日本よりも、進歩してゐるとは思はないね。唯此処の公園は、西洋式だと云ふだけぢやないか？　何も西洋式になりさへすれば、進歩したと云ふ訣でもあるまいし。
（中略）
問。あの辺は殆西洋だね。赤瓦だの、白煉瓦だの、西洋人の家も好いぢやないか？
答。西洋人の家は大抵駄目だね。少くとも僕の見た家は、悉く下等なものばかりだつた。
問。君がそんな西洋嫌ひとは、夢にも僕は思はなかつたが、――
答。僕は西洋が嫌ひなのぢやない。俗悪なものが嫌ひなのだ。
（中略）
問。すると君は上海の西洋には、全然興味を感じないのかい？
答。いや、大いに感じてゐるのだ。上海は君の云ふ通り、兎に角一面では西洋だからね。善かれ悪しかれ西洋を見るのは、面白い事に違ひないぢやないか？　唯此処の西洋は本場を見ない僕の眼にも、やはり場違ひのやうな気がするのだ(9)。

「俗悪」「場違ひ」はまさに上海租界に対する氏の評価である。氏は「新芸術家の眼に映じた支那の印象」（1921 年）という文章では、「然し凡て南の風景は唯だ美しいと言ふに過ぎません。丁度日本の景の夫れに似て比較的支那的気分が薄かつたのであります」「今度初めて支那へ渡りましたが、来て見るとモツト早やく来れば好かつたと思ひました。支那は早く来ないと時と共に段々古いものが破壊されて行きます」(10)と述べた。つまり、氏が憧れているのは古き良き中国の景色である。上海租界はすでに西洋化され、その様子は近代国家の日本に似ているので、氏を失望させたのであろう。
谷崎潤一郎（1886 ～ 1965 年）は 1918 年 10 月～ 12 月、1926 年 1 月～ 2 月という 2 回にわたって中国に渡航した。1 回目の時は上海に関する紀行文を残さなかったが、2 回目は「上海見聞録」（『文芸春秋』、1926 年 5 月）、「上海交遊記」（『女性』、1926 年 5 月号、6 月号、8 月号）を発表した。「上海見聞録」では、「支那人の風俗なぞも、悪く西洋かぶれがして、八年前に来た時とは大分違った印象を受けた。気に入つたらば上海へ一戸を構へてもいいくらゐに思つてゐた私は、大いに失望して帰った。西洋を知るには矢張り西洋へ行かなければ駄目、支那を知るには北京へ行かなければ駄目である」と言った。つまり、上海は西洋でもない、中国でもないと氏は認識しているのであろう。

4　上海県城の風景と民衆

上海租界に対する正反対な見方と違って、紀行文に見られる上海旧県城の描写はよほど一致する。たとえば、前文にもあげられた遅塚麗水『新入蜀記』には、以下のような描写がある。

超えて十四日、土屋氏の自動車を借て、児等と旧城内の見物に行く、銀行の支那ボーイが案内役なり、城隍廟より湖心亭あたり、街幅二間に足らぬ処に、俥は行く、轎は通る、馬車は過ぐ、自動車は走る、物売は叫ぶ、乞食は喚ぶ、左右は何れも金看板を懸け聯ねたる各種の商店、善く支那の書物のある袖を聯ねて幕を作し、汗を揮つて雨を作すと形容されたる、それにも増せる繁華なり、細き露路を入れば、奥まりたる処に必ず廟あり、紙にて作りたる馬蹄銀の元宝を焼く煙に咽びつゝ、何処も同じ善男善女の群が龕前に礼拝す、我成の日の水天宮や、四万六千日の浅草観音なども、此処を見た眼からは寂しきこと限りなし。

湖心亭といふと、水碧に沙明かに、彫欄是を繞つて坐ながらにして晴波を弄するに堪へたる処なるべしと読者は思ふけれど、実は穢雑なる市塵の細溝を流れ出づる糞や小便の水を湛へたる方池にて、その上に石の欄干をめぐらせる幾曲の石橋を度し、中央の亭に通ずるやうに造られたるなり、亭は例の簷牙高く喙ばめる古風の建築なれど、修理もせずして荒廃に任せあるが、その中が料理店となりて、茶を飲むもの酒を酌むもの、立錐の余地もなきほどにて、拳を闘はし、歌をうたひ、紛全、雑然、奇態を百出す。昔の小学読本ではないが、凡そ地球上の人種のうちにて、第一番に饒舌なるは支那人にて、更に一番高声に語るものも亦支那人なり、尋常一様の会話の時にても嚙みつくやうに大声疾呼して、喧嘩をしてゐるのではないか知らと思はるゝ許りなり、その饒舌にして且大声の持主なる支那人の群居する此等茶館の喧囂は、気の弱き東海の一文士も、耳を掩ふて走り且僵れんとするなり。(「上海城内見物」)

このように、街の光景についても、湖心亭という名所についても、混雑で汚くてボロボロした場所として描かれた。ここで生活している中国人は不潔で礼儀知らずと見られている。それは旅人が見た実際にある通りの部分もあれば、県城に対して不快感を覚えたのは、ここを訪れた日本人は厳しい目で県城を見ている部分もあるのである。つまり、近代国家であった日本と日本人の有り様を基準に、半封建半植民地であった中国を観察しているのである。

芥川龍之介は「上海游記」で、車屋について、「抑車屋なる言葉が、日本人に与へる映像は、決して薄ぎたないものぢやない。寧ろその勢の好い処は、何処か江戸前な心もちを起こさせる位なものである。処が支那の車屋となると、不潔それ自身と行っても誇張ぢやない」と述べた。また、乞食について、「支那の小説を読んで見ると、如何なる道楽か神仙が、乞食に化けている話が多い。あれは支那の乞食から、自然に発達したロマンティシズムである。日本の乞食では支那のやうに、超自然な不潔さを具えてゐないから、ああ云ふ話は生まれて来ない」と述べた。貧しい中国の民衆に対して、同情を示すどころか、むしろ冷ややかな口調でをからかった。

5 時勢への眼差し

前述したように、中国の 20 世紀初頭は、大きな変動が生じた時代である。そして、変動が起きる度に、その波は必ず上海租界に及んだに違いない。1915 年 3 月に、日本政府が中国に提出した「二十一箇条要求」に反対するには、上海などで日貨排斥（にっかはいせき）運動など排日運動が起こった。1919 年 5 月に、パリ講和会議に反対するに、五・四運動が起こった。これに応じて、上海でも抗議運動が始まった。また、1925 年 6 月に五・三〇事件に抗議して上海全市のゼネストが開始した（五・三〇運動)。こうして、侵略者を追い出し、主権を守るための反帝国主義の民族運動が中国でますます活発化したのである。

実業家の服部源次郎は、1925 年の『一商人の支那の旅』で、「支那人が長い間、国家と離れた社会組織で、自己主義一点張りの桎梏の中で、幾百年間育てられた血が通ふて、その社会悪の現象が上は大官より下は苦力に至るまで、コンミッション制度の生活組織であるから、国家主義で固められた日本人の頭より見れば、じつに歯痒いのである」(11)と記述している。このように、日本の国家秩序の感覚から、中国の無国的混乱ぶりを眺める姿勢は、この時期上海の変動を遠望する日本人の平均的な眼差しである。

それに関連があると思うが、上海を訪れた日本人の紀行文には、そういった風向きが殆ど見えない。むしろ無視していると言ってもいい。たとえば、河東碧梧桐は『支那に遊びて』で以下のように述べている。

植民政策の要訣は、結局金か人かいづれかを惜まないのに帰著する。土情に適する制度などは、其の上に被らせれた装飾なのだ。英米独人などの今日までの政策、及び其の政策の成功は、唯だ金主義であり、又た其の主義を徹底せしめたからだ。貧乏で人の余る日本は、それと対抗し得ないで、今日まで已むなく雌伏の状態にあつた。けれども、唯一対抗の道は、その有り余る人を以てするの外は無つた。戦争の傷手は急に癒えないと言つても、欧米の財力の殺到する時機は、尚ほ眼前にあることを知らねばならない。金を投ずるかはりに人を投ぜよ、は依然として我が植民政策の第一義であらねばならない。

今日在留邦人の発展と言つても、それは要するに鬼の留守間の洗濯に過ぎないのだ。偶然のことが我を洗濯婆さんにしたのだ。正直に言へば、それは小さな弱々しいことだ。小さな弱々しいことであつても、それをしないよりはいいには違ひない。けれども、かうなつてしまつて、今度まともな敵の現はれた時、もう武者振り勇ましく戦はねばならない覚悟を誰がもつてゐるか。鬼の留守間の選択は言はば気楽な消極的な戦ひであつた。講和後の戦ひは、凡てが積極的に悪戦苦闘しなければならなくなるのだ。

日本は第一次世界大戦中、中国で拡大した勢力を維持するために、欧米と悪戦苦闘すべきだと氏は考えた。いわば、同じ帝国主義の欧米の国家しか相手にしなかったのであろう。中国人はすでに覚醒しつつある事実を認識しなかったし、帝国主義と植民地主義を批判しないまま受け取ったのがわかった。

1917 年 9 月～ 12 月に中国を訪れた徳富蘇峰（1863 ～ 1957 年）は、上海を考察したあと、以下のようにのべた。

如何に上海が支那に於ける、殆ど唯一の安全地帯たるかは、支那人にして、少しく身辺に危険を感じ、若くは不自由を感じ、或は聊か疑惧の念に襲はれつゝある者、何れも其の生命財産を携へて来りて、租界に託するを見て知る可し。要するに支那に一事変ある毎に、上海は必ず膨脹す。若し日本の工業が、此地に勃興する暁とならば、更に其の隆盛を見るの時あらむ(12)。

氏は中国の変動を受け止めたが、しかし、民族運動が盛んに行われることについて、上海が租界でなくなる日が来るのを認識できず、日本は上海での利益を維持し拡大するのを期待した。

6　終わりに

以上、上海に見られる「西洋」、県城の風景と民衆、時勢への眼差しという三つの面から大正期に上海を訪れた日本人の紀行文を見てきた。これらの紀行文は上海の歴史、乃至中日関係を知るには、とても貴重な資料である。紀行文に関連する研究は、日本国内だけではなく、中国でも盛んに行われている。

これらの紀行文においては、西洋への憧れ、中国への蔑視が基調である。たとえ西洋を批判しても、それは西洋かぶれの上海への批判である。そして、租界以外の上海に対して、厳しい目で観察し、そこで生活している中国人に対して、たとえ同情を示しても、見下ろす姿勢をとっていたのがほとんどである。それは日本人としての優越感が働いているのであろう。20 世紀初頭、勝手に中国に入ってきて、中国の領土で恣意的に暴行している植民者に対して、中国人は覚醒して、植民者を追い出し、主権を取り戻す運動を起こしていた。しかし、こういった民族運動に触れても、正確に受け止められなかった。これは大正時代に生きる日本人の認識の限界である一方、30 年代からの本格的な中国侵略および大東亜共同幻想にも繋がっていると見てもよいであろう。

注

1 「具体的にいえば、たとえば「租界」という近代的な空間に、茶館や妓楼などの伝統的な生活や娯楽の施設が大量に進出することによって、「租界」の資本主義的な均一性がつねに破壊の危機に面していたことがあげられる。いっぽうで、さまざまな水路を自らのネットワークとして展開している「県城」の伝統的な空間に、「租界」から延びてきた数々の「越界築路」としての幹線道路が今度は逆に、またたえず、在来の「水郷」としての秩序を蹂躙しつづけているのである」（劉建輝『魔都上海――日本知識人の「近代」体験』講談社、2000 年、7 ～ 8 頁。）

2 エフ・エル・ホークス・ポット著、土方定一・橋本八男訳『上海史』生活社、1940年。
3 和田博文他『言語都市・上海』藤原書店、1999年、9～10頁。
4 劉建輝『増補　魔都上海――日本知識人の「近代」体験』ちくま学芸文庫、2010年。
5 陳祖恩『上海の日本文化地図』上海錦繡文章出版社、2010年、8～9頁。
6 河東碧梧桐『支那に遊びて』大阪屋号書店、1919年10月、150頁（小島晋治監修『大正中国見聞録集成第7巻　復刻版』ゆまに書房、1999年）。
7 遲塚麗水『新入蜀記』大阪屋号書店、1926年、7頁（小島晋治監修『大正中国見聞録集成　第19巻　新入蜀記　復刻版』ゆまに書房、1999年）。
8 遲塚麗水『新入蜀記』大阪屋号書店、1926年、7～8頁（小島晋治監修『大正中国見聞録集成　第19巻　新入蜀記　復刻版』ゆまに書房、1999年）。
9 芥川龍之介「上海游記」（『芥川龍之介全集』第8巻、岩波書店、1996年）。
10 芥川龍之介「新芸術家の眼に映じた支那の印象」（『芥川龍之介全集』第8巻、岩波書店、1996年）。
11 服部源次郎『一商人の支那の旅』東光会、1925年、193頁（小島晋治監修『大正中国見聞録集成　第20巻　復刻版』ゆまに書房、1999年）。
12 徳富蘇峰『支那漫遊記』民友社、1918年6月。

参考文献

日本語
小島晋治監修『大正中国見聞録集成　復刻版』ゆまに書房、1999年。
趙夢雲『上海文学残像――日本人作家の光と影』田畑書店、2000年。
中国語
木村泰枝『西方・日本・中国的上海夢想』博士論文、2008年。
徐静波『近代日本文化人と上海』上海人民出版社、2013年。
陳多友『日本遊滬派文学研究』上海外語教育出版社、2012年。

伝説の描く歌枕的「風景」の限界
―瀬戸内海の桃太郎と大陸の馬車と―

野村典彦

1　『鉄道と旅する身体の近代』

柳田国男が民俗学・口承文芸研究の輪郭を整えていった 1930 年頃は、旅行と蒐集趣味の時代であり、雑誌『旅と伝説』にも蒐印（寺社印・駅スタンプ・風景通信日附印）に関する記事が少なくない。伝説は「コト」であるという柳田独自の「昔話・伝説」論も、当時流行していた「民謡・伝説」による「一つの型に囚われた」「語り」による風景からの解放、自らの目で見、自らの耳で聞くという旅のありかたと風景観の導きとしての側面を持っていた〔野村・2011〕。そうした当時の「民謡・伝説」の流行を顕著に見せる雑誌が、日本旅行協会の『旅』である。1931 年 6 月号「旅行倶楽部」欄に、駅スタンプを福井駅長が考案、「蒐印帳、扇面　葉書等に押捺することになつた」記事がある。「風景通信日附印」も同年 7 月に使用が開始され、『旅』誌上は通信日付印と駅スタンプにあふれていたのだった。

2　大名古屋旅行局の機関雑誌『旅路』

この時期の鮮満旅行を覗くため、まずは大名古屋旅行局の機関雑誌『旅路』を開いておく。愛知県内の名所の風景として「鳳来峡」の歌詞や「日本一桃太郎音頭」の歌詞を「民謡の旅（その一）」として紹介している 1931 年 4 月号に、主催団体旅行の記録が掲載されている。1929 年 10 月の第 1 回が「満鮮二等旅行　60 名」、1930 年は「伊勢参宮会（臨時列車）　1300 名」、「東京見物多摩陵参拝　80 名」「北陸温泉廻遊（臨時列車）　400 名」「佐渡ヶ島観光・東北温泉めぐり二等　60 名」「九州全土廻遊団　100 名」「紀州熊野三社めぐり・瀞八丁清遊　100 名」「浜名湖めぐり　80 名」「朝鮮金剛山探勝満洲視察（二等）　40 名」「身延山参詣・御嶽昇仙峡めぐり　60 名」「東京・江の島・鎌倉　日光・善光寺・湯田中めぐり　100 名」「下呂温泉と中山七観楓（臨時列車）　650 名」。臨時列車で行われる伊勢神宮への初詣や中山七里で観楓をしながらの下呂温泉への旅は、名古屋の人々にとって参加し易いものであった。旅行への覚悟が大きく異なるものであるはずだが、鮮満への旅も 50 名前後の参加者を集めていることがわかる。

さて、1931 年。「伊勢参宮会（臨時列車）　600 名」「同上（仝上）　750 名」「山陰周遊、三保ノ関天の橋立　50 名」「関東・奥羽周遊　100 名」「下呂温泉ゆき　150 名」「久能山参詣三保遊覧　100 名」。以降は広告などで補おう。5 月 7 日出発の「高野山参詣、京都、桃山、嵐山、大阪、橿原、奈良、キネマ撮影所　見物」2 泊 4 日の旅は 16 円 80 銭（4 月号広告）、9 月 3 日出発の「北陸温泉廻遊団」（長野善光寺、宇奈月、和倉、片山津、芦原、福井永平寺）4 泊 6 日の旅は食堂車付きの臨時列車で 24 円 50 銭（8 月号広告）。6 月 5 日出発の「北海道樺太視察団一行百余名は頗る元気で無事廿一日早朝帰名されました」（7 月号「編輯室より」）とあるが、こちらは 88 円（4 月号広告）の旅である。

8 月 13 日出発の鮮満観光団は 25 日に名古屋に戻る 13 日の旅で 98 円 50 銭（汽車汽船 2 等希望であれば 60 円増）である。国内旅行の倍近い費用を要するようでもあるが、「此の行程を個人にてすれば優に百五十円を要す」（5 月号広告）ともある。

「13 日　急行借切車にて名古屋駅午後五時発車／ 14 日　瀬戸内海の風光を車窓より賞して下関着、関釜船にて釜山上陸、夜行して／ 15 日　京城午前七時着旅館に入り休息、自動車にて市中見物後一泊／ 16 日　京城午前十時発一路南満の大平野を経て／ 17 日　奉天着午前六時頃馬車にて北

陵、内城、支那街参見して一泊／18日　撫順炭礦見物後大連に向ふ／19日　旅順戦跡廻り、大連市中見物一泊／20日　奉天に引返し安東鴨緑江を経て／21日　平壌、牡丹台、乙密台、大同江舟遊して／22日　釜山に向ひ、夜行して下関に上陸／23日　天下の名泉別府に長途の旅塵を洗ひ一泊／24日　別府滞在（宇佐八幡、耶馬溪、風連鍾乳洞等　参拝、見物自由行動）午後六時大阪商船にて瀬戸内海の晩夏月光を浴して／25日　大阪着午後一時自動車にて大阪駅に至り名古屋着午後八時頃」（7月号広告）。大陸への旅の結びに、大阪商船による別府・瀬戸内海の旅の楽しみが重ねられていることを確認しておく。

6月5日出発の「北海道・樺太視察団」の締め切り（5月末）が迫る5月15日発行の5月号は「北海道・樺太号」。7月号を「鮮満特輯号」とする旨が6月号「編輯室から」に見えるが、「満鮮周遊記念号」は出発間際の8月号となった。表紙には奉天・北陵の隆恩門と象の石像がデザインされている。

「峡谷と湖水」「海・海・海」「名古屋鉄道局キャンプ村」等、夏の行楽を意識した記事が続いたところで、「満鮮特輯篇」が用意されている。「満鮮の天地へ」（XYZ）、2節めでは朝鮮各地の紹介。釜山、慶州、京城、平壌、金剛山、新義州と続く。たとえば「平壌」においては、「平壌の昔を記述することは朝鮮開国三千年の歴史を語ることである。それほど平壌は朝鮮建国神話の舞台に現はれる名高い都市である。白帆島影にかゝる大同の流れ　城頭に超然たる牡丹、乙密の翠巒、啻だ見る山紫水明のその天地が、今はた我等に何を物語るであらうか」。4節めでは満洲へとはいる。「鴨緑江を渡り切れば、そこはもう南満の広漠たる天地である　満洲と云へば多くの人はすぐ馬賊を聯想し　だらしのない支那の軍隊を想ひ　一概に満洲はこはい所、無味荒寥な所、冬は寒く夏は大変暑いと想像してゐるがどうしてどうして現在の満洲は交通機関も整ひ随所に日本内地以上の文化都市ができ、警備に必要な日本軍隊も駐屯しいろいろの産業が発達しつゝあるのだから馬賊などの居やう筈がない。尤も普通の強盗泥棒の類なら東京や大阪や名古屋のまん中にもある様に、決して驚くには足らないのである。【略】そこへ行くと満蒙の自然は大きい、太陽が地平線から出て地平線に入る。一望千里の豊かな陸の海である。この大平原から吾々が朝夕満洲のものとは知らずに口に入れる豆腐や味噌の原料たる大豆が世界の産額の七割に当る三千七百萬石を筆頭に、粟三千萬石高粱三千六百萬石その他小麦、麻、煙草、野菜、果物など何でもできる。米は二百萬石まだまだ増加の趨勢にある。山からは鉄、石炭木材が殆んど無尽蔵に産出し、この豊富な原料と滅法安い労力を利用して、年々製油、製粉、醸造、製糖、製紙、紡績、機械等色々の工業が続々として起り、従て資本家の欲する條件は全部満蒙に於て始めて具備されてゐると云ふ事ができるのである」。

3節めに戻って結びを見れば、「一頃不逞鮮人といふ忌はしい声が伝へられたが千八百余萬人の中には十人や二十人不逞のものがある事は内地人の中にも極悪非道の輩が絶えないのと同様ではないか。鮮人を見ればどれもこれも不逞な乱暴者と見るのは本当の朝鮮なり朝鮮人を理解してゐないからである。今や朝鮮は日本の一部であり鮮人は立派に日本人たる以上、その国民同志がお互に疑惑の眼を持てゐては、結局日本国民として固い結束はできない。従つてかういふ団体旅行の機会に是非一度は朝鮮の土を踏んで真の朝鮮を知り、洋々たる前途に活きる新興の意気に燃ゆる朝鮮人を可愛がつて真の日鮮融和を図るのは日本国民としての義務だとも云ひ得るのである」とある。もちろん今日からすれば、侵略者の勝手な弁なのであるが、それでもそこに朝鮮の歴史文化が視野に入れられていることを確認できる。対して、満洲を見渡した時、描かれるのは農産物、鉱物資源、そして「滅法安い労力を利用」した生産物諸々。まさに植民地として農業、工業、鉱業を生み出す場としてしか大地は像を結ばないのである。

3 『旅』1932年4月号

満州事変から半年、『旅』1932年4月号に満洲からの記事が載る。近藤義長「銃後をたづねて—満鉄従業員美談」である。「事変勃発以来此処に有半歳を過ぐ。その間皇軍勇士が酷寒は零下何十度もの雪の曠野の真つ只中に、砲煙弾雨の下にあつて如何に多大の犠牲を払ひつゝあるかは今更此処に絮説する迄もないだらう。／然し更にその上にも、軍の誘導となり、修繕班となり、或は他方自身銃を擬して、血みどろになつて第一線に奮闘する満鉄従業員のあることを、諸氏は決して忘れてはならない。／祖国を護る為め決然として兇悪無比、野獣の如き輩を相手として命を投げ出して敢行するその壮烈な行動は、私達鉄道屋には特に深い教へともなるべきものである」と6頁余りにわたり綴られる。ただし、最後の頁の下3分の2は、囲みの別記事となっている。池野みち春の「下

田情緒」。「下田港は　マストの港　マスト増すとて　思ひ増すとて　わしや独り」「登ろ女郎ヶ島　泳ごか沖へ　いゝや柿崎　漕ごよ柿崎　砂浜へ」とロマンスが並ぶ。

この雑誌の基調は「エロ・グロ・ナンセンス」であり、「ロマンス（情話）」である。編輯兼発行人・千葉豊による巻頭言「旅のことづて」が「満洲国成立をみて」として「今後続々観察旅行に出掛けられるであらうと思はれる人々」に呼びかけてはいるものの、事変の空気を伝える近藤義長の記事を異質なものとみるべきであろう。柳田が拒否した「民謡・伝説」という旅の楽しみにあふれる誌面が構成されている。84 頁から、近藤飴ン坊「情緒ゆたかな春の旅―知多半島を海岸に沿うて　札所めぐりと祭礼見物」、「名所よりも旅人をよろこばせるものは孤島情緒である……宿帳は一人旅よりも妻何々と記した連記が多い、島の情緒はこれでお察しをねがふ」というような記事である。次は「ナンセンスをたづねて（三）西新井の大師と荒川の五色桜」（矢島市郎）、106 頁からは「桃太郎発祥地　「鬼無」と「鬼が島」に就て」（磯野光雄）である。112 頁から、「旅のニュース」には風景入通信日附印、駅印の紹介の後、台湾でもこの年の元日から開始された風景入通信日附印の紹介、さらには朝鮮でも前年秋から開始されているが、入手困難なので読者の蒐印に期待する旨が記されている。126 頁から、「歌の国　東北行脚（二）」西峯常美。「民謡・伝説」は、「居ながら」にして各地をたずねることを可能にする。巌谷小波「澎湖の一日」は、「伝説の上では、浦島が遊んだ竜宮はこゝであると云はれ」と書き起こす。台湾は「内地」の物語の厚み、広がりの連続するところとして描かれる。

巻末には台湾総督府交通局鉄道部の広告（全面）、朝鮮総督府鉄道局の広告（全面）、大阪商船の広告「満蒙へ」（全面）、裏表紙が満鉄鮮満案内所の広告（全面）である。これら広告主は毎号ほぼ固定されている。ただし、大阪商船が「満蒙」に限定した広告を出しているのは、新造船うすりい丸を就航させ「大連航路大改善」が 4 月 1 日に行われるこの号が珍しい例で、前年 7 月号の、あめりか丸による「第三回　日支周遊」以来のもの。多くは別府、四国、紀州を中心とする航路の広告である。

「第三回　日支周遊」について『旅』にその紀行を確認することはできない。ただし、大阪商船は自身の広報誌『海』を刊行していた。

4　大阪商船株式会社『海』

『海』という雑誌、裏表紙は 4 色刷りの大丸の広告、表紙見返しの高島屋、裏表紙見返しの満鉄鮮満案内所の広告は 2 色刷りである。

内海航路各船のスタンプが紹介されているのは 1933 年 7 月の 35 号。すぐ上の記事（「南国の旅」）のむすびは、「伝説とローマンス、夢を現実に味はひたい方は琉球へ御出かけ下さい。月五回沖縄直行の台南丸台中丸が神戸を出てゐます。三等十円、二等二六円、一等三九円」。その隣は亀の井自動車株式会社の広告。ボディコピーには「女車掌の名勝解説は天下一品」。1927 年に開始された女車掌の「語り」は既にバスの進行速度までを計算に入れた七五調に整えられている〔野村・2011〕。風景の「語り」は「韻文」として暗誦されてゆく。36 年 6 月の 57 号、「民謡　瀬戸内海」は白鳥省吾の作。37 年 1 月の 64 号、佐藤春夫「紀南の冬」は牟婁の徐福伝説に触れてもいる。スタンプ蒐集、「民謡・伝説」。この雑誌もやはり当時の趣味とともにある。

*

満洲国の誕生と、時をほぼ同じくして大阪商船では、うすりい丸を就航させていた。1933 年 4 月の 34 号に加藤保敏「日満連絡船」は「満洲へ満洲へ、流れ込む人の群れ、今世を挙げての満蒙熱時代だ。流行病の様に、満蒙が国民の頭に滲み込んでしまつてゐる。二日目毎に殺到する人の群、O・S・Kの連絡船は要するにその押しよせる人の群の足なのだ。足巾の延長である。その足として新装の美しい処女、うすりい丸を提供して呉れたのだ。就航後すでに近く丸一年になるがこの短時日にうすりい丸の船名を大連人士にとつて忘れられないものにしてゐる。うすりい丸が就航して以来、満洲に遊んだ知名士は少くない」と述べている。

1932 年 4 月の 30 号、巻頭は「四條赤藍白黒満地黄旗、へんぽんとして春風に翻るところ、大満洲国は颯爽と誕生した」に始まる「うすりい丸画報」である。続いて「満洲旅行余談」（大阪商大教授　松崎壽）、「大連と馬車」（丹波乙吉）、その後には「夢の国ベネスエラ」（加藤實）、「ブラジル移民活躍の近況」（大阪朝日新聞記者　鳥居孝一）、「ケープ・タウンの話」（田島正雄）、「日華周遊船は語る（二）」（山崎南海雄）などの記事が並ぶが、広告は前述に加えて、三菱倉庫株式会社、

三菱造船株式会社、そして、高松のタマモホテル（玉藻温泉）、道後温泉の旅館・ホテル、亀の井ホテルなどの別府温泉の旅館・ホテル、紀州勝浦の旅館・ホテルである。北尾鐐之助『近畿景観第四編』（1933 年・創元社）を開けば、紀州の海岸にも「マリンガール」による風景の語りを確認できる。

30 号巻末には「男女中等学校生徒」を対象として原稿用紙 5 枚以内の懸賞募集がある。

「懸賞募集「瀬戸内海」に就いて　霊峰富士の嶺とともに瀬戸内海の風光は我が日本が世界に誇り得る最大なものであります。我が「海」誌は、次号を「瀬戸内海特輯」とし、広く、此れが紹介を為す事と致しました。就いては、左記の規定に依り全国の男女中等学校生徒諸君から瀬戸内海に関する、論文、紀行、伝説を懸賞募集して、誌面を飾りたいと思ひます。奮つて応募下さい」。

「新国家」や「日華周遊」、南米への移民、と表裏をなす国内の船旅には、「伝説」が風景の焦点として用意されている。『海』には、1933 年 10 月の 36 号に大山克太郎「鬼ヶ島探訪」、36 年 1 月の 52 号に矢崎千代二「鬼ケ島研究」、同年 12 月の 63 号に六笠陸三「鬼ヶ島―高松の沖に桃太郎が征伐した鬼ヶ島がある―」などの記事が見える。柳田国男の「昔話・伝説研究」の対岸で、植民地への輸送を支える大阪商船は、瀬戸内の風景を桃太郎伝説で描いていたのだった。なお、高松の桃太郎伝説の成立については、齊藤純の考察がある〔齊藤・2000〕。

*

1937 年 7 月の 70 号には、ＪＯＢＫ・子供サークル・6 月 5 日放送台本「鬼ヶ島旅行記」が掲載されている。夜もなかなか賑やかな大阪の港を高松行きの船が出帆したのは午後 8 時すぎ。翌朝、本島を離れた後の部分を引用しよう。

「マリンガール　只今、船は本島を始め、沢山の島々にさよーならを致しまして、鬼が島へと向ひます。坊ちやん、嬢ちやん、お待ちかねの鬼ヶ島はこの船の左手遠くかすんで近づいて居ります。手前の島が女木島で、その隣りが男木島ですこの二つを合せて雌雄島と呼んで居ります。お伽ばなしに名高い桃太郎の鬼ヶ島が、こゝだと云ひ伝へられて居りまして、女木島の頂上近くには、長さ四丁に余る大きな洞窟があります。昔この辺りの島々を根拠地としました海賊どもが、住家としてゐたのでせうか、洞窟の中には、幾つもの部屋があり、堅い岩石を穿つたトンネルで互に連絡がとれて居ります。只今では、この雌雄島には人口八百、戸数三百を数へて居ります。では皆様、そろそろ御上陸の御用意をお願ひ申ます。／美代　まあ人が住んでるの？（この料白(ママ)は、戸数三百云々に続いて始る）／文夫　さうだつてね。／美代　鬼ぢやないでせうね。／文夫　当り前さ」。

1937 年に大阪商船は、土曜夜、祭日の前夜、20 時 20 分に大阪天保山、22 時 20 分に神戸港中突堤、出帆の「瀬戸内海国立公園巡遊船」を運行していた（『海』37 年 4 月・67 号「春を讃えて　瀬戸内海遊覧船」）。コースとしては笠島から本島に上陸後、城山に上って海賊城趾、法然上人御流謫の専稱寺、遠見山の展望台、塩飽勤番所に寄った後、ジョケンボで小憩、泊から乗船して、鬼ヶ島へと向かうことになっているのだが、この記事の中の小学生たちは本島には上陸せず、「船の事務長さん」の説明を受けている。鬼ヶ島では「案内人」に従って洞窟などを見物し、美しい瀬戸内海の景色を楽しむ。67 号「船の旅の相談欄」には、「船賃　三等　六円、二等　一二円、一等　一八円」とある。同じ頁の「近海」欄を見ると、「神戸―大連」が、3 等で 19 円、通用期間 90 日の往復切符は復路が 2 割引とのことである。小学生 2 名が両親と鬼ヶ島に行って食事も含め 18 円。大人が 1 名が大連まで行くよりは 1 円ばかり安い。

暗誦された「一つの型に囚われた」言葉によって名所の風景を享受する旅を柳田は否定していたのだが、ここ高松の桃太郎伝説の周辺にも「マリンガール」の「語り」が、そして「案内人」の「語り」が、やはり存在していたのである。

5 『旅』と満洲

『旅』1929 年 4 月号には 5 月 11 日東京出発の「鮮満視察団募集」の広告がある。主催は日本旅行会、後援が日本旅行協会、朝鮮総督府鉄道局、南満洲鉄道株式会社。同年 9 月号には 10 月 6 日東京出発の「鮮満視察団募集」の広告。主催は日本旅行協会、後援が南満州鉄道株式会社東京鮮満案内所と大阪商船株式会社。

1 泊 2 日の「行楽」に代表される内地への旅を志向する旅行協会の会員に対し、外地の魅惑を現実のものとさせようとするかのごとく、雑誌の広告効果が高い場所には、満鉄鮮満案内所、台湾総督府交通局鉄道部、朝鮮総督府鉄道局の広告が掲載され続ける。だが、記事そのものに外地への想

像力は反映していない。1931 年夏の誌面、北海道、樺太を除けば、外地の記事はあまり見られない。大陸の情勢が動いている頃も、1931 年 10 月号に「大鍾乳洞蜋龍窟—朝鮮における大発見」（高松健太郎）、「時は今　最も好い台湾の旅」（丘方子）、12 月「上海を語る」（村松梢風）、「氷雪に埋もれる　朝鮮の懐しい温泉宿」（青木繁男）、あたりが見られるくらいである。

1932 年に入り、1 月号では、「新春温突雑筆」（青木繁男）、「満洲事変遺聞　血染の伝令美談」（安藤徳器）、「温突夜話　珍らしき朝鮮風俗」（岡田竹雲）、が大陸関係の記事である。「正月の地方色」（司馬次郎）、「冬の秋田の地方色」（伊藤忠作）は正月行事を描いた文章。「炉辺語り草」（森春水）、ひとつめの話は所謂「水蜘蛛」の話型の世間話。「奄美大島の伝説—カンテメの恋・馬に蹴られて死んだ男の話」（村井渓水）、「巨人と童子の伝説」（小森盛）、「旅と聚集味」（鎮目桃泉）。基本的には内地の「民謡・伝説」によって各地を描いている。

同年 2 月号、平山蘆江「満洲談片」は満洲を一巡してきての講演録である。竹内白翳「放浪者の手記」も満洲関係記事。藤堂太刀雄「スタムプを語る　南満の駅印」は、前年 12 月号に「駅印物語」を寄せた蒐印家が満洲まで守備範囲を広げた文章である。31 年 12 月 10 日以降、南満 15 駅で駅印が置かれているようである。「旅の聚集味（二）」（鎮目桃泉）などと合わせ、当時の蒐集趣味の高まりが感じられる。平野龍之介「趣味を追ふ　名勝スタンプ瞥見」。内地、朝鮮、台湾の各局は郵便で依頼すれば押印して返送してくれるが、1931 年 4 月に押印を開始した満洲の郵便局は直接窓口に差し出した物でなければ押印してもらえない、という。遼陽局の意匠は白塔。奉天局の意匠は隆恩門と象の石像、雑誌『旅路』の表紙にも描かれていた北陵である（日本大学文理学部資料館が所蔵する『昭和九年度満洲産業建設学徒研究団　参加学生日記』（手稿本）には、この風景通信日附印が捺されており、同館編集・発行の『展示図録　現された「満洲国」—〈満蒙〉影写の多様性と受容—』（2015）に確認できる）。この後の記事は「東国三社詣で」木村春樹。その他、「河童及その伝説」（大木及助）など、やはり「民謡・伝説」の香りが強い。なお、満洲で日附印の押捺が開始された旨の記事は 1931 年 6 月号に見える。

1 月号で満洲事変を憂えていた巻頭言「旅のことづて」も 3 月号では話題を「駅の記念スタンプ」とする。この後も近藤義長執筆の記事を中心に、朝鮮、満洲のスタンプの紹介がなされていく。朝鮮、満洲についての記事を増やしつつ、軍国美談も時に織り込みながら、スタンプ蒐集趣味と「民謡・伝説」もつ旅の想像力によって、「居ながら」の旅を味わっていたのが、1932 年の『旅』という雑誌であると言ってよいだろう。そして、スタンプを媒介とするこの雑誌の想像力は、半島・大陸へと広げられたのである。白地図の上に路線を拡大してゆく興奮があり、スタンプによって手に入れられる風景があり、「居ながら」の鉄道の旅は、未知の大地を自分のものとしていく静かな欲望とともにあったはずである。

6　満洲の風景

時期は溯ってしまうのだが、1920 年代に満鉄鉄道部旅客課が刊行していた雑誌『平原』を視野に入れておきたい。第 1 号（1922 年 10 月）の「霜葉懸千仞」、9 月中旬に安奉線に早めの紅葉狩りに出た記事である。記事の後半を引用する。「南攻駅の付近から、柳揚のオツトリと臨き込む細河の畔りに添ふて汽車は行く事暫し、今迄山をなしてゐた車窓の景が、愕然として絶壁となり、突如として懸崖の麓を走る。老松は奇巌の間に蟠踞し、霜にあいた蔦は砥の如き面に炎える。紅を点し、丹を彩り、緑りを懸け、藍を結ぶ。断巌の削立する事数十丈。是れを台と言ふ箱根細工の台だらう。／「木曽桟道の寝覚め床を知つてるか。細河にはあれ程の技工はないが、普済寺が孤立無援の形ちで飄々乎として小丘にあつて中々雅致があつて似てゐる。是れを前景にして岌乎として立つ長牆の絶景を背景にすると、素的にいゝ。案内記には耶馬渓の感があると言ふてあるが、耶馬渓はちと聞えんよ。寧ろ俺は秩父赤壁の長瀞に近似すると言ひ度い、河底の其処此処に蟠踞重々する白い岩なぞ、全く長瀞だ。景は大きいが」「なあに屏風のような岩があり、潺湲と流るゝ河があれば、似るも糞もない耶馬渓さ。貴様が其処を年増女と景と形容したのと同じ筆法だ。尤も貴様のは下びてるが…」／「処で、俺は橋頭の駅長に其処迄何哩ありますかと尋ねたら、約二哩と答へた。そして自分の家の庭でも荒らされた様に不風流な支那人を嘆じて居たよ。あゝ言ふ景勝地の駅長になると、自分が特に手入れをして居る様に、其の景と共に生きてゐるんだね。其処へ行くとまだ新任と見ゑて、鳳凰城の駅長はあの名山とは別々に離れて息をしてゐるが…、昔しはもつと松が沢山生えてゐて、もつともつと風致がよかつた。その松を切り倒して撫順の炭鉱の坑木に売り飛ばしてしまつた

んだとさ。切角の珍木神木も一枚の札と引きかえられて、今頃その魂は支那人の胃袋からも吐き出されて、高粱を実らせる土塊となり、その殻は地下何千尺の暗所に埋れて、是れでも昔しは旅人泣かした事もあるなんて繰言を言つてるんだらうぜ。橋頭の駅長が坑木にされたと語る時、腹の中では玉の如き涙をこぼしてゐたと、俺は想像するね」／客の弥次が壁に倚り乍ら煙草をくゆらしてゐるのに、珍田は寝そべり乍ら、橋頭の駅長を泣かして、その泣いた事を勝手に想像して、青葉の紅葉狩りの旅行談に花を咲かせてる」。

*

ここに登場する日本人は、寝覚の床や耶馬渓といった日本の名勝を引用しながら大陸の風景を味わっている。秩父赤壁に至っては、赤壁がもともと中国にあったことを忘れてでもいるかのように見立ての焦点として名前を出されている。歌枕をたどる風景観と侵略者の横暴な態度との重なりによって、「一つの型に囚われた」風景が描かれるのみとなっているといってよいだろう。

では、日本人は植民地満洲で何を見ていたのだろうか。

7 『海』と満洲

再び『海』1932 年 4 月の 30 号から、「日華周遊船は語る（二）」（山崎南海雄）を見てみよう。見出しとされていた部分には《　》を付す。先ほど触れた『旅』1931 年 7 月号の大阪商船の広告が取り上げていた第 3 回日支周遊の旅である。

《上海風景》1931 年 8 月 14 日亜米利加丸は揚子江を遡航している。人口約 3 百萬、貿易年額 8 億両の上海の街を描く。《詩の杭州》16 日午前 7 時 10 分、超満員の「快車」の 1、2 等は「日華周遊団専用」にされている。「古来詩に歌に文に邦人に知られた杭州西湖」に遊ぶ。黄包車【野村注・人力車】で訪れた清漣寺では「奇蹟的な伝説」についての紹介もある。《水郷蘇州》17 日は「今日は滬寧線の汽車が、二百の周遊団員を乗せて、江南の大平原を走つて行く」。蘇州の歴史を振り返る。画舫【野村注・遊覧船】4 隻で訪れた虎邱では地名由来の伝説を「支那らしい伝説である」と評す。「説教石」「試剣石」「剣池」など伝説の紹介が続く。「楓橋夜泊」の楓橋がただの石橋であったことにも「懐かしく、親しまれ」る感を抱いている。《台風来》台風接近により大連直行も検討されたが、台風は日本海に去る。《美の青島》19 日「白人のみ住む、西洋の市街そのものであつた」と亜米利加丸は青島に入港する。独逸の租借以来の開発の歴史から日本の治下への歴史を記し、50 台の自動車で青島神社へ向かう途中では前夜の支那人暴徒による青島国粋会本部襲撃などが記されている。その後、屠殺場の見学、日独戦の舞台となった砲台などに寄った後、大日本麦酒会社の工場を見学、のどを潤す。

《旅順の戦跡》「揚子江大洪水の避難民は南京に殺到して、人心険悪暴動化の惧あり、との報は周遊団南京視察の予定を変更せざるを得ざらしめた。其結果が旅順訪問となつて、亜米利加丸は八月二十日午前八時廿分、大連埠頭に繋留された」。林檎畑高粱畑をながめつつ 50 余台の自動車で二〇三高地近くに向かう。山頂に上り記念碑の前に立つ。「旅順の戦跡案内者大坪氏は、西峯に立つて当時を語る。日々の案内に焦げた、短軀痩身の大坪氏の顔は熱火と燃え、二百の団員は苦熱を忘れて傾聴した」「自動車は走る。砂塵をあげて午後二時東鶏冠山北堡塁に着いた。／大坪氏は軍刀を抜いて激戦を語る」「私の村からも幾人かの出征兵が殆ど全部戦死した。私は子供心にも当時の石原聯隊長を呪ふ父老の声を聞いた。石原聯隊長だつて決して士卒を殺したくはなかつたであらうが、それも運命であつた。私は今此処に立つて、大坪氏の熱烈な口調と共に迸り出る、当時の戦況を聴いて、胸は迫り、目頭はあつくなつた」。

*

歌枕を味わおうとする風景観はなにも三十一文字や俳諧に限定して作用するものではない。唐詩や史話の周辺にそうした想像力は広げられ、奥行きのある風景が手に入れられてゆく。一方で、租借地や植民地はその風景に厚みを持たない。そして、命を落とした士卒やその家族の思いに寄り添うかのように近代の戦跡が語られる。そこには別種の風景を語る「戦跡案内者」の姿がある。正岡子規が寝覚めの床を訪れた際の雛僧のように〔正岡・1892〕、五十嵐力が平泉を訪れた際の案内僧のように〔五十嵐・1928〕、別府の女車掌のように、白浜のマリンガールのように。そして「瀬戸内海国定公園巡遊船」のマリンガールのように。ちなみに、「富士なんてあんな俗な山」という太宰治が乗るバスには「散文調」の案内しかしない女車掌が姿を見せる〔太宰・1939〕。

佐藤春夫が徐福伝説を紹介していた『海』1937 年 1 月の 64 号に、大木一男「呼倫(ホロン)貝(バイ)

爾(ル)の夢」がある。「蒙古の旅には、海拉爾から温泉(ハロン・アルシャン)へ総局経営のバスで往復するのが面白いだろう。／海拉爾ー温泉／バス所要時間　十一時間／夏期のみ毎三日一往復／料金十七円五十銭／温泉(ハロン・アルシャン)については詳記を省くが、正確に言ふと、靈(ハルヒ)なる・熱(ハロン)き・泉(アルジャン)（蒙古語）で、神秘と伝説にみちた蒙古稀有の温泉境であり、夏季は湯治者が多い」。遊牧する蒙古人の生活についての描写はあるものの、「伝説にみちた」で片づけられてしまい、その内容には踏み込まれない。

36 年 4 月の 55 号、山下春樹「奉天を語る」は、風景の焦点とされることもあった北陵にすら触れていない。汽車の窓から遼陽の白塔には目を向けている。

「大連を午後十時出発の夜汽車の寝台に納まり目覚めた時、車は既う遼陽を走つてゐた。右手に有名な白塔が目につく。八菱形の十六層塔である。／「白塔は柳がくれの旅なりし」と誰かが詠んだ楊柳の樹かげに萬石蒼茫色褪せてゐる。／沿道は見渡す限り広漠たる大平原、只目につくはよく手入の届いた青畠である。以前は背よりも高い高粱が作られたが今は稲や麦、豆、粟の類が植えられてゐる。／成程満洲は広い。此の手入の出来た畠に民家が少ないのは人口稀薄を物語るのだ。然し思つた程殺風景ではない「萬目蕭條荒寥たる平原に目につくは只カーキー色の土の色丈だ」と云はれてゐたが一向そうした処は見当らない――などと考へてゐる間に日露戦争の古跡沙河や蘇家屯や渾河を過ぎて午前八時廿五分奉天につく。／賑かなプラツトホーム、沢山の出迎へと乗降客、赤文字入りの広告屋ソツクリの満人赤帽は袖無しだ。此は画になる。袖無に日本赤帽と同じ帽子だ珍妙なものである。／駅前に出た。広い駅には、数十台の自動車と馬車、洋車が両側にキチンと並ぶ宿屋の客引き迄も整列してゐる。よく訓練されてゐる。奉天駅は、大満洲第一の宏大な停車場と云つた。駅頭を飾るにふさはしく左右相対峙して天空に聳えたつ建物、右は奉天鉄道事務所と、満鉄地方事務所。左は南陽電気会社、此と並んでビヤホール、旅館、ツーリストビユロー等々」。この後、バスで向かった先は奉天神社、天照皇大神と明治大帝とが合祀されている。宵には五彩の電光に彩られた歓楽街へ繰り出し、春日町、青葉町、住吉町と渡り歩く。文章の結びは挑発的なドレスを着た満人も踊る夢心地のダンスホールである。文末には枠で括られた「日満連絡船」の広告、「神戸ー大連間　三等　十九円」。次の頁は「瀬戸内海国立公園巡遊船」の広告。この年は女木島を目的地とするのではなく、多度津航路の定期船を応用した運航だった。

1936 年 8 月の 59 号、小島修三「新京・吉林・哈爾濱」も覗いておこう。「新興の気に満つる新京」に続く「哈爾濱」の項から引用する。「哈爾濱は水運の点から見ると「平原の港」といふことが出来る。それかあらぬか哈爾濱は以前哈爾賓と書いたものであるが此頃は一切哈爾濱と濱の字が用いられ居る。／哈爾濱には、夜十時を過ぎて汽車を降りたが、うるさく附き纏ふホテルのポーターをまくつもりで飛び乗つた自動車の運転手が露人であつた。／「君日本語知つてゐますか」／と尋ねたが金聾に等しい。さて困つた、降りやうかとも思つたが運転手先生頗る自若たるもので一向に車を動かさうとせぬ　おかしいと思つて居ると之が旅館の客引兼業自動車である。即ち吾輩の乗つて居ることが分るや否やポーター連が押しかけて来て、緑屋ホテルがよろしいの〇〇ホテルにお出なさいのといふ。／一頭立ての馬車は大連、奉天、新京以来のおなじみでうす穢い満人馭者には感服しないが哈爾濱のは稍々綺麗な露人が馭者であり、たまに二頭立のものもあるので乗つて見る気にもなつた」。

*

土地の厚みを感じようとせず、農業、鉱業等、産業面についての欲望をむき出しにし、新たな町並みを作り上げてゆく日本人が、満洲の風景として感じ取っていたものは有力な輸送手段であった馬車だったといえるのかもしれない。

8　風景としての馬車、荷馬車

夏目漱石が満洲、朝鮮を旅行したのは、1909 年（明治 42 年）9 月 2 日から 10　月 14 日までである。『東京朝日新聞』に掲載された「満韓ところどころ」（『漱石全集』第 8 巻）から、大連に着いた場面を引用する。「是公」とは、南満州鉄道株式会社の長官である中村是公。大学予備門の頃の友人である。「佐治さん」は商船会社の事務長。「沼田さん」は是公の秘書。

「余は欄干に頬杖を突きながら、成程此奴は何うしたものかな、一先是公の家へ行つて宿を聞いて、それから其宿へ移る事にでもするかなと思つてるうちに、船は鷹揚にかの汚ならしいクーリー団の前に横付になつて止まつた。止まるや否や、クーリー団は、怒つた蜂の巣の様に、急に鳴動し

始めた。其鳴動の突然なのには、一寸膽力を奪はれたが、【略】矢つ張り頬杖を突いて河岸の上の混戦を眺めてゐた。すると佐治さんが来て、夏目さん何処へ御出になりますと聞いて呉れた。【略】ぢやホテルの馬車でと沼田さんが佐治さんに話してゐる。河岸の上を見ると、成程馬車が並んでゐた。力車も沢山ある、所が力車はみんな鳴動連が引くので、内地のに比べると甚だ景気が好くない。馬車の大部分も亦鳴動連によつて、御せられてゐる様子である。従つて何れも鳴動流に汚ないもの許であつた。ことに馬車に至つては、其昔日露戦争の当時、露助が大連を引上る際に、此儘日本人に引渡すのは残念だと云ふので、御叮嚀に穴を掘つて、土の中に埋めて行つたのを、チヤンが土の臭を嗅いで歩いて、とうとう嗅ぎ中てゝ、一つ掘つては鳴動させ、二つ掘つては鳴動させ、とうとう大連を縦横十文字に鳴動させる迄に掘り尽したと云ふ評判のある、――評判だから、本当の事は分らないが、此評判があらゆる評判のうちで尤も巧妙なものと、誰しも認めざるを得ない程の泥だらけの馬車である」。馬車についての風説は、旅順の場面にも引かれる。「佐藤」は旅順の警視総長である佐藤友熊。予備門に入る準備のために通っていた駿河台の成立学舎の頃からの友人である。「今迄は白馬を着けた佐藤の馬車に澄まして乗つてゐたが、山へ掛るや否や、例の泥だらけの掘出しものゝ中へ放り込まれて仕舞つた」。さらに奉天でも、「停車場には宿屋の馬車が迎へに来てゐた。矢張り泥の中から掘出して、炎天で乾かした様に色が変つてゐる」。北陵にも行っているようであるが、老人が馬車に轢かれた場面を漱石は描くのみである。

夏目漱石の文章が意外に乱暴なのは、相手を大陸の人々とした時に限ったことではないが、「満韓ところどころ」では、侮蔑したような表現、悪意を感じざるをえない風説の引用が気になるはずだ。あれこれ考えてもみたいが、ここでは風景の焦点である馬車を追うことにする。

先ほど紹介した 1932 年 4 月の『海』30 号、松崎壽「満洲旅行余談」に続く丹波乙吉「大連と馬車」を見てみよう。「ロシヤ租借当時の遺物であるこの馬車は他では見られないスマートな馬車である。実際馬車は大連には無くてはならぬ交通機関であると共に吾々旅行者にとつて何んともいへぬ嬉しい存在である。二頭の小馬が轍の音を響かせながらアカシヤの影を縫つてゆく様は支那には全然にふさわしからぬ景色である」。

『旅』ではどうだろうか。1933 年 2 月号に近藤義長「スタムプに添へて」は、新国家の首都の景色を綴りながら新京駅のスタンプの図柄を説く。「意匠説明―新京西公園に、新京及それ以北特有の露西亜式馬具をつけた馬車を表はせしもの」。本文では「静かな美はしき街路樹の街の感を思はせて、その下をこゝ特有のドガーと称する馬具をつけた馬車の馳けゆくなど、まことに珍奇な絵画的情景をも含ませて、忘れることの出来ない印象を残させるものである」という。

1933 年 11 月号の「駅スタムプ展覧会」に紹介される満鉄本線開原駅スタンプは「意匠―大豆の屯積に荷役馬車、駅名をかこむものは豆の外観と、日附は殻を脱した大豆を表はす」。

*

駅印に描かれる大豆と馬車。「居ながら」の旅をする読者の前に、植民地満洲の風景が表象される。伝説が風景を描くことはなかった。

9　むすび

『旅』1932 年 2 月号「駅スタムプ展覧会」にある遠野駅の印は「黒炭年産三十万俵」を、積み上げた俵によってデザインしていた。遠野にも伝説はあったはずなのだが、伝説は風景とされていない。それどころか、1970 年代、ディスカバージャパンキャンペーンの駅スタンプを見ても、遠野は焦点を定められていないのである。ところが、80 年代の風景日附印あたりから、カッパをデザインすることにより強い印象を与えられるようになっている。白砂青松の地でもなく、奇巌奇勝の地でもない遠野は、カッパを手に入れることにより「歌枕」的風景を獲得したのである。

ただし、私たちが今日、遠野の風景を描けるようになったのか、大きな疑問が存在する。伝承に正伝を作ること、キャラクターで土地を描くことが、その土地を尊重することにはならないはずだ。

柳田の訴えた風景、それは人々の生活を、生活の歴史を知ることであった。「木思石語」に導かれる『旅と伝説』という雑誌が、視野をほぼ日本に限定していくのは当然だったのかもしれない。満洲に生活する人々の生活の歴史は、植民地支配する日本人の描きたいものではなかった。

日本史の教科書に「支那事変」という言葉はない。半世紀以上昔の日本は、今日とは異なった暗黒の社会、軍靴の響く笑顔のない社会であったかのように想起されることも多い。だが、少なくとも旅行雑誌を眺める限り、世の中は「居ながら」の旅行を楽しみ、エロ、グロ、ナンセンスといっ

た言葉とともに、旅の「ローマンス」に浸っていたといえる。植民地へ人々を運ぶ航路の隣に「桃太郎伝説」があり、多くの軍艦が往来する瀬戸内海で土曜から日曜の行楽を楽しんでいたのである。植民地支配や他国への侵略を、過去の政治家の所業として自分達の今日と断絶させてしまっているとしたら、柳田国男の「昔話・伝説」研究が否定した「民謡・伝説」「神話・伝説」の享受を思い出すことも大切な意味を持ってくるはずである。

参考文献

五十嵐力「五串の滝と光堂」『五十嵐力集』第3巻「遠近」1928、酒井雄文堂

齊藤純「高松の桃太郎伝説について―橋本仙太郎の考証活動に関する資料―」『世間話研究』第 10 号、2000

太宰治『富嶽百景』1939（『太宰治全集』第3巻、1998、筑摩書房）

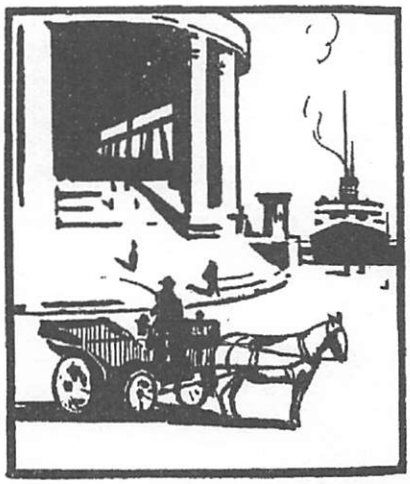
野村典彦『鉄道と旅する身体の近代』2011、青弓社

正岡子規「かけはしの記」1892（『子規全集』第13巻、1972、講談社）

資料1『旅』1934年4月号に掲載された鬼無駅のスタンプ。名産の桃と盆栽、そして桃太郎伝説をデザインしている。

資料3『旅』1932年2月号、平野龍之介「趣味を追ふ　名勝スタンプ瞥見」が紹介する遼陽局と奉天局の風景通信日附印。

資料2『海』1937年7月、「鬼ヶ島旅行記」。



資料4『海』1932年4月、丹波乙吉「大連と馬車」。

講演

乱読の癖：明治大正のエリートと子供時代の読書経験

メレック・オータバシ

1　プロジェクト「子供の共和国：近代の世界児童文学、1870-1930」

皆さん、こんにちは。ご出席誠にありがとうございます。石井先生のご招待のおかげで、今回東京学芸大学にて発表させていただくことになりました。先生、いつものご援助、誠にありがとうございます。

簡単な自己紹介をしましょう。専門は比較文学であり、日本近代文学をテーマにした研究がおおくあります。日本語を勉強し始めたのは高校生時代です。只今カナダの大学に勤めていますが、アメリカ人です。今年、1 年間日本に滞在して、研究のための資料を調べています。去年の 9 月に来て、もうすぐ帰国してしまいますが、楽しいひとときでした。

ただ今進めているプロジェクトは「子供の共和国：近代の世界児童文学、1870-1930」です。翻訳の役目を検討しながら、日本、ドイツ、米国／イギリスの児童文学の発展、創出、消費と流布を比較する計画です。今回の発表では、日本の場合に焦点を当てます。もしドイツとイギリスなどのケースに興味がありましたら、最後の問答の時間に是非聞いてください。

なぜ世紀末に惹かれたのかというと、この時期は子ども文化と子ども文学のとくに過渡的な時代でした。児童主義といってもよい子供に対する興味は、国づくりとの関係から生まれてきました。明治時代に入ってから、子どもは初めて国家の将来の大切な自然資源としてみられるようになりました。

図版 1　江戸の子、明治の子（上は長沢蘆雪（1754 ～ 1799）の「唐子睡眠図」、下は渡辺幽香「幼児図」（1893））

この 2 つの絵（図版 1）はその変わりつつある子どもに対しての見方をはっきりに表現してくれます。18 世紀の墨絵の赤ちゃんは、二次元的で、受動的な存在として現れます。可愛いらしい置き物にしか見えないですね。それに比べて、渡辺幽香の油絵は非常に主体性の強い子を描きます。赤ちゃんでありながら欲望のある小さな人間です。与えられた玩具を無視して、逃げない限りでは、自分の好きな遊びを発見しています。見えづらいかもしれないですが、赤とんぼを捕まえています。

文明開化が、子供の生活にも大きい変化を起こしたわけです。まずは、明治初期に設立された学校制度です。この版画（図版 2）が描写するように、学校の様子と生活が大いに変化し、授業を受ける子どもも増えてきました。明治維新の時、識字率は 30 %でしたが、1930 年までに 60 %を超えました。就学率も、10 ～ 20 %からほぼ 100 %に増加しました。国語の授業に伴って、標準語運動も子どもたちに強い影響をあたえました。地域の方言がだんだん共通語に切り替えられていきましたし、外国語も科目として導入されます。西洋から輸入された児童心理学という新しい分野に導かれた教育方針も増えてきました。

図版 2　近世、近代の学校（上は作者不詳「寺子供幼遊び」（慶応頃の様子を明治期になって描いたものと思われる）、下は小林永濯「明治時代の授業風景の図」『小学入門教授図解　第 7』）

それに、同時代のマスコミブームを忘れてはいけません。大人向けだけでなく、子どもたちを意識する出版界が次第に現れてきました。明治期の印刷物は技術の進行の証拠でもありました。木版刷はやがて活字に取り替えられてゆき、新聞や雑誌などの新しい体制が増殖しました。明治 30 年代になると、子どもと家庭向けの文学や投稿雑誌、文学全集や読本シリーズが普通に手に入れるような読み物になります。前代と比べると、翻訳と翻案が多くなりました。純文学に携わりながら、翻訳に力を入れる作家も少なくなかったのです。言うまでもなく、児童主義の傾向が強い時代では、

児童文学でもこの作家達は注目を浴びます。20 世紀になると、子ども向けの出版界がますます拡大していき、大衆化されます。1930 年代にはいると、帝国主義と軍国主義が社会のあらゆる分野に入り込んでしまいますので、明治と大正の国際的な国家主義ともいえる雰囲気は消えていきます。ヨーロッパでもこの現象がみられます。児童文学への影響は著しくて、外国への態度が本格的に変わります。私がテーマにしている「子どもの共和国」は完全的に戦争に飲み込まれてしまうことになります。

図版 3　明治・大正時代の読む子ども（上は赤松麟作「読書」(1898)、下は亀高文子「食後」(1916)）

時代区分を行っても、児童文学と翻訳はまだまだ広いトピックですね。少し絞ってから進みましょう。ご覧のように(図版 3)、読者としての子どもは明治と大正期に意識化されるようになり、画家の対象にもなりました。でも、あの子ども達自身は、こんな新しい読み物をどう思いましたか。文学世界と世界文学との出会いは、どんな夢と概念を生み出しましたのでしょうか。こんな問題を検討しながら、明治と大正生まれのエリート達の自伝や回想記などから、読書経験の思いでを取り出します。記録の中に現れる子どもたちのおかげで、その時代の活発な読書空間が浮き彫りになります。

2　エリート達の自伝や回想記から探る

メモアールはヨーロッパ出身のジャンルですが、影響は広くみられます。日本の場合は、大正時代にブームがありました。急速に変換しつつある近代社会の中に、明治生まれの作家達は、自分の世代の消えていく日常生活などを後代に伝える記録を残したかったと思われます。言うまでもなく、個人的な歴史が語っていますが、時代の空気を表す記録でもあります。自伝は 20 代（学生時代）から始まるものが多いのですが、幼少時代の記憶も残す作家が大正時代から増えてきます。確かに、子供に関する社会的な意識が変わっていくと、幼い頃の経験がもっと深い意味を持つようになります。たとえば 1904 年生まれの堀辰雄は、幼年期のことを書くことにより、「自分の人生の本質のよ

うなものを見いだしたい」と断言しています。
自分の研究のために、こんな回想記を自己の心理を分析するためより、歴史的な価値のある文書として読みたいと思っています。読書が大変重んじられたこの時代に、そんな経験が子供時代の思いでによく出るのは不思議ではありません。見出せる情報は様々です。

・どんなものを、どうやって手に入れた
・読者の好み／内容からの刺激など
・読書活動の状況
・周りの(大)人の態度
・読み物の物質性／品物としての様子

ほとんどが回想して書かれたものですので、子供の無邪気な印象が大人の作家の解釈と混合されて、張り重ねた風になっています。なお、個人的な読書歴のため、読み物に対するの印象は個性的に描写され、合理的な順番では登場しません。年代順などの大人っぽい慣例に従うどころか、読んだ雑誌と本をまるで記憶の流れの一部に物語る作家が多いのです。聞こえてくるこの子ども達の声が、幼い頃の読書経験が大人になった時にどれほど重要だったのかを明らかにします。

Wakamatsu Shizuko 若松賤子(1864-1896)
Koganei Kimiko 小金井喜美子(1871-1956)
Uemura Shôen 上村松園(1875-1949)
Yanagita Kunio 柳田国男 (1875-1962)
Terada Torahiko 寺田寅彦(1878-1935)
Takamura Kôtarô 高村光太郎 (1883-1956)
Kitahara Hakushû 北原白秋 (1885-1942)
Tanizaki Jun' ichirô 谷崎潤一郎(1886-1965)
Orikuchi Shinobu 折口信夫 (1887-1953)
Yoshikawa Eiji 吉川英治 (1892-1962)
Akutagawa Ryûnosuke 芥川龍之介 (1892-1927)
Miyazawa Kenji 宮沢賢治 (1896-1933)
Hori Tatsuo 堀辰雄 (1904-1953)
Dazai Osamu 太宰治 (1909-1948)

図版 4　子ども時代の思い出を書く作家

この表（図版 4）の作家にはみんな子ども時代の記録が残されています。読書経験以外にはいろいろな出来事と経験が書かれているというのも当たり前のことなのですが、予想通りに読書に関連する内容はたっぷりあります。探したのは、

・あらゆる読書経験
・書物／雑誌（原本の由来を問わず）
・学問活動（学校／自習など）
・他のマスコミ／芸術の消費（音楽、映画、芝居など）

についての言及です。
集めると、子ども達の文化生活を生き生きと語ってくれます。先の表に載っている作家達は日本のいたるところで育てれ、階級的にも違いがあります。その上、ご覧のように、世代を隔てています。にもかかわらず、回想記に見る読書経験には、いくつかの共通点が見えてきます。

・子供の雑誌、シリーズ、全集などへのアクセス
・本屋、貸本屋への親しみ、あこがれ

・乱読の癖
・共同活動としての読書
・読んだものを何かの方法で実現する
・個人的な慰め、救いとしての読書
・漢文の音読
・外国語への興味／外国から入ったものに対しての意識

やっぱり、明治 30 年代にはいると、柳田国男みたいに主なアクセスが個人の文庫であった場合は少なくなります。太宰治と寺田寅彦などは自分で買ったり、プレゼントに貰ったりします。雑誌を予約して、送ってもらうことができるようになり、知り合いなどに借りることも多くなります。読み物が比較的に得やすくなるのに伴って、「乱読」が癖になる子も多くみられます。友達の前で詩などを暗唱することが普通であれば、折口信夫のように、学校の運動場で『源氏物語』の議論をする生徒達もいました。頭の中で旅をする子どもは多かったのですが、吉川英治のような想像力の高い子は、仲間達といろいろな場面を演じることが好きでした。内気で寂しい子は、読み物を、現実から逃げ出す方法として使っていました。恵まれた子達は漢文の訓練を受けるのは、当然のことでした。時代遅れに見えても、小金井喜美子や谷崎潤一郎などの作家が子どものときに習ったのは文学的なテキストです。芥川龍之介の文学的な国家主義から北原白秋の「異国主義」まで、子ども時代に接した外国文化などに印象的な思い出が残る作家は少なくありません。外国語に興味を抱いて自習した子どももいました。

3　外国で生まれたものに触れる

日本文学など国家的な読み物の豊かな読書空間の中に生きる子ども達は、普通の生活のなかで、外国で生まれたものにも触れ合うことができました。翻訳や翻案をはじめ、西洋風に作られた雑誌とシリーズもありました。

例えば、『顕才新誌』というのは、堀越修一郎という編集者がアメリカの Harper's Young People に影響されて、明治 10 年に設立した投稿雑誌です。もう一つの例は文庫本です。ドイツの出版者 Reclam が 1867 年に創立した Universal Bibliothek に学んで、1927 年岩波文庫が創立されました。たしかに、翻訳文学の普遍性が、明治と大正の児童文学の増加する多様化を象徴しています。

皆さんはご存知かと思いますが、明治維新後の日本は翻訳を通して 概念の輸入者になり、今でも翻訳文化に寛容さを示す国です。この現象についての学問もかなり進んでいます。前田愛、加藤周一や柄谷行人などの文学者たちが、日本文学史にかなりの影響を及ぼした翻訳文学に関するいくつかの論文を書いています。英米やドイツと違って、翻訳は児童文学研究にも強く意識化されます。

例えば、『児童文学翻訳作品総覧』(大空社)、こんな参照文献は、カナダなどではとてもあり得ない書物です(8 巻もあります！！)。翻訳の思想史が全く違うからです。また、UNIQLO の T-シャツを飾る児童文学イラストレーター Tove Jansson と Leo Lionni のデザインは、日本でこんなに人気になって、アメリカ人としてはびっくりしています。商品化されても、日本のユニークな外国児童文学への興味と好奇心を示します。でも、この明治大正時代にも見える好奇心は、翻訳児童文学研究にどんな意味を持ちますか。

「子どもたちの本には、たしかに民族感情というものがある。けれどもまた、人類の意識もある。だから、それらの本は生まれた土地のことをもちろん愛情こめて描いているが、それと同時に、未知の同胞たちが暮らしている遠い遥かな土地のことをも描いている。それらの本は自分の種族の深い生命を表現している。が、それとともに、そのどれもが、山をこえ、河をこえ、海を渡って、地球の果てまでも友情を求めていく使者である。あらゆる国がその使者を送りだし、あらゆる国がその使者を歓迎する。限りない交歓である。このようにして、物心がつく年頃に、子供たちの世界連邦が誕生するのだ」

有名なフランス人比較文学者ポール・アザールが、1932 年にこの先駆的な本を出版します。あの時代の不安を抑えようとしている、楽観性のある声明書です。影響が強かったため、児童文学の話になると、こういう理想的なイメージが今でも残っています。しかし児童文学とは言っても、子どもそのものではないのです。国際関係は、子どもの間の無邪気な友情に類似したものではありません。

英語で読ませていただきますが、下に訳があります。

- "There is no symmetry in literary interference. A target literature is, more often than not, interfered with by a source literature which completely ignores it."「世界的な文学交換には格差がある。普段は翻訳先文学が、それをまったく無視している翻訳元文学に干渉される」
- Itamar Even-Zohar, "Laws of Literary Interference"「文学的干渉法」
- The "incommensurability" of different cultural traditions.「世界の文化的な伝統はみんな同じ基準で計れない」
- David Damrosch, What is World Literature? 『世界文学とは何か？』
- "Trade imbalance[s]" in the global translation market.「翻訳の世界市場の貿易不均衡」
- Lawrence Venuti, The Translator's Invisibility『目に見えない翻訳家』

このような状況は、近代日本の子ども達にどういう意味があったでしょうか。現代のメディア文化の中では、書物というのはだんだん薄い存在になっています。しかし、明治と大正時代では、メディアとして中心的な役割を果たしていました。明治 30 年代は特に革命的であり、いわゆる「読書国民」があの時代に誕生したといわれています（永嶺重敏）。学校と家庭で読み物を与えられる子ども達はその「国民」の思想的な中心をなします。読書経験を通して、子ども達が国民になってゆくゆえ、児童文学はマスコミとして力があり、社会学者 Benedict Anderson のいう「同時性の観念」(imagined community)を植える影響が与えられます。この「同時性の観念」は、マスコミが国民に与える国家に対する意識です。従って、マスコミは、近代の国づくりに不可欠な材料だと断言しているのです。

4 子どもの時に読んだ本はよみがえってくる

さて、近代日本みたいな翻訳文学の多い国では、子ども達はどのように国際関係を考えていたのでしょうか。自分の国をどのように意識していたのでしょうか。回想記をデータとセットで読むならば、アザールの考える「子供たちの世界連邦」は見えてこないと思います。むしろ、偏っている世界観が特徴です。明治と大正に育てられた子どもたちは、近代日本の独特の「同時性の観念」を持っています。

「外国」というと、欧州のイメージが一番強かったのです。なお、英語は英語で、「イギリス」「アメリカ」など国語として区別していませんでしたし、漢文の練習をしている子どもは、それで中国を連想するものとしては考えていなかったようです。欧州の国々を意識しても、それは希薄な存在で、おとぎの国として考えた子どもが多かったと思います。翻訳物と翻訳でないものを、あまり区別しなかった（できなかった？）ということがあります。翻訳物を自分のものとして意識していた／違和感を感じていなかったのでしょう（ベルヌ、『アラビアンナイト』)。雑誌、全集なども翻案と翻訳混じりの文学を子ども達に提供したので、小さな読者達は気にしていなかったようです。

しかし、時々目の覚めるような翻訳作品と出会います。例えば、寺田寅彦はゲーテの『狐の裁判』を初めて読んだとき、こういう風に説明しています。「可能の世界の限界が急に膨張して爆発してしまったようなものであったに相違ない」。つまり、翻訳のおかげで別の世界を発見したということです。

そして、大人になってから回想記を書く作家は、読書経験を懐かしく思うとともに、国際化を目指していた日本をよく反映していると分かっているようです。この最後のポイントは一番興味深いでしょう。幼年時代の回想記を研究する Richard Coe という学者は、アザールのように、子どもには「国家を超えた」性質が見えてくると議論します。だが、私は Rocio Davis 先生の反論に同意します。時代と地理を超えた性質を探し出そうとすると、大切な歴史性を失ってしまうと思います。

回想記と米国の移民文化を研究している Rocio Davis 先生は、アジア系アメリカ人は第二次世界大戦の後、「幼年回想記を書きながら、自分の主体性を表現として確認しようとしていました」としました。アジア人としてアメリカに育てられると言うのは、個人的な意味だけでなく、いろいろな立場からの文化的な意味があると思われます。

場面が違っても、近代日本にもこういう読み方は効果的であります。読書経験も、この回想記の中に、主体性の基本単位として現れます。谷崎潤一郎は『幼少時代』で、「できれば少年の時にな

るべく第一級品の芸術を見せてもらっておくことである。親たちもまた子供に高級なものを見せても分かるものかとか、もったいないとかいう風に考えず、同じ見せるなら努めて優れたものを見せることである。いったい大人が見て分かるほどのものなら、大概子供に分かるはずなので、分からないと思うのが間違である。またたとい少年の理解を超えているようなものでも、それが一流なものであれば、何かの形で心の奥に跡をとどめ、他日必ずその感銘が蘇生えって来ないはずはない」と述べています。

子どもの時に娯楽として読んだ本などはいつか「よみがえってきます」。どのようによみがってくるか、谷崎ははっきり書いてくれませんが、近代日本の歴史を考える解釈ができると思います。明治大正の翻訳文化の中に育てられた小さな愛読者達が、ある意味でその時代の特別な世界意識を消化して、自分の主体性に吸収しました。外国の味になじんでいたこの少国民は、新しい意味での日本人になりました。その原因となった作品の考察は、これからの課題です。

ご静聴ありがとうございました。ご質問とコメントを御待ちしております。

付記

カナダのサイモンフレーザー大学(Simon Fraser University)のメレック・オータバシ(Melek Ortabasi)さんは、明治学院大学で1年の研修を過ごされた。そこで2015年5月22日、東京学芸大学において講演をお願いした。テープ起こしをしてくださった矢部敦子さんのお力添えに感謝したい。なお、スライドはほかにも多くあったが、紙幅の関係で割愛したことをお断りしておく。(石井)

講演

喪家のノリパン（遊びの舞台）と送別祭りをする人々

李京燁

1　喪礼ノリ：儒教的厳粛主義とは異なる破格

死は人間が経験する最も絶対的な出来事である。誰も避けられず、代ることもできない。また、その出来事における前後の世界がまったく異なるので、生者と死者の再会できない別れを体験することになる。このような理由で死はどれとも比較できない衝撃と恐怖を与えている。それで人類が地球上に生存してきて以来、死は最大の問題にならざるを得なかった。しかし、人類は死に苦心してきたもののそれを避けることはできない。生命延長のための努力が続いているものの生者必滅の原則を逆らうことはできない。始皇帝の不死薬の話が伝説にならざるを得ない理由はここにある。このように死は絶対的に近づいてくるので、人類は宗教を通じて死を文化的に受け入れて適応する多様な装置を開発してきた。世界の様々な宗教において、死後の世界の問題に最も重きを置き、核心的な領域として扱う側面からもそれを確認することができる。

死に対処してそれを処理する方式は地域や民族ごとに違う形をもつ。宗教的背景と文化的伝統が違うだけに、喪・葬礼を行う方式がそれぞれ異なるのは当然であろう。無論、ここで言う宗教とは仏教やキリスト教、イスラム教のような「有名な宗教」だけを指し示すのではない。民族ごとに固有の民族宗教がある。このような宗教がそれぞれ違う宗教と行き来してやりとりし、新たに派生する過程を経たので、複雑な様相を帯びている。また、類似の宗教が数千年に及ぶ歴史の中で分化・拡張してきたので、名前は似ているが形式と内容は異なる場合が多々ある。このような状況の中で、死後の世界への考え方や死に直面する思考が異なり、死の儀礼の様子も多様に現れている。

韓国における死の儀礼もまた単一的でなく固定的でもない。伝統的な喪礼だとすれば黄色い喪服を着て頭巾をした様子を思い出したり、格式を備えて酒を注いでおじぎをする手続きを連想したりする場合が多いと思われる。儒教儀礼は生活規範として朝鮮時代に広がり、韓国人の儀礼生活に多大な影響を及ぼした。厳密にいうと儒教は宗教とは言えないが、儀礼においては宗教以上の影響力を及ぼしている。このような理由で儒教式の冠婚葬祭は韓国人に最も馴染みのある伝統の中の一つとして捉えられている。朝鮮時代に全国的に儒教式の礼法遂行を強調し、長期間にわたりそれが全社会的な規範として適用されてきたので、私たちは儒教儀礼を古くて普遍的な伝統だと解釈する傾向にある。

しかし、儒教儀礼だけが全てではない。儒教以前に仏教が長い間影響を及ぼし、仏教が到来する前から存在していた巫教（巫俗）は、今まで民俗宗教として続いている。そして近年は西洋からのキリスト教が広範囲に広まっている。このように歴史的に様々な宗教が共存してきた。時代により特定の宗教が勢力を誇示し、優越的地位から影響を及ぼした場合もあったが、それが全てではない。例えば制度圏から長い間にわたって抑圧を受けた巫教の場合、盛衰を経験してきたが他宗教の影響を受けたり、反対に影響を及ぼしたりして変化しながら民俗宗教として多彩に伝承している。宗教文化史の流れがこのようにあり、韓国人の死生観や死の儀礼もまた一つでなく、互いに複合していて多様である。

韓国における死の儀礼の多様性を示してくれる事例がまさに祭り式喪礼だ。歌舞を以て死者を送る風俗は、韓国における長い間の伝統であり、今でも続く現行の文化である。韓国の宗教伝統を見ると、巫教・仏教・儒教・キリスト教などが共存して互いに影響を及ぼしたり変化したりもして、またそれぞれ異なる姿で伝承していることがわかる。このような宗教伝統と同じく、祭り式喪礼も異なる方式の儀礼と複合して一つの伝統として続いている。

2　喪礼ノリ、その伝承の歴史的脈絡

2－1　古代の記録に登場する喪礼ノリ

高句麗の葬儀関連記録に歌舞を以て死者を送る運柩風俗に関する内容が出てくる。中国の古代歴史書『隋書』東夷伝高麗伝を見ると、「最初と終わりには悲しんで泣くが、葬儀を行うとすぐ太鼓を叩いて踊って音楽を演奏して死者を送る」（初終哭泣 葬即鼓舞作楽以 送之）と記している。この記録は全羅南道珍島と新安などの地で農楽を行って歌舞を以て運喪（ひつぎをかついで葬地にむかうこと）する現行の葬儀と似ている。古代の葬儀風俗が今日まで続いていることを示す重要な資料といえる。祭り式喪礼が持続的な伝統ということを示してくれる。

写真①　歌と踊り、音楽で死者を送る出喪の行列

古代の記録（『隋書』高麗伝）の「初終哭泣 葬即鼓舞作楽以 送之」と通じる、喪礼ノリが古い風俗であることを物語る。

2－2　朝鮮時代の記録と祭り式喪礼を見る支配層の見解

朝鮮王朝時代の資料には喪礼ノリに関する記録がはるかに多い。『朝鮮王朝実録』には民間で長い間伝えられてきた祭り式喪礼に対する言及がみえる。無論、ここでの記録は客観的な記述でなく、民間の風俗ついて儒教的な基準から評価して、伝来の風俗を禁止させて撤廃しなければならないという主張を含んでいる。このような記録は朝鮮時代において続いて出てくる。祭り式喪礼がそれほど民間で幅広く支持を受けていたという事実を語っている。

朝鮮時代の記録では「酒と食べ物を用意して人々に広く接待してムダングッ（巫堂の祭儀）をして雑戯を行って遊ぶ、これを娯屍という」（『朝鮮王朝実録』成宗 9 年 12 月 14 日条）と述べている。その他にも様々な記録で遊びと踊りで喪礼を行っていたことが確認できる。

朝鮮時代の記録を検討してみると、喪家で酒と食べ物で宴を施して歌舞を盛大に行って遊んだが、これに対する支配階層と民間の評価が違っていたことが確認できる。上層部では儒教式礼法に基づいて民間の葬儀風俗を弊風と考えていた。一方、民衆は上層の儒教式葬儀を薄葬といって攻防することもあった(1)。「民俗文化とは固定したまま持続するのではなく、関わりの中で変化して伝承する」ということを示す事例といえる。とにかく、このような伝承脈絡の中で支配階層が主導する儒教式礼法が広く拡散し、伝来の祭り式喪礼ノリは縮小する過程をたどって来た。今は朝鮮半島西南海の地域で見られるが、喪礼ノリは 20 世紀中盤までは全国的に伝承していた。送別祭りは特定地域における個別的な現象でなく普遍的で古い喪礼風俗であり、民俗伝承の複合性と変化像を示す事例として注意深くみる必要がある。

3　村共同体で繰り広げる送別祭り

3－1　パム（夜）タレ：共同体的連帯を示す喪礼民俗

喪家の悲しい雰囲気を慰めるために、村の人々が集まって太鼓とチャングを叩いて歌舞して遊ぶ行楽の場が作られたりする。これを「タレ」または「タルヤ」といって、主に夜に行うので、「パム（夜）タレ」または「パムタルエ」という。パムタレをする時は住民たちどうしで遊ぶが、喪家に経済的余裕がある際には歌い手を招いたりもする。この時、ユクチャ（六字）ベギ（活発な韓国

南道の雑歌の一つ）や短歌または、パンソリのような専門的なうたを行ったりする。

地域によっては「パムタレ」、「パムタリ」、「タリ」、「タルヤ」、「タリェ」ともいう。「パム（夜）」の後ろにくる「タ」の発音は濃音化して「パムッタレ」または「パムッタリ」と強く発音される。したがって微妙に発音は異なるが「パム（夜）+タレ（タリ、タルエ）」となるので、その示すところは同じだといえる。

パムタレ（パムタルエ）の語源が何かは明らかでない。これと関連して崔トグォンは「パムタレ」が「パム（夜）」とタルレダ（なだめる、なぐさめる）の古語である「タルエ달애」の複合語として解釈し、その意を「夜をなだめるノリ（遊び）」と解いたことがある(2)。しかし、意味としては分かり易いが、全羅道方言では「タルレダ（なだめる）」が「タルゲダ」となるので、「タルエ」が「なだめる」という意を持つ古語と言えるのか疑問が残る。さらなる検討が求められる。

韓国西南海の島嶼地域ではこの前まで死者が出ると、村の人々が喪家に集まって喪主を慰めるために歌舞で遊ぶ様子を見ることができた(3)。そして喪頭契・護喪契（契は韓国相互扶助の組織）の構成員かどうかと関係なく、村共同の出来事と見なして喪家を手伝って運喪を行っていた。共同労働と共同ノリの共同体的連帯の中で、運喪・儀礼・ノリなどを行っていた。喪は門中単位の出来事だが共同体的連帯が強いところでは、大概村単位で行われるのが一般的である。パムタレはこのような共同体的基盤の上で成り立つ喪礼ノリといえる。

３－２　タシレギ：喪家で繰り広げる歌舞劇的演戯

珍島では出喪する前に喪家で夜明かしをしながら遊ぶ時、タシレギを演戯して、出喪時には太鼓とチャング、ドラを叩いて歌舞して死者を運喪してきた。無論、いつもそうしたのではなく、ある程度余裕のある家の好喪時にタシレギを演戯した。タシレギは村の喪頭契の遊び屋（ノリクン）によって伝えられた。タシレギを担当した演戯者は喪頭契のノリクンだった。また、配役を充てられない時、居士（本来は俗人だが仏教の法名を持つ人で、男の芸人を一般にいう）や社堂（歌舞して公演していた女性の芸人）のように一定の技量が求められる配役の場合、名のあるタシレギクンを招いて村の喪頭契員と共にタシレギを演戯した。

写真②　朝鮮王朝時代後期における社堂牌ノリ

写真③　珍島タシレギの中の「居士・社堂ノリ」

流浪芸人集団の演戯が西南海の島嶼地域の喪礼ノリに受容されていることを示唆する。喪礼ノリは単なる伝統の持続でなく、交渉と受容を経て躍動的に伝えられてきた。

タシレギという言葉の語源は、「タシナギ（生まれ変わること）」または「タシラク（多侍楽、大勢の人々が集まって一緒に楽しむ）」または「待時レギ（亡者の魂が離れるのを待つ）」からきたと説明される。喪家の悲しい雰囲気を慰めるための状況と関わり、死から始まった喪失を治癒するための意味と関連する名称といえる。

写真④　喪家で公演されている演劇、珍島タシレギ

タシレギは冗談とユーモア、性的な表現が溢れる演劇である。儒教的厳粛主義に縛られない喪礼ノリの伝統を示す。

タシレギは喪家の広場で才談（面白い世間話の類）を繰り広げて、歌舞するノリという特徴を持つ。タシレギは喪家で演戯されるという点が特徴であり、その演戯内容が破格的なので関心を引く。居士・社堂ノリでの性的表現と赤ん坊の出産の意味は、格別に注目に値する。喪家で歌舞して遊ぶことは、死を文化的に受け入れる過程といえる。特に性的な機知にとんだ才談をして赤ん坊の出産を演出することは、死と相反する演劇的設定である。喪家で公演されるタシレギは死からの欠如を性的な活気と新しい生命の出産で克服する意味を持つ。

４「ホモ・パムタレクトス」ー喪礼ノリする人々

「故人と喪主のために深くしみるように遊んでやることが「パムッタレ」なんだ」

新安都草島の喪家の広場で出会ったある老人が筆者に話した言葉だ。学者の理論でもなく本に出てくる説明でもないが、送別祭りの意味をこれ以上によく解説したものはないかと思う。その方の話はパムタレが一般の遊びではないという意味をよく含んでいる。亡者と生者を包括する点でもそうだが、「深くしみる（韓国語のサムチダ）」という表現が言葉の意味を改めて喚起してくれる。「深くしみる」ということは、ある「感情や感じが体や心の中に強く残る」状態をいう。如何に遊べば深くしみるように遊ぶことになるのだろうか。遊びがありふれた時代に多くの人々が過激に遊んでいるが、どのような事例がそれに該当するのか探し出すことは容易ではない。ストレスの発散や、自分の興味を刺戟するための現代人の遊びは、反復的な遊興と消費のパターンから抜け出していない。それらは深くしみるように遊ぶのとは違う。パムタレが近くでよく見られる行楽の場とは異なるということを語ってくれる。

かつてオランダの歴史家ヨハン・ホイジンガ（Johan Huizinga、1872 ～ 1945）は、人間の特質を「遊ぶ存在」と論破したことがある。彼は人間が遊ぶ存在であり、そのような存在の創造的活動が集積されて人類の文化を成し遂げたと述べた。彼によって命名されたホモ・ルーデンス（Homo Ludens）は「遊戯の人間」、すなわち遊ぶ人間を意味する。このように遊びは人間の本源的な特質を説明するキーワードの一つといえる。したがってパムタレ（喪礼ノリ）といっても目新しいものではないかも知れない。しかし、パムタレはいままで捉え切れなかった新しい風景と意味を含んでいる。

死者と別れながら繰り広げるパムタレは、遊びの契機と方式が独特である。パムタレには、ホイジンガが宗教的な遊びから博打やサーカスまで網羅して説明した「競争」、「謀議」、「運」、「めまい」等の範疇と分類では包括できない局面がある。送別祭りの広場では儀礼、飲酒、ユンノリ（韓国式

双六)、花札、グッ、音楽、踊り、演劇、性的な冗談、争いなどが共に繰り広げられる。なぜこのような遊び・行為が総動員されるのだろうか。何のために似合わなさそうな厳粛な儀礼と共に、争い・博打が共存し、手並みを備えた芸人まで立ち上がって芸術的な演戯をあまねく繰り広げるのであろうか。それは深くしみるように遊ぶためである。さらにこの上なく遊ぶためである。送別祭りに出た人々は、歌舞で死者を送りながら、心と最善をつくしてこの上なく手厚く遊ぶ。このように限りなく深くしみるように遊ぶ喪家の夜通しの遊びと歌舞・グッ・演劇、騒がしい運柩行列は、一般の遊びとは異なる特徴を持つ。このような点で「パムタレする人々」は、ホモ・ルーデンスの中でもさらに格別の存在である「ホモ・パムタレクトス」というに値する。

写真⑤　喪家での喪礼ノリ

喪家にはシッキム（洗い）グッとノリが続く。住民は歌と踊ることで死者をなだめ、生者を慰める喪礼ノリを繰り広げる。

「ホモ・パムタレクトス」は深くしみるようにこの上なく遊ぶ人々である。彼らは死による喪失と悲しみを歌舞で克服し、活力のエネルギーで人生を回復しようとする意志を表現する。彼らの送別祭りは、死を個人が体験する個別的で孤立した現象と捉えず、共同体のことと見なして社会的関係の中で喪失感を治癒しようとする社会的演行（パフォーマンス）として繰り広げられる。このような点で送別祭りには、死がもたらした喪失の痛みを芸術的な演戯と社会的関係の中で治癒して現世を肯定する民俗哲学が含まれているといえる。これはホモ・パムタレクトスが繰り広げる深くしみるようにこの上ないノリ演行に含まれた指向といえる。

5 「ホモ・パムタレクトス」に注目する理由

喪礼ノリが今は以前のように活発に行われなくなった。急速な社会変動の中で伝統的な喪礼風俗が変化している。農漁村に若者がいなくて運柩できず、手軽さのために都会地の葬儀場で喪礼を行うことになって送別祭りはもう伝説となりつつある。にもかかわらず、それを流れる水のように受け入れるわけにはいかない。送別祭りのいきさつをまともに理解もせずに、無条件に以前の出来事として取り扱うことはできない。

送別祭りは高句麗の葬儀風俗の記録にも登場するほど古くて、迂余曲折を経て綿々と持続してきた伝統であるが、一般の大衆には見慣れない奇異な風俗と見られてきた。実際はそれ自体が奇異なのではなく、そのように取り扱ってきた認識の歴史によるものといえる。これは長い間持続してきた他者化の過程から始まったものである。近くは近世に流入した外来的基準によって強化された認識でもあるが、朝鮮時代に性理学（朱子学）の支配理念が作り続けた排斥の歴史が濃厚な陰として作用してきた。朝鮮時代支配層が伝来の風俗を弊風と断罪した際、民間ではかえって儒教式葬儀こそが薄葬だと主張して対抗する状況も演出された。しかし、長い間続いてきた他者化の過程の中で送別祭りは、弊風であり淫事であると既定事実化された。そこに 20 世紀以後は外来の価値基準が再び適用されることで、自分たちの伝統を自ら無視して蔑視する自己否定の内面化が形成されてきた。このような事情が働き、祭り式喪礼や草墳（草で墳墓を作った後、後に骨だけを再埋葬する様式）などを異質な見物とみなす外部の視線が気になり、伝承者は伝来風俗の存在を隠す場合さえあった。都市化や産業化という一般的な社会変動だけでなく、自分たちの文化と伝統を他者化してき

た視線が大きく作用してきたのである。これがホモ・パムタレクトスが周辺化されてきたいきさつといえる。

筆者は、送別祭りには人を大事にする人文学の精神が含まれていると考えている。礼法施行を前面に出して伝来の風俗を弊風だと断罪した権力の強圧に臆せずに、「格式中心の薄葬」のかわりに「隣を広く集めて声楽と風流を施して喪礼を行う心優しい喪主」の道を追求してきた人々が存在したからこそ、送別祭りの伝統が持続できた。また、送別祭りは単純な持続でなく、儒教式儀礼と混ざったりして新しい様式を受け入れて現行民俗につながっている。したがって送別祭りには伝承者が自分たちの生活の中で実現してきた文化的交流と躍動性が含まれているといえよう。

一方、いくら意味の深い伝統といっても忙しく生活する現代社会の性格に合わないのでは何の意味もない、と問い直すこともありうる。それはよく接する質問でもある。資本主義的秩序に徹底的に応じて生きてきて、自らを武装する論理でもある。しかし、その質問にはなんらの未来指向も含まれていないと思われる。それでは同意できない。伝統に対するほかの観点が必要である。伝統は現代社会の廃棄物ではない。伝統は、時間に追われて物質文明のシステムに慣れ親しんで、いつの間にかなくした価値を再確認させてくれるということを覚えて頂きたい。私たちは資本を投与して何かを代行させてその代わりに違うことを享受して、それを幸福だと規定して暮らしている。地域の祭りでも有名歌手や芸能人を招請して、それを見物する方式で楽しんでいる。また、喪礼も葬儀場と会社が全てを代行して喪主や弔問客はあまり気を遣わずに状況に対処し、その代わりに手軽さと利便性を享受することになった。これが産業社会の生活方式である。しかし、祭りや儀礼を資本で消費し、その代わりに生死に対するどのような文化的意味と豊かさを得たのだろうか。産業社会が誇るある価値を全面にかかげて、喪失の痛みを社会的関係の中で治癒した送別祭りの価値と意味を消すことはできるだろうか。

筆者は利便性・手軽さ・個人主義を追求する私たちの時代の生活方式のせいで、忘れられた憐憫・共感・感性・連帯の大切さを、送別祭りを通して再確認できると考えている。パムタレをする人々は深くしみるようにこの上なく共感と連帯の行楽の場を繰り広げる人々である。これらの遊びには利潤追求とその対価を以て成否を分ける、今日の計算法では断じて表わすことのできない価値が含まれている。ホモ・パムタレクトスが過去の存在として回顧されないことを願う理由は、まさにここにある。

注

1　李京燁『珍島タシレギ』国立文化財研究所、2004、22～32頁。

2　崔トグォン「新安地方の民俗芸術」、『新安郡の文化遺跡』木浦大学校博物館、1987、458頁。

3　今は農漁村に若い人々が少ないため、村自らが喪礼を行いにくくなっている。韓国社会の一般的な様相と同じく、西南海地域も圏域内の中心地にある葬儀場（葬礼式場）で葬儀を行うので、以前のようにパムタレが村で繰り広げられなくなった。筆者の現地調査経験によると、10 年余り前までは村で繰り広げられるパムタレによく接したが、今は見ることが難しい。

［金廣植訳］

付記

韓国比較民俗学会でお世話になった木浦大学校教授の李京燁さんは、神奈川大学で 1 年の研修を過ごされた。そこで 2015 年 12 月 25 日、東京学芸大学において講演をお願いした。この原稿はその際に書き下ろしてくださったものである。通訳と翻訳を務めてくださった金廣植氏のお力添えにも感謝したい。（石井）

高畑勲「かぐや姫の物語」
―循環する「生」の物語―

安松拓真

1　はじめに

「学習指導要領」に、「生きる力」という言葉が使われたのは、「伝統的な言語文化」という言葉が用いられた頃から、10 年ばかり時を遡る。次なる指導要領改訂を控えたいま、古典文学が「生きる」ことにどのように寄与し、古典文学自身がどのように生きてきたのか、考えなくてはならない。

古典文学を取り巻く逆風の中、2013 年に公開されたのは、高畑勲が監督・脚本を務めた映画作品、「かぐや姫の物語」であった。映画冒頭部でも示されるように、この作品は『竹取物語』を「原作」に据えている。『竹取物語』といえば、現在でも「かぐや姫」などと呼ばれる昔話として、広く知られている古典文学作品の一つに数えることができる。これほどに『竹取物語』が著名なことの要因に、中学 1 年生の国語教科書を挙げなくてはなるまい。「物語の出で来はじめのおや」という言葉を冠して定番教材となっていることには、一つに王朝物語の起源として、一つに古典文学を学ぶ事始めとしての、二重の権威化を見て取ることができる(1)。

「かぐや姫の物語」は一度の頓挫を経てから、更に 8 年もの月日を費やした労作である。筆の味わいを感じさせるような線によるアニメーション技法は、独特の魅力を醸し出している(2)。国内での興業収入などの面では他のスタジオジブリ作品に劣る(3)ものの、海外では高く評価され、2015 年にアカデミー賞アニメーション部門にノミネートされたことは、記憶に新しい。尤も、稿者にはアニメーション表現を吟味するほどの辨えはない。本論で論じる対象とするのは、それらの表現のもとに、何が描かれているのか、いかなる『竹取物語』が再誕しているのか、という点である(4)。

「今は昔、竹取の翁といふ者ありけり」(5)――耳馴れた語りで幕を開ける物語は、『竹取物語』を「原作」に据えていることを明示している。なるほど、「竹取の翁」と呼ばれる人物の様子が、『竹取物語』の本文にしたがって語られていく。だが、「あやしがりて、寄りてみるに」を最後に、語り手は黙することとなる。「筒の中光りたり」と続くところであろうが、そこに生えてきたのは筍であった。以後、語り手が発することばは、全て現代語となる。鑑賞者に訴えかける「いま」のことば、「かぐや姫の物語」は冒頭にして、「いま」の物語であることを表明している。古めかしいことばは黙殺され、新たなことばが紡ぎだす物語こそが、「かぐや姫の物語」である。

かぐや姫の登場は、竹の中からではなく、筍に咲くハスの花の上に描かれる。作品末部において顕著であるが、本作品は、『竹取物語』のもつ神話的・伝承的要素を、多分に仏教的な、阿弥陀信仰に寄せて翻案しているものとみられる。最も印象的なのは、かぐや姫を迎えにくる「天人」の姿が、阿弥陀如来に酷似していることであろう。

はじめに、『竹取物語』と比較しながら、「かぐや姫の物語」がどのような構成となっているか、整理しておきたい。

2　『竹取物語』との関連性

物語序盤の舞台となるのは、四季に彩られた里山の暮らしである。急激に成長するかぐや姫は、豊かな自然の中で急激に成長していく。のちにかぐや姫との恋仲をも思わせることとなる「捨丸」を筆頭とした、木地師の童たちとの交流は、『竹取物語』には一切描かれていない要素である。のちには竹から得た財宝をもとに、翁は都での暮らしを始めることとなるわけであるが、里山時代の

経験はかぐや姫にとって非常に重要な位置を占めていることには、注意を払わねばなるまい。翁のはたらきかけによって、都暮らしをはじめることとなったかぐや姫。『竹取物語』は「この子いと大きになりぬれば」と簡潔に済ませてしまうが、初潮を迎えるさまや裳着の儀式などが丹念に描出される。「なよ竹のかぐや姫」と名付けられることを経て、翁は宴席を設けた。が、かぐや姫はそうした都・官人のしきたりを受け入れることはしない。貴族の侮辱をきっかけとして、空想の中で、かつての里山を求め彷徨する。

『竹取物語』の中核をなす、5 人の貴公子の求婚譚も健在だ。ただし、たとえば求婚を一斉に行い、難題を自ら切り出すなどといった運びは、聊か展開が早い。難題の宝物は、貴公子たちがどれ程にかぐや姫のことを想っているかを表現することばとして登場している。

『竹取物語』では、求婚譚を通してかぐや姫は「「あな、嬉し」と喜びてゐたり」(阿部右大臣に)、「少しあはれと思しけり」(石上中納言に)などと情緒を顕わにしていく。本作においてはむしろ、難題譚を通してかぐや姫は苦悩を深めていく。石上中納言の死を聞いたかぐや姫は、「みんなにせもの！私も…」と悲嘆に暮れる。通常、『竹取物語』は天上で罪を犯した姫の物語として読まれる。だが、「かぐや姫の物語」では、地上において生きることが、罪を重ねる行為として煩悶の元となっていく。

「かぐや姫の物語」でたびたび意識されるのは、かぐや姫の罪の意識である。それは、帝に抱きすくめられて極まったものとなる。「御門に抱きすくめられ、私の心が叫んでしまったのです…もう、ここにはいたくないと！」——翁と媼が差異化され、かぐや姫に貴族の娘としての成功を押し付ける翁像もまた、本作品の特徴としてみられる(6)が、彼らに対して告げるかぐや姫の苦悩は、もはや手遅れになってしまった現実なのであった。

かぐや姫：ああ…そうなのです。私は、生きるために生まれてきたのに。鳥やけもののように…

地上で生きることそのものが、地上で「罪」を重ねていくことに他ならない。生きることを望んだかぐや姫にとっては、里山の暮らしこそが理想化されたものであった。都と里山、地上と月の世界。二つの対比構造は重なり、かぐや姫自身が帰るべき場所は複数化していく。今、ここにある生は罪であるのだが、自らが「帰りたい」と願う場所はいったいどこだというのか。生きることが罪、だという生はそれ自体が皮肉であり、かぐや姫には、いかなる救済も用意されていなかった。

唯一、かぐや姫を救い出すのはかつての遊び友達である捨丸だ。都暮らしをはじめたあとも、何度か捨丸はかぐや姫の前に姿を見せる。だが、月へ帰ることが決まった頃には、捨丸は妻も子も持っており、木地師としての人生を全うしていた。躰を触れながら 2 人が大自然を翔る場面は印象的だが、夢の世界のものとして片付けられてしまう。さながら、神仙譚における遊女を想起させる(7)。

以上、本作品の梗概を述べた。『竹取物語』から離反している、と先に述べたものの、全体的な枠組みは維持しながら、諸要素を付随したものである、というのが適切な評言であろう。細かい場面を取り上げれば、興味深い点は多々あるが、先に述べた仏教思想的な翻案について検討を加える。

3　循環の物語

本作においては、円環・循環が意識される場面が頻出する。「たけのこ」と渾名がつけられたかぐや姫が成長するのは、媼の腕の中で転がるときや、這いつくばりながらも前転するとき、崖から転がり落ちるときであった。貴族文化の指導役・「相模」なる女房に悪戯を仕掛けるかぐや姫は、物語絵巻と思しい絵巻物を転がし、物語世界を際限なく広げていく。宴を抜け出すと、四季が循環するということをかぐや姫は初めて意識する。また、求婚者を退けたのちに花見に行く場面でも、かぐや姫は回転しながら春の景を満喫する。が、その回転が子どもにぶつかって妨げられてからは、その先には人間の生＝年齢を重ねる、身体を変化させるという点において、何の成長も待ち受けてはいない。劇中、かぐや姫は循環することによって成長し、生を全うしようとする。

『竹取物語』においても、生と死の問題は非常に重要なものとして立ち現れる。難題譚のうち、石上中納言は「燕の子安貝」を求めた結果、死ぬこととなってしまった(8)。その中でも、天人が「不死の薬」を帝に渡すことは、極めて重大な事態である。かぐや姫が月へ帰還したのち、「不死の薬」を焼くことによって、地上には死という論理がもたらされるという、一種の神話的な要素を支える要素である(9)。だが、本作品には、「不死の薬」は登場しない。天上、あるいは地上におけ

る死生の問題を書き換えたことの何よりの証左であろう。
死と生の問題をめぐる代替物として、作品中幾度にもわたって歌われる（というより、作品中に登場する歌は、劇後に付された主題歌をのぞいては、この曲のみである）「わらべ歌」が挙げられるのではないか。「わらべ歌」は、本作品における挿入歌であり、里山の子どもたちも口遊むことができる歌である。季節に合わせて歌詞が変わる描写がある(10)が、かぐや姫はなぜか、この地の歌を小さい頃から歌うことができた。しかし、かぐや姫が歌う「わらべ歌」は、子どもたちが知るそれとは少々異なり、曲調はいわゆる短調、琴の旋律を思わせる、古めかしいものである。以下に、媼と２人で「わらべ歌」を歌い、その違いについて言及する場面を引く。

媼：なんだか騒がしいですねえ。私たちも負けずに歌いましょうか。（糸玉を渡して回しながら）♪まわれ　まわれ　まわれよ　水車まわれ　まわってお日さん呼んでこい　まわってお日さん呼んでこい　とり　むし　けもの
2人：草　木　花　春夏秋冬つれてこい　春夏秋冬つれてこい
姫：まわれ　めぐれ　めぐれよ　遙かな時よ　めぐって心を呼び返せ　めぐって心を呼び返せ　とり　むし　けもの　草　木　花　人の情けをはぐくみて　まつとしきかば　今かへりこむ（涙する）
媼：そんな続きがあったの。
かぐや姫：遠い昔、この地から帰ってきた人が、この歌を口ずさむのを、月の都で聞いたのです。（天上の回想、天人が涙する様子）
媼：まあ。
姫：月の羽衣を纏うと、この地の記憶を全て無くしてしまいます。悲しみも、悩みもありません。なのに、歌うたびに、涙が一筋、その人の目から、こぼれるのです。…その不思議さに、なぜか、私の心もしめつけられて。

かぐや姫の言葉からは、昔にもかぐや姫のように地上に降り立った女性がいることが明らかとなる。古文めいた、悲しい旋律とともに歌われる「わらべ歌」は、その当時の記憶が留められたものであり、その歌には涙が付随する。かぐや姫が地上に降り立ったこともまた、繰り返される罪の物語の一つに過ぎなかったということが明らかになるのである。
「まつとしきかば　いまかへりこむ」は、媼が「ほんとうに私を待っていてくれるのなら、すぐにでもここに帰ってきます」と言い換えるが、『百人一首』にも取られる古今集歌、「たち別れ　因幡の山の　峰に生ふる…」の下の句を借用したものとみてよいだろう。かぐや姫は、「ああ…。帰りたい！今すぐに！」と媼に返答するが、いったいどこに帰ろうというのだろうか。生の循環においては、始点も終点もない。
「まわれ」「めぐれ」といった言葉が頻繁に用いられることは、「わらべ歌」が循環する生に向けられた歌であることを示している。劇中末部、かぐや姫が天人に連れていかれる場面では、「わらべ歌」の新たな歌詞が明かされるが、

咲いて実って散ったとて　生まれて育って散ったとて　風が吹き　風が吹き　水車まわり　せんぐりいのちがよみがえる　せんぐりいのちがよみがえる

と、生の循環構造を表したものとなる。かぐや姫が筍から生まれて、地上で生きることを経て再び月へ帰っていくことは、生の循環という意味を帯びて、「わらべ歌」の中に刻み込まれていく。
『竹取物語』でも描かれる「天の羽衣」は、同様にかぐや姫の感情を奪い去るものとして扱われる。

天人：さあ参りましょう。清らかな月の都にお戻りになれば、そのように心ざわめくこともなく、この地の穢れも拭いされましょう。
かぐや姫：穢れてなんかいないわ！喜びも、悲しみも、この地に生きるものは、みんな彩りに満ちる。とり、むし、けもの。草木花。人の情けを……
（羽衣を着せられ、かぐや姫、無表情になる）

「わらべ歌」の歌詞に、「人の情けを」と続けていることは、いったい何を意味しているのだろうか。かぐや姫は、「遠い昔」の別人が歌っている歌だとしているが、物悲しい旋律を携えた「わらべ歌」の方にこそ、かぐや姫の地上の記憶は集約されることとなる。月へ帰っていく場面、羽衣を纏って記憶も感情も失ったはずのかぐや姫は、地球を振り返りながら涙を浮かべる。最後に月に浮かぶのは、かぐや姫が赤ん坊であった頃の姿であり、新たな生の到来を予感させる。

最後に「人の情けを」が口を衝いて出てしまうことなどを鑑みても、かつて地上に降り立った者というのもまた、かぐや姫自身ではなかったのだろうか。繰り返される生は、古語的な時代と現在の時空とが対比されながら、新たな生の到来をも保証する。「いま」上映された生は、何度も何度も繰り返される、循環する生の物語の一度きりでしかない。だが、地上に残された者たちの記憶には、かぐや姫は残され続けるのだろう。いつかまた、地上に降り立ったときのかぐや姫の生は、また異なったものになるに違いない。

福嶋亮大氏は、次のように述べている。

> 竹取の翁はかぐや姫の気持ちを分かってやれなかったことを悔やみ、かぐや姫はこの世にはもういたくないと願ったせいで月への帰還を余儀なくされ、やはり大いに後悔する。本当ならばもっと幸せな成長があったはずなのにという身を裂く悔しさ、それに続く諦めが、『かぐや姫の物語』の主旋律となっている(11)。

生きることは苦しいことであるし、ましてやそれが循環する生の 1 回であったのなら、「かぐや姫の物語」におけるかぐや姫の一生は、後悔や苦悩に満ちたものであった。「わらべ歌」の記憶は、本作で描かれる生では書き換えられることはなく、おそらく、かぐや姫が月で口遊むのは、いにしえの「わらべ歌」であろう。

六道輪廻という言葉にあるが如く、循環する生のうちには、苦しみに満ちたものも含まれるはずである。「かぐや姫の物語」が描く生は、決して理想的なものではない。だが、むしろそういった苦悩こそが人生なのだと。或いは、いつの世も変わらぬ苦悩こそが、生きるということなのだと。本作は、『竹取物語』を原作としながら、「いま」生きることの苦しさをこそ、肯定する作品として描かれている。

4　おわりに

先の「わらべ歌」で、「まつとしきかば…」の引歌においては、男性と子どもが 1 人ずつ、寄り添って月を眺めている場面が想起されているが、劇中に該当する人物は思い当たらない。これは、かぐや姫が歩んできた生とかかわりがないように思える。

木村朗子氏は、当該場面に、物語外の記憶としての「東日本大震災の惨禍」を読む。

> 多くの日本人は極楽往生を望みながら、いのちが輪廻することを信じてもいる。本作もまた仏教的な教義をつきぬけて、死者の魂は、この地にふたたび生まれくるいのちとして示されたとみてもよいだろう。そこに震災のイメージを重ねるとき、『かぐや姫の物語』は失われたいのちへの鎮魂歌でもあるし、精一杯生きることを励ます歌でもあるだろう(12)。

「かぐや姫の物語」は、時代を閉じ込めた作品でもあった。付言しておくならば、翁の声優を務めた役者・地井武男氏は本作が遺作となったが、これはプレスコ（予め声優の声を録音し、絵を合わせる手法）という手法を取ったためで、まさに「いま」の物語として、当時にしかなしえなかった特異性を有した作品として、世に送り出されたのである。それはもはや、『竹取物語』であって『竹取物語』でなく、循環する生の物語としての、新たな「かぐや姫の物語」だ。

最後に、もう少し広い見通しをもって、公開から 3 年目を迎える「いま」の見解を述べておきたい。冒頭において、本作の興業収入が芳しくなかったことを述べたが、本作はたしかに、数あるスタジオジブリ作品のうちでも、国内での評価は低い部類に入る。古典そのものの市民権のゆくえ、スタジオジブリ自体のブランド力の低下、或いは宣伝の方法……。〈売れない〉という現象は、本作の評価軸にとって最も過酷なもので、引き受けていかなければならない事実である。

しかし、こうは考えられないだろうか。『竹取物語』ではない、ことが、現代の日本社会において〈ウケない〉原因であると。冒頭の耳馴れた語りは、大半の鑑賞者にとって、かつての教室で響いた古典事始めとしての『竹取物語』と結び付く。ならば、その語りから離反してしまう本作は、いったいどこに位置付けられようというのか。古典への興味がない者と、古典を古典化して維持し続けた者。どちらの層にとっても、本作の魅力は、見ずしても分かるようなところにはなかったのかもしれない。(事実、「金曜ロードショー」放送時には帝の顎が通常より長大に描かれることが、しばしば Twitter 等で話題になるように思う。古典に興味の無い者にとって、強烈な差異こそが本作の魅力として抽出される。)

『竹取物語』は今後も権威化された古典として在り続けることを、「かぐや姫の物語」は保証してしまった。原作は今も書きかえられず、音読され続ける冒頭部こそが、古典の最たるものとして、この国に広まっていくのだろうか。古典は「いま」のものを抱えてしまっては、古典たりえないのか――。教育という場、古典という学問、両者に関心があるからこそ、そのようなことを考えてしまうのである。

注

1 定番教材について考察した近年の論考に、幸田国広「「定番教材」の誕生―「羅生門」教材研究史の空隙―」(『国語科教育』74 2013 年 9 月)などがある。教育は、〈古典化〉――ある文学作品を古典として権威化する場として機能する(ハルオ・シラネ、鈴木登美編『想像された古典』(新曜社 1999 年)を参考のこと)。ましてや『竹取物語』は、漢籍や上代という前時代を跳躍し、生徒たちに「はじめの古典」として現前しているのである。この問題は、小学校教育における古典教育までも視野に入れなくては論じられないが、本稿の問題意識からは外れるため、詳述しない。

2 細馬宏通「線と面 『かぐや姫の物語』がもたらしたアニメーション史の新しい地平」(『ユリイカ』45 巻 17 号 2013 年 12 月)。また、その製作過程やアニメーション技法などは、『美術手帖』66 巻 1 月号(2014 年 1 月)において詳しく明かされている。高畑氏自身はアニメーションのルーツを中世絵巻に探っており、注目される。

3 製作費 50 億円に対して、一般社団法人日本映画製作者連盟の「映連データベース」(http://db.eiren.org/)が公表している本作の興行収入は 24.7 億円。たとえば前年の『風立ちぬ』は 120.2 億円であるから、近年のスタジオジブリ作品の中でも極めて低い部類に属する。国内での評価が芳しくなかったことを、映画の出来に求めるか、それとも『竹取物語』そのものの影響力・有引力の乏しさによるものか。

4 本論で度々引く 2 冊の雑誌に載る対談・インタビュー記事のほか、高畑氏自身が本作で表現したかったことについて言及しているものは多い。が、本論は監督・脚本―映画と作家―作品の関係性に擬えて、高畑氏自身の言説を引くことはしない。映画から読み取れることこそが読者に読まれる『竹取物語』にとって大事なことであろう。

5 『竹取物語』の引用は室伏信助訳注『新版 竹取物語』(角川ソフィア文庫 2001 年)による。また、「かぐや姫の物語」の場面紹介は、稿者が私に書き起こしてある。

6 翁・媼の位置づけの違いもまた、本作における特徴の一つに数え得る。媼は早くから都での貴族的な暮らしを放棄し、かぐや姫の心情にも寄り添う。一方の翁は、「かぐや姫の成長を願って」と、望まぬ結婚を「女の幸せ」として押し付け続ける。本作においては、媼の母権性こそがかぐや姫を救済する要素として強調される。

7 『万葉集』などにも多大な影響を与えた漢籍、『遊仙窟』を思わせる趣向である。不死の薬が登場することからも、伊藤清司『かぐや姫の誕生 古代説話の起源』(講談社 1973 年)は『竹取物語』の始原に神仙思想を指摘する。図らずか、「かぐや姫の物語」では、捨丸を恋う場面はいずれも一睡の夢のごとく消えてしまう。

8 「かぐや姫の物語」では、燕の糞が燕の子どもになっており、石上中納言の死が生と隣接していることを表象する。

9 保立道久『かぐや姫と王権神話』(洋泉社 2010 年)。

10 里山の場面、秋の場合には全く異なる歌詞で歌われる。

11 福嶋亮大「神の成長」(『ユリイカ』45 巻 17 号 2013 年 12 月)。

12 木村朗子「前世の記憶」(『ユリイカ』45 巻 17 号 2013 年 12 月)。

編集後記

平成26年度と平成27年度の2年間、広域科学教科教育学研究経費に採択された「国際化時代を視野に入れた文化と教育に関する総合的研究」の報告書である。本プロジェクトは、石井正己（代表）、黒石陽子、君塚仁彦、橋村修の4人で進めてきた。この報告書は、平成27年度に実施した2年次の事業について、一般の研究費を使って印刷するものである。

フォーラムのプログラムを引用して、本書に収録した内容と対応できるようにしておく。

東京学芸大学フォーラム（第1部）　中国における歴史・文化・教育

日　程　2015年11月14日（土）　10:30～12:00
会　場　東京学芸大学　W110教室
内　容　研究発表
清朝康熙年間の北京における回漢関係―『岡志』を中心として―
一橋大学大学院博士課程　宮島泉
在満日本人子弟用『満洲補充読本』と近代文学作家
東京学芸大学大学院博士課程　船越亮佑
『談論新篇』と満鉄中国語検定について　東京学芸大学大学院博士課程　楊鉄錚
司会　東京学芸大学大学院修士課程　安松拓真

東京学芸大学フォーラム（第2部）　日本人が見たアジアの植民地

日　程　2015年11月14日（土）　13:00～17:00
会　場　東京学芸大学　W110教室
内　容　趣旨　日本人が書いた植民地紀行　東京学芸大学教授　石井正己
記念講演　『世界の果てのこどもたち』が生まれるまで　作家　中脇初枝
記念講演　薄田斬雲が見た朝鮮　韓国・全南大学校教授　金容儀
シンポジウム　日本人が見たアジアの植民地
漱石の満洲、虚子の朝鮮　東京学芸大学教授　石井正己
上海を訪れた日本人の紀行　中国・上海理工大学講師　楊静芳
伝説の描く歌枕的「風景」の限界―旅行雑誌を中心に―　千葉大学非常勤講師　野村典彦
司会　東京学芸大学准教授　橋村修

第2部の「植民地と紀行文」のテーマは、今後のプロジェクトでも発展させる計画である。

このフォーラムの推進と並行して大学院の授業で進めてきた教科書研究については、研究報告『時の扉』第34号（平成28年3月）に、「小特集・カリフォルニアで編纂された日本語読本」として編む計画である。それは次のような内容を予定している。

『加州読本』におけるアメリカの偉人教材について　室町翔馬
加州読本の唱歌について　井川みなみ
戦前カリフォルニア州の日本語教科書における国定読本教材　船越亮佑
『加州読本』の教材採録態度について――非・国定読本の出典から　安松拓真
米国加州教育局検定『日本語読本』における教材配列について　古明地樹

また、昨年度に実施した「帝国主義・植民地主義と博物館」は増補・再編して、勉誠出版から、石井正己編『博物館という装置―帝国・植民地・アイデンティティ―』（仮題）と題して発刊する予定である。その内容は、次のようになっている。

序――なぜ帝国主義・植民地主義と博物館を問うのか　石井正己

Ⅰ　帝国主義の欲望を担った博物館

「帝国」という空間における博物館を考える　中見立夫

帝国主義的博物館に刻印された「欲望の社会史」　全京秀

Ⅱ　帝国日本で生まれた博物館の歴史

奈良の古物をめぐるイメージとナショナリズム――正倉院御物を中心に　角南聡一郎

　コラム　森鷗外と帝室博物館　石井季子

渋沢敬三の「日本産業史博物館」構想にみる農林水産業への眼差し　橋村修

保谷の民族学博物館から千里の国立民族学博物館へ　石井正己

Ⅲ　帝国日本が営んだ各地の植民地博物館

台湾総督府博物館の歴史　日下部龍太

植民地期朝鮮における博物館の展開と朝鮮人　金廣植

樺太庁博物館にみる植民地と郷土像　鈴木仁

「満洲国」の博物館事業と帝国主義・植民地主義　大出尚子

Ⅳ　帝国の進出と収集されたコレクション

ロシア帝国の成立とクンストカメラ＝ピョートル大帝人類学民族学博物館（ＭＡＥ）のアイヌコレクション　アンドレイ・ソロコフ

ロシア帝国と植民地文化――カムチャダルの犬橇に寄せて　荻原眞子

「帝国」を逸脱する視線――南方熊楠の大英博物館における筆写作業をめぐって　松居竜五

　コラム　柳田国男とヨーロッパ博物館

Ⅴ　ローカルな博物館とグローバルな博物館

ドイツ・フォークトラント地方の地域おこしと野外博物館　加賀美雅弘

　コラム　カッセル・グリム兄弟博物館とユネスコ世界記憶遺産　虎頭惠美子

ヨーロッパ・地中海文明博物館の開館　出口雅敏

　コラム　海外移住資料館の視角　松田潤治郎

　コラム　彝族と博物館、彝族の博物館　松岡格

Ⅵ　文化財返還の根拠と歴史を逆なでする博物館

日本の外地朝鮮統治と博物館、古蹟発掘と文化財　崔錫栄

植民地主義と博物館・博物館学　君塚仁彦

なお、平成27年度このプロジェクトに配分された金額は633,000円であった。（石井）

平成27年度広域科学教科教育学研究経費報告書

国際化時代を視野に入れた文化と教育に関する総合的研究

平成28年（2016）2月29日発行（200部）

研究代表者　石井正己
発行所　東京学芸大学
郵便番号184－8501
東京都小金井市貫井北町4－1－1
東京学芸大学　石井正己研究室